

# 土木工事施工管理基準

平成 24 年 6 月

広島県

## 土木工事施工管理基準

この土木工事施工管理基準（以下、「管理基準」とする。）は、土木工事共通仕様書（平成24年6月）、第1編 1-1-23 施工管理」に規定する土木工事の施工管理及び規格値の基準を定めたものである。

### 1. 目的

この管理基準は、土木工事の施工について、契約図書に定められた工期、工事目的物の出来形及び品質規格の確保を図ることを目的とする。

### 2. 適用

この管理基準は、広島県が発注する土木工事について適用する。

ただし、設計図書に明示されていない仮設構造物等は除くものとする。また、工事の種類、規模、施工条件等により、この管理基準によりがたい場合、または、基準、規格値が定められていない工種については、監督職員と協議の上、施工管理を行うものとする。

### 3. 構成

	工程管理
施工管理	出来形管理
（工事写真を含む）	品質管理

### 4. 管理の実施

- (1) 受注者は、工事施工前に、施工管理計画及び施工管理担当者を定めなければならない。
- (2) 施工管理担当者は、当該工事の施工内容を把握し、適切な施工管理を行わなければならない。
- (3) 受注者は、測定（試験）等を工事の施工と並行して、管理の目的が達せられるよう速やかに実施しなければならない。
- (4) 受注者は、測定（試験）等の結果をその都度管理図表等に記録し、適切な管理のもとに保管し、監督職員の請求に対し速やかに提示するとともに、工事完成時に提出しなければならない。

### 5. 管理項目及び方法

#### (1) 工程管理

受注者は、工事内容に応じて適切な工程管理（ネットワーク、パーチャート方式など）を行うものとする。但し、応急処理又は維持工事等の当初工事計画が困難な工事内容については、省略できるものとする。

#### (2) 出来形管理

受注者は、出来形を出来形管理基準に定める測定項目及び測定基準により実測し、設計値と実測値を対比して記録した出来形管理図表を作成し管理するものとする。

#### (3) 品質管理

受注者は、品質を品質管理基準に定める試験項目、試験方法及び試験基準により管理するも

のとする。

この品質管理基準の適用は、試験区分で「必須」となっている試験項目は、全面的に実施するものとする。

また、試験区分で「その他」となっている試験項目は、特記仕様書で指定するものを実施するものとする。

## 6. 規格値

受注者は、出来形管理基準及び品質管理基準により測定した各実測（試験・検査・計測）値は、すべて規格値を満足しなければならない。

## 7. その他

受注者は、工事写真を施工管理の手段として、各工事の施工段階及び工事完成後明視できない箇所の施工状況、出来形寸法、品質管理状況、工事中の災害写真等を写真管理基準により撮影し、適切な管理のもとに保管し、監督職員の請求に対し速やかに提示するとともに、工事完成時に提出しなければならない。

(例) 平成 年度 ○○工事総合工程表 業者名

	工 種	種 別	数 量	換算率	所要日数	月 別					摘 要	
						5	6	7	8	9		10
工 程 実 績 計 画 表	土 工	切 土	20,000㎡	20	60	7000(5.1) 7000(5.2)	7000(5.1) 7000(5.2)	6000(4.8)				
		盛 土	30,000㎡	8	80	7000(1.0) 7000(1.0)	7000(1.0) 7000(1.0)	8000(1.7)	6000(1.0)	2000(0.3)		
	擁 壁	重力式擁壁	100m 1000㎡	26	100	—						
		ブロック積擁壁	1000㎡	23	50			—				
	排 水	側 溝	500m	7	10				—			
		集水桝	10ヶ所	3	30							
		函 渠	20m	0	30							
	雑工事	支道取付	5ヶ所	2	10					—		
	仮 設	防護柵	200m	4	7	—						
		山留工	20m	2	4				—			
総 合 ( 金 額 ) 工 程					100	(5)	(23)	(51)	(78)	95	100	
記 事												

※記入要領  
上段は予定数量を記入し(月別)換算出来高率を( )書で記入する。  
下段は実績数量を記入する。  
変更指示があった時点で変更数量により予定を組み替える。  
この時点において、数量が増大し工期的に不可能な場合は協議して工期の延期をする。

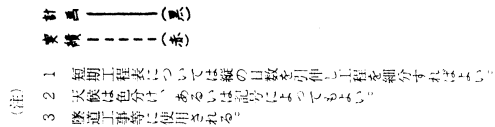
工程の算出は直接工事費(指定仮設の含める)までの請負費によりおのおの請負者側で算出するが指示票による増減があった場合はその都度請負者側で見積り請負費の増減により組み替えて率を計上する。(10%程度の変更指示で訂正すること。)

又算出根拠は整理しておくこと。  
総合工程は種別出来高換算率の合計で月別換算率＝ $\frac{\text{種別工事費}}{\text{直接工事費}}$

は累計で計上する。  
工種は雑工事までとするが、指定仮設等特に工程に影響がある仮設については記載する。  
工種、種別、数量についてはあらかじめ監督職員と協議して作成する。



○○○○○○○工事 短期工程表 (参考例-2)



( )	( )
總計	總計
———	- - -

備考 1. この工程表は段取が工程を支配するものに使用される。  
2. 天候は色分け記号をよってよい。





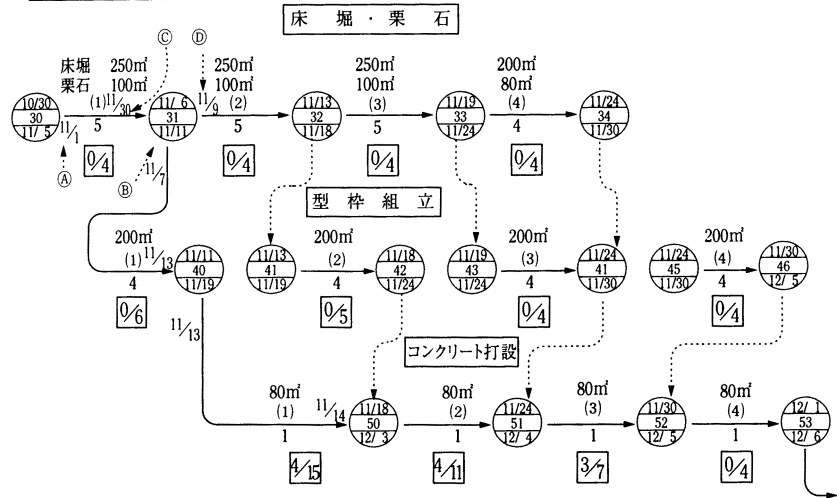
(参考例-7)

[illegible]

歴日盛りに合わせて表示してあるため、最早開始時刻と最遅完了時刻は書かなく  
〔 〕は余裕日数で(フリーフロート)で( )は余裕日数(トータルフロート)である。

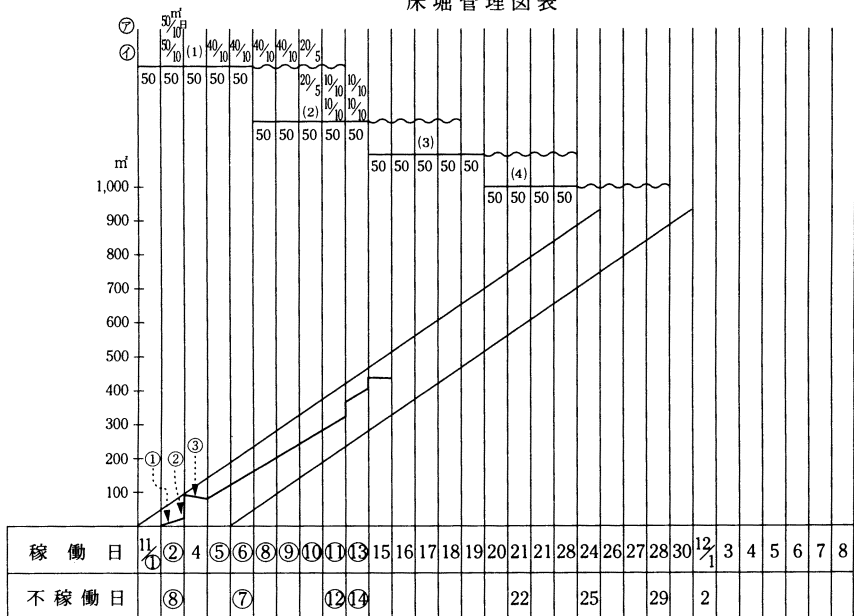
# 2) 実績の記入法

・ネットワーク



・管理図表

床掘管理図表



【第1編 共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第2章 土工						
第3節 河川土工・海岸土工・砂防土工	2-3-2		掘削工			1- 1
	2-3-3		盛土工			1- 1
	2-3-4		盛土補強工	補強土（テールアルメ）壁工法		1- 1
				多数アンカー式補強土工法		1- 1
				ジオテキスタイルを用いた補強土工法		1- 1
	2-3-5		法面整形工	盛土部		1- 2
	2-3-6		堤防天端工			1- 2
第4節 道路土工	2-4-2		掘削工			1- 2
	2-4-3		路体盛土工			1- 3
	2-4-4		路床盛土工			1- 3
	2-4-5		法面整形工	盛土部		1- 3
第3章 無筋、鉄筋コンクリート						
第7節 鉄筋工	3-7-4		組立て			1- 3

【第3編 土木工事共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第2章 一般施工						
第3節 共通の工種	2-3-4		矢板工（指定仮設・任意仮設は除く）	鋼矢板		1- 4
				軽量鋼矢板		1- 4
				コンクリート矢板		1- 4
				広幅鋼矢板		1- 4
				可とう鋼矢板		1- 4
	2-3-5		縁石工	縁石・アスカーブ		1- 4
	2-3-6		小型標識工			1- 4
	2-3-7		防止柵工	立入防止柵		1- 5
				転落（横断）防止柵		1- 5
				車止めポスト		1- 5
	2-3-8	1	路側防護柵工	ガードレール		1- 5
		2	路側防護柵工	ガードケーブル		1- 5
	2-3-9		区画線工			1- 6
	2-3-10		道路付属物工	視線誘導標		1- 6
				距離標		1- 6
	2-3-11		コンクリート面塗装工			1- 6
	2-3-12	1	プレテンション桁製作工（購入工）	けた橋		1- 7
		2	プレテンション桁製作工（購入工）	スラブ桁		1- 7
	2-3-13	1	ボストンション桁製作工			1- 7
		2	プレキャストセグメント桁製作工	（購入工）		1- 8
	2-3-14		プレキャストセグメント主桁組立工			1- 8
	2-3-15		PCボックス製作工			1- 8
	2-3-16	1	PC箱桁製作工			1- 9
		2	PC押し出し箱桁製作工			1- 9
	2-3-17		根固めブロック工			1- 9
	2-3-18		沈床工			1- 10
	2-3-19		捨石工			1- 10
	2-3-22		階段工			1- 10
	2-3-24	1	伸縮装置工	ゴムジョイント		1- 10
		2	伸縮装置工	鋼製フィンガージョイント		1- 11
	2-3-26	1	多自然型護岸工	巨石張り、巨石積み		1- 11
		2	多自然型護岸工	かごマット		1- 11
	2-3-27	1	羽口工	じゃかご		1- 12
		2	羽口工	ふとんかご、かご枠		1- 12
	2-3-28		プレキャストカルバート工	プレキャストボックス工		1- 12
				プレキャストパイプ工		1- 12

【第3編 土木工事共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第3節 共通の工種	2-3-29	1	側溝工	プレキャストU型側溝		1- 13
				L型側溝工		1- 13
				自由勾配側溝		1- 13
				管渠		1- 13
	2-3-30	2	側溝工	場所打水路工		1- 13
		3	側溝工	暗渠工		1- 13
第4節 基礎工	2-3-31		集水柵工			1- 14
	2-3-31		現場塗装工			1- 14
	2-4-1		一般事項	切込砂利		1- 15
				砕石基礎工		1- 56
				割ぐり石基礎工		1- 15
				均しコンクリート		1- 15
	2-4-3	1	基礎工（護岸）	現場打		1- 15
		2	基礎工（護岸）	プレキャスト		1- 16
	2-4-4	1	既製杭工	既製コンクリート杭		1- 16
				鋼管杭		1- 16
				H鋼杭		1- 16
	2-4-5	2	既製杭工	鋼管ソイルメント杭		1- 16
						1- 16
	2-4-6		場所打杭工			1- 16
	2-4-7		深礎工			1- 17
	2-4-8		オープンケーソン基礎工			1- 17
	2-4-9		ニューマチックケーソン基礎工			1- 17
	2-4-9		鋼管矢板基礎工			1- 18
第5節 石・ブロック積（張）工	2-5-3	1	コンクリートブロック工	コンクリートブロック積		1- 18
				コンクリートブロック張り		1- 18
		2	コンクリートブロック工	連節ブロック張り		1- 18
	2-5-4	3	コンクリートブロック工	天端保護ブロック		1- 19
			緑化ブロック工			1- 19
第6節 一般舗装工	2-5-5		石積（張）工			1- 19
	2-6-7	1	アスファルト舗装工	下層路盤工		1- 20
		2	アスファルト舗装工	上層路盤工（粒度調整路盤工）		1- 20
		3	アスファルト舗装工	上層路盤工（セメント（石灰）安定処理工）		1- 21
		4	アスファルト舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 21
		5	アスファルト舗装工	基層工		1- 22
		6	アスファルト舗装工	表層工		1- 22
	2-6-8	1	半たわみ性舗装工	下層路盤工		1- 23
		2	半たわみ性舗装工	上層路盤工（粒度調整路盤工）		1- 23
		3	半たわみ性舗装工	上層路盤工（セメント（石灰）安定処理工）		1- 24
		4	半たわみ性舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 24
		5	半たわみ性舗装工	基層工		1- 24
		6	半たわみ性舗装工	表層工		1- 24

【第3編 土木工事共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第6節 一般舗装工	2-6-9	1	排水性舗装工	下層路盤工		1- 25
		2	排水性舗装工	上層路盤工（粒度調整路盤工）		1- 25
		3	排水性舗装工	上層路盤工（セメント（石灰）安定処理		1- 25
		4	排水性舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 26
		5	排水性舗装工	基層工		1- 26
		6	排水性舗装工	表層工		1- 26
	2-6-10	1	透水性舗装工	路盤工		1- 27
		2	透水性舗装工	表層工		1- 27
	2-6-11	1	グースアスファルト舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 28
		2	グースアスファルト舗装工	基層工		1- 28
		3	グースアスファルト舗装工	表層工		1- 28
	2-6-12	1	コンクリート舗装工	下層路盤工		1- 29
		2	コンクリート舗装工	粒度調整路盤工		1- 29
		3	コンクリート舗装工	セメント（石灰・瀝青）安定処理工		1- 30
		4	コンクリート舗装工	アスファルト中間層		1- 30
		5	コンクリート舗装工	コンクリート舗装版工		1- 31
		6	コンクリート舗装工	転圧コンクリート版工（下層路盤工）		1- 31
		7	コンクリート舗装工	転圧コンクリート版工（粒度調整路盤工）		1- 31
		8	コンクリート舗装工	転圧コンクリート版工（セメント（石灰・瀝青）安定処理工）		1- 32
		9	コンクリート舗装工	転圧コンクリート版工（アスファルト中間層）		1- 32
		10	コンクリート舗装工	転圧コンクリート版工		1- 32
	2-6-13	1	薄層カラー舗装工	下層路盤工		1- 33
		2	薄層カラー舗装工	上層路盤工（粒度調整路盤工）		1- 33
		3	薄層カラー舗装工	上層路盤工（セメント（石灰）安定処理工）		1- 34
		4	薄層カラー舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 34
		5	薄層カラー舗装工	基層工		1- 34

【第3編 土木工事共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第6節 一般舗装工	2-6-14	1	ブロック舗装工	下層路盤工		1- 35
		2	ブロック舗装工	上層路盤工（粒度調整路盤工）		1- 35
		3	ブロック舗装工	上層路盤工（セメント（石灰）安定処理工）		1- 36
		4	ブロック舗装工	加熱アスファルト安定処理工		1- 36
		5	ブロック舗装工	基層工		1- 36
	2-6-15		路面切削工			1- 37
	2-6-16		舗装打換え工			1- 37
	2-6-17		オーバーレイ工			1- 37
第7節 地盤改良工	2-7-2		路床安定処理工			1- 38
	2-7-3		置換工			1- 38
	2-7-4		表層安定処理工	サンドマット海上		1- 39
	2-7-5		パイルネット工			1- 39
	2-7-6		サンドマット工			1- 39
	2-7-7		パーチカルドレーン工	サンドドレーン工		1- 40
				ペーパードレーン工		1- 40
				袋詰式サンドドレーン工		1- 40
	2-7-8		締固め改良工	サンドコンパクションパイル工		1- 40
	2-7-9		固結工	粉末噴射攪拌工		1- 40
				高圧噴射攪拌工		1- 40
				スラリー攪拌工		1- 40
				生石灰パイル工		1- 40
第10節 仮設工	2-10-5	1	土留・仮締切工	H鋼杭 鋼矢板		1- 41 1- 41
		2	土留・仮締切工	アンカー工		1- 41
		3	土留・仮締切工	連節ブロック張り工		1- 41
		4	土留・仮締切工	締切盛土		1- 41
		5	土留・仮締切工	中詰盛土		1- 42
	2-10-9		地中連続壁工（壁式）			1- 42
	2-10-10		地中連続壁工（柱列式）			1- 42
	2-10-22		法面吹付工		第3編2-14-3吹付け工	1- 55
第11節 軽量盛土工	2-11-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第12節 工場製作工（共通）	2-12-1	1	一般事項	鑄造費（金属支承工）		1- 43
		2	一般事項	鑄造費（大型ゴム支承工）		1- 44
		3	一般事項	仮設材製作工		1- 45
		4	一般事項	刃口金物製作工		1- 45
	2-12-3	1	桁製作工	仮組検査を実施する場合		1- 46
				シミュレーション仮組検査を実施する場合		1- 46
		2	桁製作工	仮組検査を実施しない場合		1- 48
		3	桁製作工	鋼製えん堤製作工（仮組立時）		1- 49

【第3編 土木工事共通編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第12節 工場製作工（共通）	2-12-4		検査路製作工			1- 49
	2-12-5		鋼製伸縮継手製作工			1- 49
	2-12-6		落橋防止装置製作工			1- 50
	2-12-7		橋梁用防護柵製作工			1- 50
	2-12-8		アンカーフレーム製作工			1- 50
	2-12-9		プレビーム用桁製作工			1- 51
	2-12-10		鋼製排水管製作工			1- 51
	2-12-11		工場塗装工			1- 53
第13節 橋梁架設工	2-13		架設工（鋼橋）	クレーン架設		1- 53
				ケーブルクレーン架設		1- 53
				ケーブルエレクション架設		1- 53
				架設桁架設		1- 53
				送出し架設		1- 53
				トラベラークレーン架設		1- 53
	2-13		架設工（コンクリート橋）	クレーン架設		1- 54
				架設桁架設		1- 54
			架設工支保工	固定		1- 54
				移動		1- 54
			架設桁架設	片持架設		1- 54
				押出し架設		1- 54
第14節 法面工（共通）	2-14-2	1	植生工	種子散布工		1- 54
				張芝工		1- 54
				筋芝工		1- 54
				市松芝工		1- 54
				植生シート工		1- 54
				植生マット工		1- 54
				植生筋工		1- 54
				人工張芝工		1- 54
				植生穴工		1- 54
				植生基材吹付工		1- 54
				客土吹付工		1- 54
	2-14-3		吹付工（仮設を含む）	コンクリート		1- 55
				モルタル		1- 55
	2-14-4	1	法枠工	現場打法枠工		1- 56
				現場吹付法枠工		1- 56
	2-14-6	2	法枠工	プレキャスト法枠工		1- 56
				アンカー工		1- 56
第15節 擁壁工（共通）	2-15-1		一般事項	場所打擁壁工		1- 57
	2-15-2		プレキャスト擁壁工			1- 57
	2-15-3		補強土壁工	補強土（テールアルメ）壁工法		1- 58
				多数アンカー式補強土工法		1- 58
				ジオテキスタイルを用いた補強土工法		1- 58
	2-15-4		井桁ブロック工			1- 58
第16節 浚渫工（共通）	2-16-3	1	浚渫船運転工	ポンプ浚渫船		1- 59
		2	浚渫船運転工	グラブ浚渫船		1- 59
第18設 床版工	2-18-2		床版工			1- 60

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第1章 築堤・護岸						
第3節 計量盛土工	1-3-1		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 地盤改良工	1-4-2		表層安定処理工		第3編2-7-4表層安定処理	1- 39
	1-4-3		パイルネット工		第3編2-7-5パイルネット	1- 39
	1-4-4		バーチカルドレーン工		第3編2-7-7バーチカルドレーン工	1- 40
	1-4-5		締固め改良工		第3編2-7-8締固め改良工	1- 40
	1-4-6		固結工		第3編2-7-9固結工	1- 40
第5節 護岸基礎工	1-5-3		基礎工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	1-5-4		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
第6節 矢板護岸工	1-6-3		笠コンクリート工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	1-6-4		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
第7節 法覆護岸工	1-7-3		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	1-7-4		護岸付属物工			1- 61
	1-7-5		緑化ブロック工		第3編2-5-4緑化ブロック	1- 3
	1-7-6		環境護岸ブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	1-7-7		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
	1-7-8		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	1-7-9		多自然型護岸工	巨石張り	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
				巨石積み	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
				かごマット	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
	1-7-11		吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	1-7-11		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	1-7-12		覆土工		第1編2-3-5法面整形工	1- 2
	1-7-13		羽口工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				かご枠	第3編2-3-27羽口工	1- 5
				連節ブロック張り	第3編2-5-3-2連節ブロック張り	1- 5
第8節 擁壁護岸工	1-8-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 5
	1-8-4		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁壁工	1- 5
第9節 根固め工	1-9-3		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロック	1- 5
	1-9-5		沈床工		第3編2-3-18沈床工	1- 6
	1-9-6		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 6
	1-9-9		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 6
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 6
第10節 水制工	1-10-3		沈床工		第3編2-3-18沈床工	1- 7
	1-10-4		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 7
	1-10-5		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 7
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 8
	1-10-8		杭出し水制工			1- 8
第11節 付帯道路工	1-11-3		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 8
	1-11-5		アスファルト舗装工		第3編2-6-7アスファルト舗装工	1- 9
	1-11-6		コンクリート舗装工		第3編2-6-12コンクリート舗装工	1- 9
	1-11-7		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 9
	1-11-8		ブロック舗装工		第3編2-6-14ブロック舗装	1- 35
	1-11-9		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	1-11-10		集水桝工		第3編2-3-30集水桝工	1- 14
	1-11-11		縁石工		第3編2-3-5縁石工	1- 4
	1-11-12		区画線工		第3編2-3-9区画線工	1- 6



【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第12節 付帯道路施設工	1-12-3		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 6
	1-12-4		標識工		第3編2-3-6 小型標識工	1- 4
第13節 光ケーブル配管工	1-13-3		配管工			1- 61
	1-13-4		ハンドホール工			1- 62
第2章 浚渫（川）						
第2節 浚渫工（ポンプ浚渫船）	2-2-2		浚渫船運転工（民船・官船）		第3編2-16-3 浚渫船運転工	1- 59
第3節 浚渫工（グラブ浚渫船）	2-3-2		浚渫船運転工		第3編2-16-3 浚渫船運転工	1- 59
第4節 浚渫工（バックホウ浚渫船）	2-4-2		浚渫船運転工		第3編2-16-3 浚渫船運転工	1- 59
第3章 樋門・樋管						
第3節 軽量盛土工	3-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3 路体盛土工	1- 3
第4節 地盤改良工	3-4-2		固結工		第3編2-7-9 固結工	1- 40
第5節 樋門・樋管本体工	3-5-3		既製杭工		第3編2-4-4 既製杭工	1- 16
	3-5-4		場所打杭工		第3編2-4-5 場所打杭工	1- 16
	3-5-5		矢板工		第3編2-3-4 矢板工	1- 4
	3-5-6	1	函渠工	本体工		1- 62
		2	函渠工	ヒューム管		1- 56
				P C 管		1- 62
				コルゲートパイプ		1- 62
				ダクタイル鋳鉄管		1- 62
				P C 函渠	第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
	3-5-7		翼壁工			1- 63
	3-5-8		水叩工			1- 63
第6節 護床工	3-6-3		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロック	1- 9
	3-6-5		沈床工		第3編2-3-18沈床工	1- 10
	3-6-6		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	3-6-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第7節 水路工	3-7-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	3-7-4		集水榦工		第3編2-3-30集水榦工	1- 14
	3-7-5		暗渠工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	3-7-6		樋門接続暗渠工		第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
第8節 付属物設置工	3-8-3		防止柵工		第3編2-3-7 防止柵工	1- 5
	3-8-7		階段工		第3編2-3-22階段工	1- 10
第4章 水門						
第3節 工場製作工	4-3-3		桁製作工		第3編2-12-3 桁製作工	1- 46
	4-3-4		鋼製伸縮継手製作工		第3編2-12-5 鋼製伸縮継手製作工	1- 49
	4-3-5		落橋防止装置製作工		第3編2-12-6 落橋防止装置製作工	1- 50
	4-3-6		鋼製排水管製作工		第3編2-12-10 鋼製排水管製作工	1- 51
	4-3-7		橋梁用防護柵製作工		第3編2-12-7 橋梁用防護柵製作工	1- 50
	4-3-9		仮設材製作工		第3編3-12-1 仮設材製作工	1- 45
	4-3-10		工場塗装工		第3編2-12-11 工場塗装工	1- 52
	4-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3 路体盛土工	1- 3
第6節 水門本体工	4-6-4		既製杭工		第3編2-4-4 既製杭工	1- 16
	4-6-5		場所打杭工		第3編2-4-5 場所打杭工	1- 16
	4-6-6		矢板工（遮水矢板）		第3編2-3-4 矢板工	1- 4

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第6節 水門本体内工	4-6-7		床版工			1- 63
	4-6-8		堰柱工			1- 63
	4-6-9		門柱工			1- 63
	4-6-10		ゲート操作台工			1- 63
	4-6-11		胸壁工			1- 63
第6節 水門本体内工	4-6-12		翼壁工		第6編3-5-7翼壁工	1- 63
	4-6-13		水叩工		第6編3-5-8水叩工	1- 63
第7節 護床工	4-7-3		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロック工	1- 9
	4-7-5		沈床工		第3編2-3-18沈床工	1- 10
	4-7-6		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	4-7-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第8節 付属物設置工	4-8-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	4-8-8		階段工		第3編2-3-22階段工	1- 10
第9節 鋼管理橋上部工	4-9-4		架設工(クレーン架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-5		架設工(ケーブルクレーン架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-6		架設工(ケーブルエレクション架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-7		架設工(架設桁架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-8		架設工(送出し架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-9		架設工(トラベラークレーン架設)		2-13 架設工(鋼橋)	1- 53
	4-9-10		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
第10節 橋梁現場塗装工	4-10-2		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第11節 床版工	4-11-2		床版工		第3編2-18-2床版工	1- 60
第12節 橋梁付属物工(鋼管理橋)	4-12-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	4-12-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	4-12-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵	1- 94
	4-12-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	4-12-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第14節 コンクリート管理橋上部工(PC橋)	4-14-2		プレテンション桁製作工(購入工)		第3編2-3-12プレテンション桁製作工(購入工)	1- 7
	4-14-3		ポストテンション桁製作工		第3編2-3-13ポストテンション桁製作工	1- 7
	4-14-4		プレキャストセグメント桁製作工(購入)		第3編2-3-13プレキャストセグメント桁製作工(購入工)	1- 8
	4-14-5		プレキャストセグメント主桁組立工		第3編2-3-14プレキャストセグメント主桁組立工	1- 8
	4-14-6		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	4-14-7		架設工(クレーン架設)		2-13 架設工(コンクリート橋)	1- 54
	4-14-8		架設工(架設桁架設)		2-13 架設工(コンクリート橋)	1- 54
	4-14-9		床版・横組工		第3編2-18-2床版工	1- 60
	4-14-10		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第15節 コンクリート管理橋上部工(PCホロースラブ橋)	4-15-2		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	4-15-4		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置工	1- 94
	4-15-5		PCホロースラブ製作工		第3編2-3-15PCホロースラブ製作工	1- 8
第16節 橋梁付属物工(コンクリート管理橋)	4-16-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	4-16-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第16節 橋梁付属物工(コンクリート管理橋)	4-16-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6 橋梁用防護柵工	1- 94
	4-16-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7 橋梁用高欄工	1- 94
	4-16-7		検査路工		第10編4-8-8 検査路工	1- 94
第18節 舗装工	4-18-5		アスファルト舗装工		第3編2-6-7 アスファルト舗装工	1- 20
	4-18-6		半たわみ性舗装工		第3編2-6-8 半たわみ性舗装工	1- 23
	4-18-7		排水性舗装工		第3編2-6-9 排水性舗装工	1- 25
	4-18-8		透水性舗装工		第3編2-6-10 透水性舗装工	1- 27
	4-18-9		グースアスファルト舗装工		第3編2-6-11 グースアスファルト舗装工	1- 28
	4-18-10		コンクリート舗装工		第3編2-6-12 コンクリート舗装工	1- 29
	4-18-11		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13 薄層カラー舗装工	1- 33
	4-18-12		ブロック舗装工		第3編2-6-14 ブロック舗装工	1- 35
第5章 堰						
第3節 工場製作工	5-3-3		刃口金物製作工		第3編2-12-1 刃口金物製作工	1- 45
	5-3-4		桁製作工		第3編2-12-3 桁製作工	1- 46
	5-3-5		検査路製作工		第3編2-12-4 検査路製作工	1- 49
	5-3-6		鋼製伸縮継手製作工		第3編2-12-5 鋼製伸縮継手製作工	1- 49
	5-3-7		落橋防止装置製作工		第3編2-12-6 落橋防止装置製作工	1- 3
	5-3-8		鋼製排水管製作工		第3編2-12-10 鋼製排水管製作工	1- 51
	5-3-9		プレビーム用桁製作工		第3編2-12-9 プレビーム用桁製作工	1- 51
	5-3-12		橋梁用防護柵製作工		第3編2-12-7 橋梁用防護柵製作工	1- 50
	5-3-12		アンカーフレーム製作工		第3編2-12-8 アンカーフレーム製作工	1- 50
	5-3-13		仮設材製作工		第3編3-12-1 仮設材製作工	1- 45
	5-3-14		工場塗装工		第3編2-12-11 工場塗装工	1- 52
第5節 計量盛土工	5-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3 路体盛土工	1- 3
第6節 可動堰本体工	5-6-3		既製杭工		第3編2-4-4 既製杭工	1- 16
	5-6-4		場所打杭工		第3編2-4-5 場所打杭工	1- 16
	5-6-5		オープンケーソン基礎工		第3編2-4-7 オープンケーソン基礎工	1- 17
	5-6-6		ニューマチックケーソン基礎工		第3編2-4-8 ニューマチックケーソン基礎工	1- 17
	5-6-7		矢板工		第3編2-3-4 矢板工	1- 4
	5-6-8		床版工		第6編4-6-7 床版工	1- 63
	5-6-9		堰柱工		第6編4-6-8 堰柱工	1- 63
	5-6-10		門柱工		第6編4-6-9 門柱工	1- 63
	5-6-11		ゲート操作台工		第6編4-6-10 ゲート操作台工	1- 53
	5-6-12		水叩工		第6編3-5-8 水叩工	1- 53
	5-6-13		閘門工			1- 53
	5-6-14		土砂吐工			1- 53
	5-6-15		取付擁壁工		第3編2-15-1 場所打擁壁工	1- 53
第7節 固定堰本体工	5-7-3		既製杭工		第3編2-4-4 既製杭工	1- 16
	5-7-4		場所打杭工		第3編2-4-5 場所打杭工	1- 16
	5-7-5		オープンケーソン基礎工		第3編2-4-7 オープンケーソン基礎工	1- 17
	5-7-6		ニューマチックケーソン基礎工		第3編2-4-8 ニューマチックケーソン基礎工	1- 17
	5-7-7		矢板工		第3編2-3-4 矢板工	1- 4
	5-7-8		堰本体工			1- 63
	5-7-9		水叩工			1- 63
	5-7-10		土砂吐工			1- 63

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第7節 固定堰本体工	5-7-11		取付擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
第8節 魚道工	5-8-3		魚道本体工			1- 64
第9節 管理橋下部工	5-9-2		管理橋橋台工			1- 64
第10節 鋼管理橋上部工	5-10-4		架設工（クレーン架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-5		架設工（ケーブルクレーン架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-6		架設工（ケーブルエレクション架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-7		架設工（架設桁架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-8		架設工（送出し架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-9		架設工（トラベラークレーン架設）		2-13 架設工（鋼橋）	1- 53
	5-10-10		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
第11節 橋梁現場塗装工	5-11-2		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第12節 床版工	5-12-2		床版工		第3編2-18-2床版工	1- 60
第13節 橋梁付属物工（鋼管理橋）	5-13-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	5-13-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	5-13-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵	1- 94
	5-13-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	5-13-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第15節 コンクリート管理橋上部工（PC橋）	5-15-2		プレテンション桁製作工（購入工）		第3編2-3-12プレテンション桁製作工（購入工）	1- 7
	5-15-3		ポストテンション桁製作工		第3編2-3-13ポストテンション桁製作工	1- 7
	5-15-4		プレキャストセグメント桁製作工（購入）		第3編2-3-13プレキャストセグメント桁製作工（購入工）	1- 8
	5-15-5		プレキャストセグメント主桁組立工		第3編2-3-14プレキャストセグメント主桁組立工	1- 8
	5-15-6		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-15-7		架設工（クレーン架設）		2-13 架設工（コンクリート橋）	1- 54
	5-15-8		架設工（架設桁架設）		2-13 架設工（コンクリート橋）	1- 54
	5-15-9		床版・横組工		第3編2-18-2床版工	1- 60
	5-15-10		落橋防止装置工		第10編4-8-3落橋防止装置工	1- 94
第16節 コンクリート管理橋上部工（PCホロースラブ橋）	5-16-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-16-4		落橋防止装置工		第10編4-8-3落橋防止装置	1- 94
	5-16-5		PCホロースラブ製作工		第3編2-3-15PCホロースラブ製作工	1- 8
第17節 コンクリート管理橋上部工（PC箱桁）	5-17-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-17-4		PC箱桁製作工		第3編2-3-16PC箱桁製作	1- 9
	5-17-5		落橋防止装置工		第10編4-8-3落橋防止装置	1- 8
第18節 橋梁付属物工（コンクリート管理橋）	5-18-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	5-18-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	5-18-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵	1- 8
	5-18-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	5-18-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第18節 橋梁付属物工（コンクリート管理橋）	5-18-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵工	1- 94
	5-18-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	5-18-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第20節 付属物設置工	5-20-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	5-20-7		階段工		第3編2-3-22階段工	1- 10

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第6章 排水機場						
第3節 軽量盛土工	6-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 機場本体工	6-4-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	6-4-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	6-4-5		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
	6-4-6		本体工			1- 65
	6-4-7		燃料貯油槽工			1- 65
第5節 沈砂池工	6-5-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	6-5-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	6-5-5		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
	6-5-6		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	6-5-7		コンクリート床版工			1- 65
	6-5-8		ブロック床版工		第3編2-3-17根固めブロッ	1- 9
	6-5-9		場所打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
第6節 吐出水槽工	6-6-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	6-6-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	6-6-5		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
	6-6-6		本体工		第6編6-4-6本体工	1- 65
第7章 床止め・床固め						
第3節 軽量盛土工	7-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 床止め工	7-4-4		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	7-4-5		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
	7-4-6		本体工	床固め本体工		1- 66
				植石張り	第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
				根固めブロック	第3編2-3-17根固めブロッ	1- 9
	7-4-7		取付擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	7-4-8		水叩工	水叩工		1- 63
				巨石張り	第3編2-3-26多自然型護岸工	1- 11
				根固めブロック	第3編2-3-17根固めブロッ	1- 9
第5節 床固め工	7-5-4		本堤工		第6編7-4-6本体工	1- 66
	7-5-5		垂直壁工		第6編7-4-6本体工	1- 66
	7-5-6		側壁工			1- 66
	7-5-7		水叩工		第6編7-4-8水叩工	1- 66
第6節 山留擁壁工	7-6-3		コンクリート擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	7-6-4		ブロック積擁壁工		第3編2-5-3コンクリート	1- 18
	7-6-5		石積擁壁工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
	7-6-6		山留擁壁基礎工		第3編2-4-3基礎工（護	1- 15
第8章 河川維持						
第7節 路面補修工	8-7-3		不陸整正工		第1編2-3-6堤防天端工	1- 2
	8-7-4		コンクリート舗装補修工		第3編2-6-12コンクリート舗装工	1- 29
	8-7-5		アスファルト舗装補修工		第3編2-6-7アスファルト舗装工	1- 20
第8節 付属物復旧工	8-8-2		付属物復旧工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
第9節 付属物設置工	8-9-3		防護柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	8-9-5		付属物設置工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 6
第10節 光ケーブル配管工	8-10-3		配管工		第6編1-13-3配管工	1- 61
	8-10-4		ハンドホール工		第6編1-13-4ハンドホール	1- 62
第12節 植栽維持工	8-12-3		樹木・芝生管理工		第3編2-14-2植生工	1- 54

【第6編 河川編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第9章 河川修繕						
第3節 軽量盛土工	9-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 腹付工	9-4-2		覆土工		第1編2-3-5法面整形工	1- 2
	9-4-3		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
第5節 側帯工	9-5-2		縁切工	じゃかご工	第3編2-3-27羽口工(じゃか	1- 12
				連節ブロック張り	第3編2-5-3コンクリート ブロック工(連節ブロック張り)	1- 18
				コンクリートブ ロック張り	第3編2-5-3コンクリート ブロック工	1- 18
				石張工	第3編2-5-5石積(張)工	1- 19
	9-5-3		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
第6節 堤脚保護工	9-6-3		石積工		第3編2-5-5石積(張)工	1- 19
	9-6-4		コンクリートブロッ ク工		第3編2-5-3コンクリート ブロック工	1- 18
第7節 管理用通路工	9-7-2		防護柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	9-7-4		路面切削工		第3編2-6-15路面切削工	1- 37
	9-7-5		舗装打換え工		第3編2-6-16舗装打換え工	1- 37
	9-7-6		オーバーレイ工		第3編2-6-17オーバーレイ	1- 37
	9-7-7		排水構造物工	プレキャストU型 側溝・管(函)渠	第3編2-3-29側溝工	1- 13
				集水枳工	第3編2-3-30集水枳工	1- 14
	9-7-8		道路付属物工	歩車道境界プロッ	第3編2-3-5縁石工	1- 4
第8節 現場塗装工	9-8-3		付属物塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
	9-8-4		コンクリート面塗装 工		第3編2-3-11コンクリート 面塗装工	1- 6

【第7編 河川海岸】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第1章 堤防・護岸						
第3節 軽量盛土工	1-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 地盤改良工	1-4-2		表層安定処理工		第3編2-7-4表層安定処理工	1- 39
	1-4-3		パイルネット工		第3編2-7-5パイルネット工	1- 39
	1-4-4		バーチカルドレーン工		第3編2-7-7バーチカルドレーン工	1- 40
	1-4-5		締固め改良工		第3編2-7-8締固め改良工	1- 40
	1-4-6		固結工		第3編2-7-9固結工	1- 40
第5節 護岸基礎工	1-5-4		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	1-5-5		場所打コンクリート工			1- 67
	1-5-6		海岸コンクリートブロック工			1- 67
	1-5-7		笠コンクリート工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	1-5-8		基礎工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	1-5-9		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
第6節 護岸工	1-6-3		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 3
	1-6-4		海岸コンクリートブロック工			1- 67
	1-6-5		コンクリート被覆工			1- 68
第7節 擁壁工	1-7-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
第8節 天端被覆工	1-8-2		コンクリート被覆工			1- 68
第9節 波返工	1-9-3		波返工			1- 68
第10節 裏法被覆工	1-10-2		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
	1-10-3		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	1-10-4		コンクリート被覆工		第7編1-6-5コンクリート被覆工	1- 68
	1-10-5		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
第11節 カルバート工	1-11-3		プレキャストカルバート工		第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
第12節 排水構造物工	1-12-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	1-12-4		集水樹工		第3編2-3-30集水樹工	1- 5
	1-12-5		管渠工	プレキャストパイプ	第3編2-3-29暗渠工	1- 5
				プレキャストボックス	第3編2-3-29暗渠工	1- 5
				コルゲートパイプ	第3編2-3-29暗渠工	1- 5
				タグタイル铸铁管	第3編2-3-29暗渠工	1- 5
	1-12-6		場所打水路工		第3編2-3-29場所打水路工	1- 6
第13節 付属物設置工	1-13-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 6
	1-13-6		階段工		第3編2-3-22階段工	1- 6
第14節 付帯道路工	1-14-3		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 6
	1-14-5		アスファルト舗装工		第3編2-6-7アスファルト舗装工	1- 7
	1-14-6		コンクリート舗装工		第3編2-6-12コンクリート舗装工	1- 7
	1-14-7		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 7
	1-14-8		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 8
	1-14-9		集水樹工		第3編2-3-30集水樹工	1- 8
	1-14-10		縁石工		第3編2-3-5縁石工	1- 8
	1-14-11		区画線工		第3編2-3-9区画線工	1- 9
第15節 付帯道路施設工	1-15-3		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 9
	1-15-4		小型標識工		第3編2-3-6小型標識工	1- 9

【第7編 河川海岸】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第2章 突堤・人工岬						
第3節 軽量盛土工	2-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 突堤基礎工	2-4-4		捨石工			1- 69
	2-4-5		吸出し防止工			1- 69
第5節 突堤本体工	2-5-2		捨石工			1- 69
	2-5-5		海岸コンクリートブロック工			1- 70
	2-5-6		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
第5節 突堤本体工	2-5-7		詰杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	2-5-8		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
	2-5-9		石枠工			1- 70
	2-5-10		場所打コンクリート工			1- 70
	2-5-11	1	ケーソン工	ケーソン工製作		1- 71
		2	ケーソン工	ケーソン工据付		1- 71
		3	ケーソン工	突堤上部工 (場所打コンクリート) (海岸コンクリートブロック)		1- 71
	2-5-12	1	セルラー工	セルラー工製作		1- 72
		2	セルラー工	セルラー工据付		1- 72
		3	セルラー工	突堤上部工 (場所打コンクリート) (海岸コンクリートブロック)		1- 72
第6節 根固め工	2-6-2		捨石工			1- 72
	2-6-3		根固めブロック工			1- 73
第7節 消波工	2-7-2		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	2-7-3		消波ブロック工			1- 56
第3章 海域堤防（人工リーフ、離岸堤、潜堤）						
第3節 海域堤基礎工	3-3-3		捨石工			1- 73
	3-3-4		吸出し防止工		第7編2-4-5吸出し防止工	1- 69
第4節 海域堤本体工	3-4-2		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	3-4-3		海岸コンクリートブロック工		第7編2-5-5海岸コンクリートブロック工	1- 70
	3-4-4		ケーソン工		第7編2-5-11ケーソン工	1- 71
	3-4-5		セルラー工		第7編2-5-12セルラー工	1- 72
	3-4-6		場所打コンクリート工		第7編2-5-10場所打ちコンクリート工	1- 70
第4章 浚渫（海）						
第2節 浚渫工（ポンプ浚渫船）	4-2-2		浚渫船運転工		第3編2-16-3浚渫船運転工	1- 59
第3節 浚渫工（グラブ船）	4-3-2		浚渫船運転工		第3編2-16-3浚渫船運転工	1- 59
第5章 養浜						
第2節 軽量盛土工	5-2-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第3節 砂止工	5-3-2		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロック	1- 9



【第8編 砂防編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第1章 砂防えん堤						
第3節 工場製作工	1-3-3		鋼製えん堤製作工		第3編2-12-3-3桁製作工 (鋼製えん堤製作工(仮組立時))	1- 49
	1-3-4		鋼製えん堤仮設材製作工			1- 74
	1-3-5		工場塗装工		第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第5節 軽量盛土工	1-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第6節 法面工	1-6-2		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	1-6-3		法面吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	1-6-4		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	1-6-6		アンカー工		第3編2-14-6アンカー工	1- 56
	1-6-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第8節 コンクリートえん堤工	1-8-4		コンクリートえん堤本体工			1- 74
	1-8-5		コンクリート副えん堤工		第8編1-6-4コンクリートえん堤本体工	1- 74
	1-8-6		コンクリート側壁工			1- 3
	1-8-8		水叩工			1- 75
第9節 鋼製えん堤工	1-9-5		鋼製えん堤本体工	不透過型		1- 75
				透過型		1- 75
	1-9-6		鋼製側壁工			1- 76
	1-9-7		コンクリート側壁工		第8編1-8-6コンクリート側壁工	1- 74
	1-9-9		水叩工		第8編1-8-8水叩工	1- 75
	1-9-10		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第10節 護床工・根固め工	1-10-4		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロック	1- 9
	1-10-6		沈床工		第3編2-3-18沈床工	1- 10
	1-10-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第11節 砂防えん堤付属物設	1-11-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
第12節 付帯道路工	1-12-3		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	1-12-5		アスファルト舗装工		第3編2-6-7アスファルト舗装工	1- 5
	1-12-6		コンクリート舗装工		第3編2-6-12コンクリート舗装工	1- 5
	1-12-7		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 5
	1-12-8		側溝工		第3編3-2-29側溝工	1- 6
	1-12-9		集水樹工		第3編2-3-30集水樹工	1- 6
	1-12-10		縁石工		第3編2-3-5縁石工	1- 6
	1-12-11		区画線工		第3編2-3-9区画線工	1- 6
第13節 付帯道路施設工	1-13-3		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 7
	1-13-4		小型標識工		第3編2-3-6小型標識工	1- 7
第2章 流路						1- 7
第3節 軽量盛土工	2-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 8
第4節 流路護岸工	2-4-4		基礎工(護岸)		第3編2-4-3基礎工(護岸)	1- 8
	2-4-5		コンクリート擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 8
	2-4-6		ブロック積擁壁工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 9
	2-4-7		石積擁壁工		第3編2-5-5石積(張)工	1- 9
	2-4-8		護岸付属物工		第6編1-7-4護岸付属物工	1- 9
	2-4-9		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54

【第8編 砂防編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第5節 床固め工	2-5-4		床固め本体工		第8編1-8-4コンクリート えん堤本体工	1- 74
	2-5-5		垂直壁工		第8編1-8-4コンクリート えん堤本体工	1- 74
	2-5-6		側壁工		第8編1-8-6コンクリート 側壁工	1- 74
	2-5-7		水叩工		第8編1-8-8水叩工	1- 75
	2-5-8		魚道工			1- 76
第6節 根固め・水制工	2-6-4		根固めブロック工		第3編2-3-17根固めブロッ ク	1- 9
	2-6-6		捨石工		第3編2-3-19捨石工	1- 10
	2-6-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				かごマット	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
第7節 流路付属物設置工	2-7-2		階段工		第3編2-3-22階段工	1- 10
	2-7-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
第3章 斜面対策						
第3節 軽量盛土工	3-3-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第4節 法面工	3-4-2		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	3-4-3		吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	3-4-4		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	3-4-5		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
	3-4-6		アンカー工（プレ キャストコンクリー ト板）		第3編2-14-6アンカー工	1- 56
	3-4-7		抑止アンカー工		第3編2-14-6アンカー工	1- 56
第5節 擁壁工	3-5-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	3-5-4		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	3-5-5		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁 壁工	1- 57
	3-5-6		補強土壁工		第3編2-15-3補強土壁工	1- 58
	3-5-7		井桁ブロック工		第3編2-15-4井桁ブロック	1- 58
	3-5-8		落石防護工		第10編1-11-5落石防護柵工	1- 83
第6節 山腹水路工	3-6-3		山腹集水路・排水路 工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
	3-6-4		山腹明暗渠工			1- 76
	3-6-5		山腹暗渠工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	3-6-6		現場打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
	3-6-7		集水樹工		第3編2-3-30集水樹工	1- 14
第7節 地下水排除工	3-7-4		集排水ボーリング工			1- 77
	3-7-5		集水井工			1- 77
第8節 地下水遮断工	3-8-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	3-8-4		固結工		第3編2-7-9固結工	1- 40
	3-8-5		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
第9節 抑止杭工	3-9-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	3-9-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	3-9-5		シャフト工（深礎 工）		第3編2-4-6深礎工	1- 17
	3-9-6		合成杭工			1- 77

【第9編 ダム編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第1章 コンクリートダム						
第4節 ダムコンクリート工	1-4		コンクリートダム工	本体		1- 78
	1-4		コンクリートダム工	水叩		1- 78
	1-4		コンクリートダム工	副ダム		1- 79
	1-4		コンクリートダム工	導流壁		1- 80
第2章 フィルダム						
第3節 盛立工	2-3-5		コアの盛立			1- 81
	2-3-6		フィルター <sup>①</sup> の盛立			1- 81
	2-3-7		ロックの盛立			1- 81
	2		フィルダム（洪水吐）			1- 82
第3章 基礎グラウチング						
第3節 ボーリング工	3-3		ボーリング工			1- 82

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第1章 道路改良						
第3節 工場製作工	1-3-2		遮音壁支柱製作工	遮音壁支柱製作工		1- 83
				工場塗装工	第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第4節 地盤改良工	1-4-2		表層安定処理工		第3編2-7-4表層安定処理	1- 39
	1-4-3		置換工		第3編2-7-3置換工	1- 38
	1-4-4		サンドマット工		第3編2-7-6サンド <sup>①</sup> マット工	1- 39
	1-4-5		パーチカルドレーン <sup>①</sup> 工		第3編2-7-7パーチカルドレーン工	1- 40
	1-4-6		締固め改良工		第3編2-7-8締固め改良工	1- 40
	1-4-7		固結工		第3編2-7-9固結工	1- 40
第5節 法面工	1-5-2		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	1-5-3		法面吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 5
	1-5-4		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 5
	1-5-6		アンカー工		第3編2-14-6アンカー工	1- 5
	1-5-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 5
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 5
第6節 軽量盛土工	1-6-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 6
第7節 擁壁工	1-7-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 6
	1-7-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 6
	1-7-5		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 6
	1-7-6		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁壁工	1- 7
	1-7-7		補強土壁工	補強土（テールアルメ）壁工法	第3編2-15-3補強土壁工	1- 7
				多数アンカー式補強土工法	第3編2-15-3補強土壁工	1- 7
				ジオテキスタイルを用いた補強土工法	第3編2-15-3補強土壁工	1- 8
	1-7-8		井桁ブロック工		第3編2-15-4井桁ブロック	1- 8
第8節 石・ブロック積（張）工	1-8-3		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 8
	1-8-4		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 9
第9節 カルバート工	1-9-4		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 9
	1-9-5		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 9
	1-9-6		場所打函渠工			1- 83
	1-9-7		プレキャストカルバート工		第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
第10節 排水構造物工（小型水路工）	1-10-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	1-10-4		管渠工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	1-10-5		集水樹・マンホール工		第3編2-3-30集水樹工	1- 14
	1-10-6		地下排水工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	1-10-7		場所打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第10節 排水構造物工（小型水路工）	1-10-8		排水工（小段排水・縦排水）		第3編2-3-29側溝工	1- 13
第11節 落石雪害防止工	1-11-4		落石防止網工			1- 83
	1-11-5		落石防護柵工			1- 83
	1-11-6		防雪柵工			1- 84
	1-11-7		雪崩予防柵工			1- 84
第12節 遮音壁工	1-12-4		遮音壁基礎工			1- 84
	1-12-5		遮音壁本体工			1- 84
第2章 舗装						
第3節 地盤改良工	2-3-2		路床安定処理工		第3編2-7-4表層安定処理	1- 39
	2-3-3		置換工		第3編2-7-3置換工	1- 38
第4節 舗装工	2-4-5		アスファルト舗装工		第3編2-6-7アスファルト舗装工	1- 20
	2-4-6		半たわみ性舗装工		第3編2-6-8半たわみ性舗装工	1- 23
	2-4-7		排水性舗装工		第3編2-6-9排水性舗装工	1- 25
	2-4-8		透水性舗装工		第3編2-6-10透水性舗装工	1- 56
	2-4-9		グースアスファルト舗装工		第3編2-6-11グースアスファルト舗装工	1- 28
	2-4-10		コンクリート舗装工		第3編2-6-12コンクリート舗装工	1- 29
	2-4-11		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 33
	2-4-12		ブロック舗装工		第3編2-6-14ブロック舗装工	1- 35
	2-4		歩道路盤工			1- 85
	2-4		取合舗装路盤工			1- 85
	2-4		路肩舗装路盤工			1- 85
	2-4		歩道舗装工			1- 85
	2-4		取合舗装工			1- 85
	2-4		路肩舗装工			1- 85
	2-4		表層工			1- 85
第5節 排水構造物工（路面排水工）	2-5-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	2-5-4		管渠工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	2-5-5		集水樹（街渠樹）・マンホール工		第3編2-3-30集水樹工	1- 14
	2-5-6		地下排水工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	2-5-7		場所打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
	2-5-8		排水工（小段排水・縦排水）		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	2-5-9		排水性舗装用路肩排水工			1- 86
第6節 縁石工	2-6-3		縁石工		第3編2-3-5縁石工	1- 4
第7節 踏掛版工	2-7-4		踏掛版工	コンクリート工		1- 86
				ラバーシュー		1- 86
				アンカーボルト		1- 86
第8節 防護柵工	2-8-3		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	2-8-4		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	2-8-5		ボックスビーム工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	2-8-6		車止めポスト工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
第9節 標識工	2-9-3		小型標識工		第3編2-3-6小型標識工	1- 4
	2-9-4	1	大型標識工	標識基礎工		1- 86
		2	大型標識工	標識柱工		1- 86
第10節 区画線工	2-10-2		区画線工		第3編2-3-9区画線工	1- 6

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第12節 道路付属施設工	2-12-4		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 6
	2-12-5	1	ケーブル配管工	ケーブル配管工		1- 87
		2	ケーブル配管工	ハンドホール		1- 87
	2-12-6		照明工	照明柱基礎工		1- 87
第13節 橋梁付属物工	2-13-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
第3章 橋梁下部						
第3節 工場製作工	3-3-2		刃口金物製作工		第3編2-12-1刃口金物製作	1- 45
	3-3-3		鋼製橋脚製作工			1- 88
	3-3-4		アンカーフレーム製作工		第3編2-12-8アンカーフレーム製作工	1- 50
	3-3-5		工場塗装工		第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第5節 軽量盛土工	3-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第6節 橋台工	3-6-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	3-6-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	3-6-5		深礎工		第3編2-4-6深礎工	1- 17
	3-6-6		オープンケーソン基礎工		第3編2-4-7オープンケーソン基礎工	1- 17
	3-6-7		ニューマチックケーソン基礎工		第3編2-4-8ニューマチックケーソン基礎工	1- 17
	3-6-8		橋台躯体工			1- 89
第7節 RC橋脚工	3-7-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	3-7-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	3-7-5		深礎工		第3編2-4-6深礎工	1- 17
	3-7-6		オープンケーソン基礎工		第3編2-4-7オープンケーソン基礎工	1- 17
	3-7-7		ニューマチックケーソン基礎工		第3編2-4-8ニューマチックケーソン基礎工	1- 17
	3-7-8		鋼管矢板基礎工		第3編2-4-9鋼管矢板基礎工	1- 18
	3-7-9	1	橋脚躯体工	張出式		1- 90
				重力式	第10編3-5-9橋脚躯体工	1- 90
				半重力式	第10編3-5-9橋脚躯体工	1- 90
		2	橋脚躯体工	ラーメン式		1- 91
第8節 鋼製橋脚工	3-8-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	3-8-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	3-8-5		深礎工		第3編2-4-6深礎工	1- 17
	3-8-6		オープンケーソン基礎工		第3編2-4-7オープンケーソン基礎工	1- 17
	3-8-7		ニューマチックケーソン基礎工		第3編2-4-8ニューマチックケーソン基礎工	1- 17
	3-8-8		鋼管矢板基礎工		第3編2-4-9鋼管矢板基礎工	1- 18
	3-8-9	1	橋脚フーチング工	I型・T型		1- 91
		2	橋脚フーチング工	門型		1- 92
	3-8-10	1	橋脚架設工	I型・T型		1- 92
		2	橋脚架設工	門型		1- 92
	3-8-11		現場継手工			1- 92
	3-8-12		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第9節 護岸基礎工	3-9-3		基礎工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	3-9-4		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4
第10節 矢板護岸工	3-10-3		笠コンクリート工		第3編2-4-3基礎工（護岸）	1- 15
	3-10-4		矢板工		第3編2-3-4矢板工	1- 4

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第11節 法覆護岸工	3-11-2		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	3-11-3		護岸付属物工		第6編1-7-4護岸付属物工	1- 61
	3-11-4		緑化ブロック工		第3編2-5-4緑化ブロック	1- 19
	3-11-5		環境護岸ブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	3-11-6		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
	3-11-7		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	3-11-8		多自然型護岸工	巨石張り	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
			多自然型護岸工	巨石積み	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
			多自然型護岸工	かごマット	第3編2-3-26多自然型護岸	1- 11
	3-11-9		吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	3-11-10		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	3-11-11		覆土工		第1編2-3-5法面整形工	1- 2
	3-11-12		羽口工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				かご枠	第3編2-3-26羽口工	1- 3
				連節ブロック張り	第3編2-5-3-2連節ブロック張り	1- 18
第12節 擁壁護岸工	3-12-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	3-12-4		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁壁工	1- 57
第4章 鋼橋上部						
第3節 工場製作工	4-3-3		桁製作工		第3編2-12-3桁製作工	1- 46
	4-3-4		検査路製作工		第3編2-12-4検査路製作工	1- 49
	4-3-5		鋼製伸縮継手製作工		第3編2-12-5鋼製伸縮継手製作工	1- 49
	4-3-6		落橋防止装置製作工		第3編2-12-6落橋防止装置製作工	1- 50
	4-3-7		鋼製排水管製作工		第3編2-12-10鋼製排水管製作工	1- 51
	4-3-8		橋梁用防護柵製作工		第3編2-12-7橋梁用防護柵製作工	1- 50
	4-3-9		橋梁用高欄製作工		第3編2-12-7橋梁用防護柵製作工	1- 50
	4-3-10		横断歩道橋製作工		第3編2-12-3桁製作工	1- 46
	4-3-12		アンカーフレーム製作工		第3編2-12-8アンカーフレーム製作工	1- 50
	4-3-13		工場塗装工		第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第5節 鋼橋架設工	4-5-4		架設工（クレーン架設）		第3編2-13-3架設工（クレーン架設）	1- 53
	4-5-5		架設工（ケーブルクレーン架設）		第3編2-13-4架設工（ケーブルクレーン架設）	1- 53
	4-5-6		架設工（ケーブルエレクション架設）		第3編2-13-5架設工（ケーブルエレクション架設）	1- 53
	4-5-7		架設工（架設桁架設）		第3編2-13-6架設工（架設桁架設）	1- 53
	4-5-8		架設工（送出し架設）		第3編2-13-7架設工（送出し架設）	1- 53
	4-5-9		架設工（トラベラークレーン架設）		第3編2-13-8架設工（トラベラークレーン架設）	1- 53
	4-5-10	1	支承工	鋼製支承		1- 93
		2	支承工	ゴム支承		1- 93
第6節 橋梁現場塗装工	4-6-3		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第7節 床版工	4-7-2		床版工		第3編2-18-2床版工	1- 60
第8節 橋梁付属物工	4-8-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	4-8-3		落橋防止装置工			1- 94
	4-8-5		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	4-8-6		橋梁用防護柵工			1- 94
	4-8-7		橋梁用高欄工			1- 94
	4-8-8		検査路工			1- 94

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第9節 歩道橋本体工	4-9-3		既製杭工		第3編2-4-4既製杭工	1- 16
	4-9-4		場所打杭工		第3編2-4-5場所打杭工	1- 16
	4-9-5		橋脚フーチング工	I型	第10編3-8-9橋脚フーチング工	1- 91
				T型	第10編3-8-9橋脚フーチング工	1- 91
	4-9-6		歩道橋（側道橋）架設工		第3編2-13 橋梁架設工	1- 53
	4-9-7		現場塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
第5章 コンクリート橋上部						
第3節 工場製作工	5-3-2		プレビーム用桁製作工		第3編2-12-9プレビーム用桁製作工	1- 51
	5-3-3		橋梁用防護柵製作工		第3編2-12-7橋梁用防護柵製作工	1- 50
	5-3-4		鋼製伸縮継手製作工		第3編2-12-5鋼製伸縮継手製作工	1- 49
	5-3-5		検査路製作工		第3編2-12-4検査路製作工	1- 49
	5-3-6		工場塗装工		第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第5節 PC橋工	5-5-2		プレテンション桁製作工（購入）	けた橋	第3編2-3-12プレテンション桁製作工（購入）	1- 7
				スラブ橋	第3編2-3-12プレテンション桁製作工（購入）	1- 7
	5-5-3		ポストテンション桁製作工		第3編2-3-13ポストテンション桁製作工	1- 7
	5-5-4		プレキャストセグメント桁製作工（購入）		第3編2-3-14プレキャストセグメント桁製作工（購入）	1- 8
	5-5-5		プレキャストセグメント主桁組立工		第3編2-3-14プレキャストセグメント主桁組立工	1- 8
	5-5-6		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-5-7		架設工（クレーン架設）		第3編2-13-3架設工（クレーン架設）	1- 53
	5-5-8		架設工（架設桁架設）		第3編2-13-6架設工（架設桁架設）	1- 53
	5-5-9		床版・横組工		第3編2-18-2床版工	1- 60
	5-5-10		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第6節 プレビーム桁橋工	5-6-2		プレビーム桁製作工	現場		1- 95
	5-6-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-6-4		架設工（クレーン架設）		第3編2-13-3架設工（クレーン架設）	1- 53
	5-6-5		架設工（架設桁架設）		第3編2-13-6架設工（架設桁架設）	1- 53
	5-6-6		床版・横組工		第3編2-18-1床版工	1- 8
	5-6-9		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第7節 PCホロースラブ橋	5-7-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-7-4		PCホロースラブ製作工		第3編2-3-15PCホロースラブ製作工	1- 8
	5-7-5		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第8節 RCホロースラブ橋	5-8-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-8-4		RC場所打ホロースラブ製作工		第3編2-3-15PCホロースラブ製作工	1- 8
	5-8-5		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第9節 PC版桁橋工	5-9-2		PC版桁製作工		第3編2-3-15PCホロースラブ製作工	1- 8

【第10編 道路編】

章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第10節 PC箱桁橋工	5-10-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-10-4		PC箱桁製作工		第3編2-3-16PC箱桁製作	1- 9
	5-10-5		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
第11節 PC片持箱桁橋工	5-11-2		PC片持箱桁製作工		第3編2-3-16PC箱桁製作工	1- 9
	5-11-3		支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	5-11-4		架設工（片持架設）		第3編2-13-1架設工（コンクリート橋）	1- 54
第12節 PC押出し箱桁橋工	5-12-2		PC押出し箱桁製作工		第3編2-3-16PC押出し箱桁製作工	1- 9
	5-12-3		架設工（押出し架設）		第3編2-13-1架設工（コンクリート橋）	1- 54
第13節 橋梁付属物工	5-13-2		伸縮装置工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	5-13-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	5-13-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵工	1- 94
	5-13-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	5-13-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第6章 トンネル（NATM）						
第4節 支保工	6-4-3		吹付工			1- 95
	6-4-4		ロックボルト工			1- 95
第5節 覆工	6-5-3		覆工コンクリート工			1- 96
	6-5-4		側壁コンクリート工		第10編6-5-3覆工コンクリート工	1- 96
	6-5-5		床版コンクリート工			1- 96
第6節 インバート工	6-6-4		インバート本体工			1- 97
第7節 坑内付帯工	6-7-5		地下排水工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
第8節 坑門工	6-8-4		坑門本体工			1- 97
	6-8-5		明り巻工			1- 98
第11章 共同溝						
第3節 工場製作工	11-3-3		工場塗装工		第3編2-12-11工場塗装工	1- 52
第6節 現場打構築工	11-6-2		現場打躯体工			1- 99
	11-6-4		カラー継手工			1- 99
	11-6-5	1	防水工	防水		1- 99
		2	防水工	防水保護工		1- 99
		3	防水工	防水壁		1-100
第7節 プレキャスト構築工	11-7-2		プレキャスト躯体工			1-100
第12章 電線共同溝						
第5節 電線共同溝工	12-5-2		管路工	管路部		1-100
	12-5-3		プレキャストボックス工	特殊部		1-101
	12-5-4		現場打ちボックス工	特殊部	第10編11-6-2現場打躯体工	1- 99
第6節 付帯設備工	12-6-2		ハンドホール工			1-101
第13章 情報ボックス工						
第3節 情報ボックス工	13-3-3		管路工	管路部	第10編12-5-2管路工（管路部）	1-100
第4節 付帯設備工	13-4-2		ハンドホール工		第10編12-6-2ハンドホール工	1-101
第14章 道路維持						
第4節 舗装工	14-4-3		路面切削工		第3編2-6-15路面切削工	1- 37
	14-4-4		舗装打換え工		第3編2-6-16舗装打換え工	1- 37
	14-4-5		切削オーバーレイ工			1-102
	14-4-6		オーバーレイ工		第3編2-6-17オーバーレイ工	1- 37
	14-4-7		路上再生工			1-102
	14-4-8		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 33



【第10編 道路編】

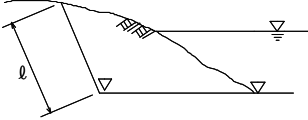
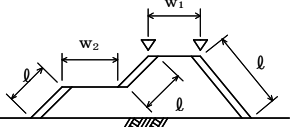
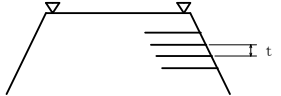
章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第5節 排水構造物工	14-5-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	14-5-4		管渠工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	14-5-5		集水枡・マンホール工		第3編2-3-30集水枡工	1- 14
	14-5-6		地下排水工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	14-5-7		場所打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
	14-5-8		排水工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
第6節 防護柵工	14-6-2		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	14-6-3		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	14-6-5		ボックスビーム工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	14-6-6		車止めポスト工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
第7節 標識工	14-7-3		小型標識工		第3編2-3-6小型標識工	1- 4
	14-7-4		大型標識工		第10編2-9-4大型標識工	1- 86
第8節 道路付属施設工	14-8-4		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 6
	14-8-5		ケーブル配管工		第10編2-12-5ケーブル配管工	1- 87
	14-8-6		照明工		第10編2-12-6照明工	1- 87
第9節 軽量盛土工	3-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第10節 擁壁工	14-10-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	14-10-4		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁壁工	1- 57
第11節 石・ブロック積（張）工	14-11-3		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	14-11-4		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
第12節 カルバート工	14-12-4		場所打円渠工		第10編1-9-6場所打円渠工	1- 83
	14-12-5		プレキャストカルバート工		第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
第13節 法面工	14-13-2		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	14-13-3		法面吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	14-13-4		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	14-13-6		アンカー工		第3編2-14-6アンカー工	1- 56
	14-13-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第15節 橋梁付属物工	15-15-2		伸縮継手工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	15-15-4		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	15-15-5		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵工	1- 94
	15-15-6		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	15-15-7		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第17節 現場塗装工	14-17-6		コンクリート面塗装工		第3編2-3-11コンクリート面塗装工	1- 6
第16章 道路修繕						
第3節 工場製作工	16-3-4		桁補強材製作工			1-103
	16-3-5		落橋防止装置製作工		第3編2-12-6落橋防止装置製作工	1- 50
第5節 舗装工	16-5-3		路面切削工		第3編2-6-15路面切削工	1- 37
	16-5-4		舗装打換え工		第3編2-6-16舗装打換え工	1- 37
	16-5-5		切削オーバーレイ工		第10編14-4-5切削オーバーレイ工	1-102
	16-5-6		オーバーレイ工		第3編2-6-17オーバーレイ工	1- 37
	16-5-7		路上再生工		第10編14-4-7路上再生工	1-102
	16-5-8		薄層カラー舗装工		第3編2-6-13薄層カラー舗装工	1- 33
第6節 排水構造物工	16-6-3		側溝工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	16-6-4		管渠工		第3編2-3-29側溝工	1- 13
	16-6-5		集水枡・マンホール工		第3編2-3-30集水枡工	1- 14
	16-6-6		地下排水工		第3編2-3-29暗渠工	1- 13
	16-6-7		場所打水路工		第3編3-2-29場所打水路工	1- 13
	16-6-8		排水工		第3編2-3-29側溝工	1- 13

【第10編 道路編】

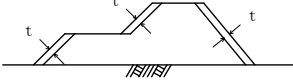
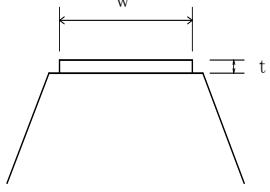
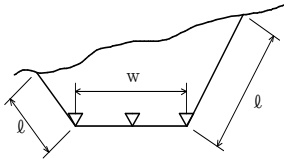
章、節	条	枝番	工種	種別	準用する出来形管理基準	頁
第7節 縁石工	17-7-3		縁石工		第3編2-3-5縁石工	1- 4
第8節 防護柵工	16-8-3		路側防護柵工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	16-8-4		防止柵工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
	16-8-5		ボックスビーム工		第3編2-3-8路側防護柵工	1- 5
	16-8-6		車止めポスト工		第3編2-3-7防止柵工	1- 5
第9節 標識工	16-9-3		小型標識工		第3編2-3-6小型標識工	1- 4
	16-9-4		大型標識工		第10編2-9-4大型標識工	1- 86
第10節 区画線工	16-10-2		区画線工		第3編2-3-9区画線工	1- 6
第12節 道路付属施設工	16-12-4		道路付属物工		第3編2-3-10道路付属物工	1- 6
	16-12-5		ケーブル配管工		第10編2-12-5ケーブル配管	1- 87
	16-12-6		照明工		第10編2-12-6照明工	1- 87
第13節 軽量盛土工	3-5-2		軽量盛土工		第1編2-4-3路体盛土工	1- 3
第14節 擁壁工	16-14-3		場所打擁壁工		第3編2-15-1場所打擁壁工	1- 57
	16-14-4		プレキャスト擁壁工		第3編2-15-2プレキャスト擁壁工	1- 57
第15節 石・ブロック積（張）工	16-15-3		コンクリートブロック工		第3編2-5-3コンクリートブロック工	1- 18
	16-15-4		石積（張）工		第3編2-5-5石積（張）工	1- 19
第16節 カルバート工	16-16-4		場所打函渠工		第10編1-9-6場所打函渠工	1- 83
	16-16-5		プレキャストカルバート工		第3編2-3-28プレキャストカルバート工	1- 12
第17節 法面工	16-17-2		植生工		第3編2-14-2植生工	1- 54
	16-17-3		法面吹付工		第3編2-14-3吹付工	1- 55
	16-17-4		法枠工		第3編2-14-4法枠工	1- 56
	16-17-6		アンカー工		第3編2-14-6アンカー工	1- 56
	16-17-7		かご工	じゃかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
				ふとんかご	第3編2-3-27羽口工	1- 12
第18節 落石雪害防止工	18-18-4		落石防止網工		第10編1-11-4落石防止網工	1- 83
	18-18-5		落石防護柵工		第10編1-11-5落石防護柵工	1- 83
	18-18-6		防雪柵工		第10編1-11-6防雪柵工	1- 84
	18-18-7		雪崩予防柵工		第10編1-11-7雪崩予防柵工	1- 84
第20節 鋼桁工	16-20-3		鋼桁補強工		第10編16-3-4桁補強材製作	1-103
第21節 橋梁支承工	16-21-3		鋼橋支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
	16-21-4		P C橋支承工		第10編4-5-10支承工	1- 93
第22節 橋梁付属物工	16-22-3		伸縮継手工		第3編2-3-24伸縮装置工	1- 10
	16-22-4		落橋防止装置工		第10編4-8-1落橋防止装置	1- 94
	16-22-6		地覆工		第10編4-8-5地覆工	1- 94
	16-22-7		橋梁用防護柵工		第10編4-8-6橋梁用防護柵工	1- 94
	16-22-8		橋梁用高欄工		第10編4-8-7橋梁用高欄工	1- 94
	16-22-9		検査路工		第10編4-8-8検査路工	1- 94
第25節 現場塗装工	16-25-3		橋梁塗装工		第3編2-3-31現場塗装工	1- 14
	16-25-6		コンクリート面塗装工		第3編2-3-11コンクリート面塗装工	1- 6

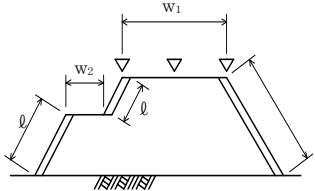
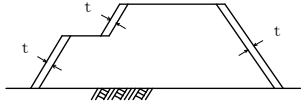
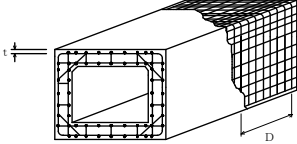
出来形管理基準及び規格値

単位：mm

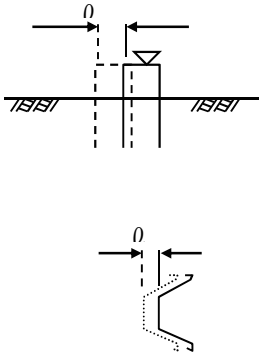
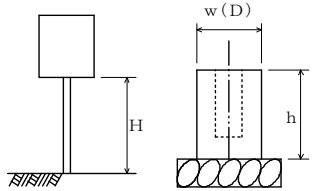
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
1 共通編	2 土工	3 河川・海岸・砂防土工	2		掘削工	基 準 高 ▽	±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 基準高は掘削部の両端で測定。		
						法長 $l$	$l < 5 \text{ m}$	-200		
							$l \geq 5 \text{ m}$	法長－4%		
1 共通編	2 土工	3 河川・海岸・砂防土工	3		盛土工	基 準 高 ▽	-50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 基準高は各法肩で測定。		
						法長 $l$	$l < 5 \text{ m}$	-100		
							$l \geq 5 \text{ m}$	法長－2%		
						幅 $w_1, w_2$		-100		
1 共通編	2 土工	3 河川・海岸・砂防土工	4		盛土補強工  (補強土（テールアルメ）壁工法) (多数アンカー式補強土工法) (ジオテキスタイルを用いた補強土工法)	基 準 高 ▽	-50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚 さ $t$	-50			
						控 え 長 さ	設計値以上			

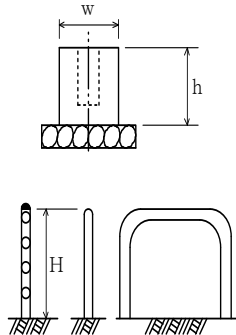
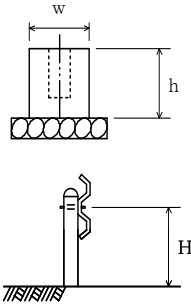
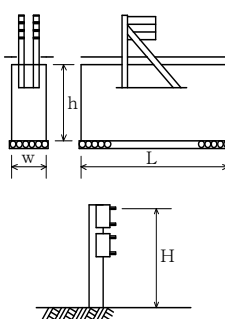
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
1 共通編	2 土工	3 河川・海岸・砂防土工	5		法面整形工 (盛土部)	厚 さ t		※-30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所、法の中央で測定。 ※土羽打ちのある場合に適用。		
1 共通編	2 土工	3 河川・海岸・砂防土工	6		堤防天端工	厚さ t	t < 15cm	-25	幅は、施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 厚さは、施工延長200mにつき1箇所、200m以下は2箇所、中央で測定。		
							t ≥ 15cm	-50			
						幅 w		-100			
1 共通編	2 土工	4 道路土工	2		掘削工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40mにつき1箇所、延長40m以下のものは1施工箇所につき2箇所。 基準高は、道路中心線及び端部で測定。		
						法長 ℓ	ℓ < 5 m	-200			
							ℓ ≥ 5 m	法長 - 4 %			
						幅 w		-100			

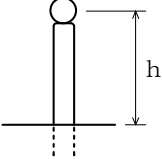
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
1 共通編	2 土工	4 道路土工	3 4		路体盛土工 路床盛土工	基 準 高 ▽	±50	施工延長40mにつき1箇所、延長40m以下のものは1施工箇所につき2箇所。 基準高は、道路中心線及び端部で測定。		
						法長 ℓ	ℓ < 5 m	-100		
							ℓ ≥ 5 m	法長 - 2 %		
						幅	w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-100		
1 共通編	2 土工	4 道路土工	5		法面整形工 (盛土部)	厚 さ t	※-30	施工延長40mにつき1箇所、延長40m以下のものは1施工箇所につき2箇所。法の中央で測定。 ※土羽打ちのある場合に適用。		
1 共通編	3 無筋、 鉄筋コンクリート	7 鉄筋工	4		組立て	平均間隔 d	± φ	$d = \frac{D}{n-1}$ D：n 本間の延長 n：10本程度とする φ：鉄筋径  工事の規模に応じて、1リフト、1ロット当たりに対して各面で一箇所以上測定する。最小かぶりは、コンクリート標準示方書（設計編13.2）参照。但し、道路橋仕方書の適用を受ける橋については、道路橋仕方書（Ⅲコンクリート橋編 6.6）による。  注1) 重要構造物 かつ主鉄筋について適用する。  注2) 橋梁コンクリート床版桁（PC橋含む）の鉄筋については、第3編2-18-2床版工を適用する。  注3) 新設のコンクリート構造物（橋梁上・下部工および重要構造物である内空断面積25㎡以上のボックスカルバート（工場製作のプレキャスト製品は全ての工種において対象外））の鉄筋の配筋状況及びかぶりについては、「非破壊試験によるコンクリート構造物中の配筋状態及びかぶり測定要領（案）」も併せて適用する。		
						かぶり t	± φ かつ 最小かぶり 以上			

単位：mm

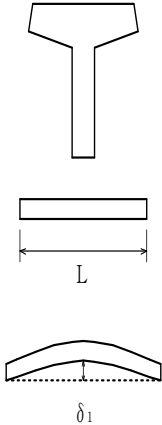
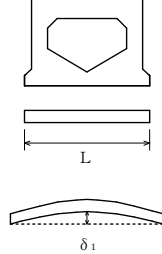
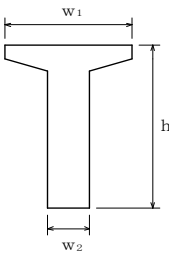
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	4		矢板工〔指定仮設・任意仮設は除く〕  (鋼矢板) (軽量鋼矢板) (コンクリート矢板) (広幅鋼矢板) (可とう鋼矢板)	基 準 高 ▽	±50	基準高は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 変位は、施工延長20m（測点間隔25mの場合は25m）につき1箇所、延長20m（又は25m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						根 入 長	設計値以上			
						変 位 ℓ	100			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	5		縁石工  (縁石・アスカーブ)	延 長 L	-200	1 箇所／1 施工箇所		
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	6		小型標識工	設 置 高 さ H	設計値以上	1 箇所／1 基		
						基礎	幅 w (D)	-30		
							高 さ h	-30		
							根入れ長	設計値以上		

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	7		防止柵工  (立入防止柵) (転落（横断）防止柵) (車止めポスト)	基礎	幅 w	-30	単独基礎10基につき1基、10基以下のものは2基測定。測定箇所は1基につき1箇所測定。		
							高 さ h	-30			
						パイプ取付高 H		+30 -20	1箇所／1施工箇所		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	8	1	路側防護柵工  (ガードレール)	基礎	幅 w	-30	1箇所／施工延長40m 40m以下のものは、2箇所／1施工箇所。		
							高 さ h	-30			
						ビーム取付高 H		+30 -20	1箇所／1施工箇所		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	8	2	路側防護柵工  (ガードケーブル)	基礎	幅 w	-30	1箇所／1基礎毎		
							高 さ h	-30			
							延 長 L	-100			
						ケーブル取付高 H		+30 -20	1箇所／1施工箇所		

単位：mm

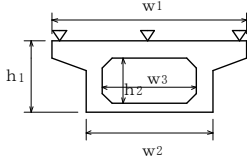
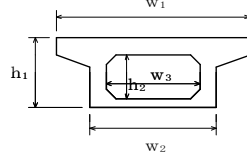
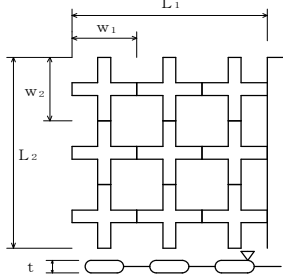
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	9		区画線工	厚 さ t (溶融式のみ)	設計値以上	各線種毎に、1箇所テストピースにより測定。		
						幅 w	設計値以上			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	10		道路付属物工 (視線誘導標) (距離標)	高 さ h	±30	1箇所／10本 10本以下の場合は、2箇所測定。		
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	11		コンクリート面塗装工	塗料使用量	鋼道路橋塗装・防食便覧Ⅱ-74 「表-Ⅱ.5.5各塗料の標準使用量と標準膜厚」の標準使用量以上。	塗装系ごとの塗装面積を算出・照査して、各塗料の必要量を求め、塗付作業の開始前に搬入量（充缶数）と、塗付作業終了時に使用量（空缶数）を確認し、各々必要量以上であることを確認する。 1ロットの大きさは500㎡とする。		



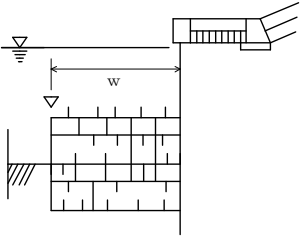
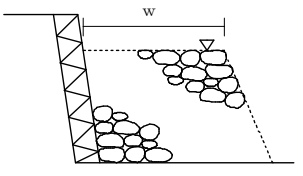
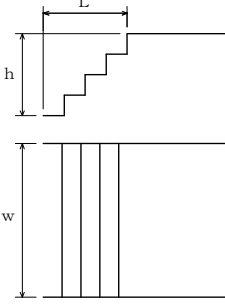
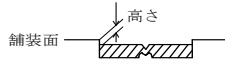
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	12	1	プレテンション桁製作工（購入工）  （けた橋）	桁長 $L$ (m)	$\pm L/1000$	桁全数について測定。 橋桁のそりは中央の値とする。 なお、JISマーク表示品を使用する場合は、製造工場の発行するJISに基づく試験成績表に替えることができる。		
						断面の外形寸法	$\pm 5$			
						橋 桁 の そ り $\delta_1$	$\pm 8$			
						横方向の曲がり $\delta_2$	$\pm 10$			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	12	2	プレテンション桁製作工（購入工）  （スラブ桁）	桁長 $L$ (m)	$\pm 10 \dots$ $L \leq 10m$ $\pm L/1000 \dots$ $L > 10m$	桁全数について測定。 橋桁のそりは中央の値とする。 なお、JISマーク表示品を使用する場合は、製造工場の発行するJISに基づく試験成績表に替えることができる。		
						断面の外形寸法	$\pm 5$			
						橋 桁 の そ り $\delta_1$	$\pm 8$			
						横方向の曲がり $\delta_2$	$\pm 10$			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	13	1	ポストテンション桁製作工	幅（上） $w_1$	$+10$ $-5$	桁全数について測定。 横方向タワミの測定は、プレストレストシング後に測定。 桁断面寸法測定箇所は、両端部、中央部の3箇所とする。 なお、JISマーク表示品を使用する場合は、製造工場の発行するJISに基づく試験成績表に替えることができる。 $\ell$ ：支間長（m）		
						幅（下） $w_2$	$\pm 5$			
						高 さ $h$	$+10$ $-5$			
						桁 長 $\ell$ 支間長	$\ell < 15 \dots \pm 10$ $\ell \geq 15 \dots$ $\pm (\ell - 5)$ かつ $-30\text{mm}$ 以内			
						横方向最大タワミ	$0.8 \ell$			

単位：mm

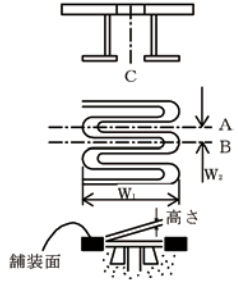
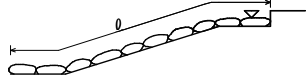
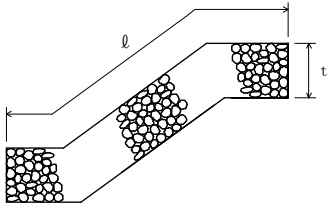
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	13	2	プレキャストセグメント 桁製作工（購入工）	桁 長 $\ell$	—	桁全数について測定。桁断面寸法測定箇所は、図面の寸法表示箇所にて測定。		
						断面の外形寸法（mm）	—			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	14		プレキャストセグメント 主桁組立工	桁 長 $\ell$ 支間長	$\ell < 15 \cdots \pm 10$ $\ell \geq 15 \cdots$ $\pm (\ell - 5)$ かつ $-30\text{mm}$ 以内	桁全数について測定。 横方向タワミの測定は、プレストレストシング後に測定。 桁断面寸法測定箇所は、両端部、中央部の3箇所とする  $\ell$ ：支間長（m）		
						横方向最大タワミ	$0.8 \ell$			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	15		P Cホロースラブ製作工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	桁全数について測定。 基準高は、1径間当たり2箇所（支点付近）で1箇所当たり両端と中央部の3点、幅及び厚さは1径間当たり両端と中央部の3箇所。  ※鉄筋の出来形管理基準については、第3編2-18-2床版工に準ずる。  $\ell$ ：桁長（m）		
						幅 $w_1, w_2$	$-5 \sim +30$			
						厚 さ $t$	$-10 \sim +20$			
						桁 長 $\ell$	$\ell < 15 \cdots \pm 10$ $\ell \geq 15 \cdots$ $\pm (\ell - 5)$ かつ $-30\text{mm}$ 以内			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	16	1	P C 箱桁製作工	基 準 高 ▽		±20	桁全数について測定。 基準高は、1 径間当たり 2 箇所（支点付近）で 1 箇所当たり両端と中央部の 3 点、幅及び高さは 1 径間当たり両端と中央部の 3 箇所。  ※鉄筋の出来形管理基準については、第 3 編 2－18－2 床版工に準ずる。  ℓ：桁長（m）		
						幅（上） w <sub>1</sub>		－5～＋30			
						幅（下） w <sub>2</sub>		－5～＋30			
						内 空 幅 w <sub>3</sub>		±5			
						高 さ h <sub>1</sub>		+10 -5			
						内空高さ h <sub>2</sub>		+10 -5			
						桁 長 ℓ		ℓ<15…±10 ℓ≥15… ±（ℓ－5） かつ－30mm以内			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	16	2	P C 押し箱桁製作工	幅（上） w <sub>1</sub>		－5～＋30	桁全数について測定。 桁断面寸法測定箇所は、両端部、中央部の 3 箇所とする。  ※鉄筋の出来形管理基準については、第 3 編 2－18－2 床版工に準ずる。  ℓ：桁長（m）		
						幅（下） w <sub>2</sub>		－5～＋30			
						内 空 幅 w <sub>3</sub>		±5			
						高 さ h <sub>1</sub>		+10 -5			
						内空高さ h <sub>2</sub>		+10 -5			
						桁 長 ℓ		ℓ<15…±10 ℓ≥15… ±（ℓ－5） かつ－30mm以内			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	17		根固めブロック工	基準高 ▽	層 積	±100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所。		
							乱 積	± t / 2			
						厚 さ t		-20	幅、厚さは40個につき 1 箇所測定。		
						幅 w <sub>1</sub>	層 積	-20			
							w <sub>2</sub>	乱 積	－ t / 2		
						延長 L <sub>1</sub>	層 積	－200			
							L <sub>2</sub>	乱 積	－ t / 2		

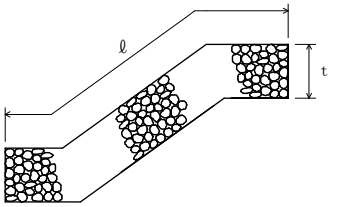
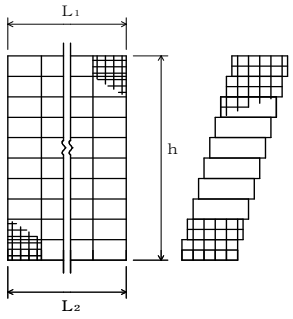
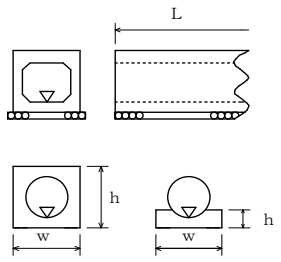
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通の工種	18		沈床工	基 準 高 ▽	±150	1 組毎		
						幅 w	±300			
						延 長 L	-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通の工種	19		捨石工	基 準 高 ▽	-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w	-100			
						延 長 L	-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通の工種	22		階段工	幅 w	-30	1 回／1 施工箇所		
						高 さ h	-30			
						長 さ L	-30			
						段 数	±0 段			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通の工種	24	1	伸縮装置工 (ゴムジョイント)	据 付 け 高 さ	舗装面に対し 0～-2	両端及び中央部付近を測定。		
						表 面 の 凹 凸	3			
						仕 上 げ 高 さ	舗装面に対し 0～-2			

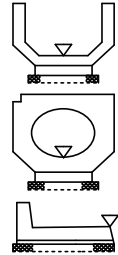
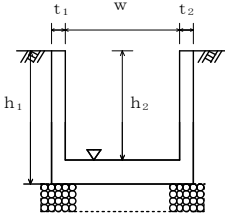
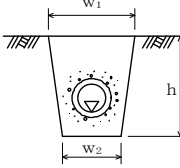
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	24	2	伸縮装置工 (鋼製フィンガージョイント)	高さ	据付け高さ	± 3	高さについては車道端部、中央部各 3 点計 9 点。 縦方向及び横方向間隔は両端、中央部の計 3 点。		
							車線方向各点 誤差の相対差	3			
							表 面 の 凹 凸	3			
						歯型板面の歯咬み合い部の高低差		2			
						縦方向間隔W <sub>1</sub>		± 2			
						横方向間隔W <sub>2</sub>		± 5			
						仕 上 げ 高 さ		舗装面に対し 0 ～ - 2			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	26	1	多自然型護岸工 (巨石張り、巨石積み)	基 準 高 ▽		± 500	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所。		
						法 長 ℓ		-200			
						延 長 L		-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	26	2	多自然型護岸工 (かごマット)	法 長 ℓ		-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所。		
						厚 さ t		-0.2 t			
						延 長 L		-200			

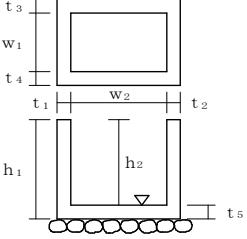
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	27	1	羽口工 (じゃかご)	法長 $\ell$	$\ell < 3 \text{ m}$	-50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
							$\ell \geq 3 \text{ m}$	-100			
						厚 さ t		-50			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	27	2	羽口工 (ふとんかご、かご枠)	高 さ h		-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 $L_1, L_2$		-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 プレキャストカルバート工	28		プレキャストカルバート工  (プレキャストボックス工) (プレキャストパイプ工)	基 準 高 $\nabla$		±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 ※印は、現場打部分のある場合。		
						※幅 w		-50			
						※高 さ h		-30			
						延 長 L		-200			
									1 施工箇所毎		

出来形管理基準及び規格値

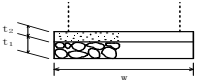
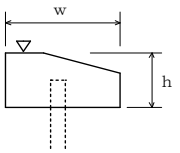
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	29	1	側溝工  (プレキャストU型側溝) (L型側溝工) (自由勾配側溝) (管渠)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L	-200	1箇所／1施工箇所		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	29	2	側溝工  (場所打水路工)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚 さ $t_1, t_2$	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ $h_1, h_2$	-30			
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	3 共 通 的 工 種	29	3	側溝工  (暗渠工)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。 延長40m（又は50m）以下のものは1施工につき2箇所。		
						幅 $w_1, w_2$	-50			
						深 さ h	-30			
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		

単位：mm

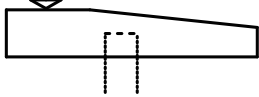
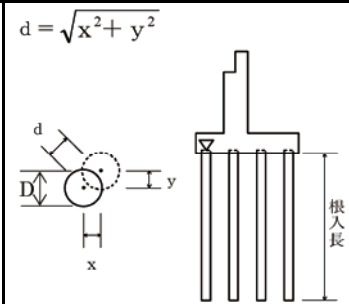
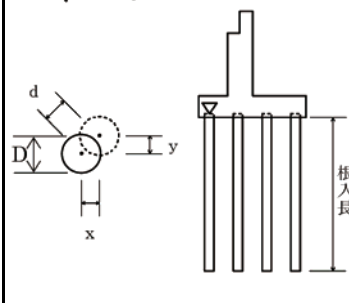
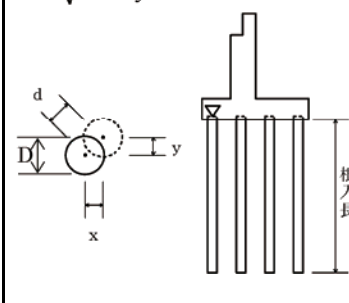
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	30		集水桝工	基 準 高 ▽	±30	1箇所毎 ※は、現場打部分のある場合		
						※厚さ $t_1 \sim t_5$	-20			
						※幅 $w_1, w_2$	-30			
						※高さ $h_1, h_2$	-30			
3 土木工事共通編	2 一般施工	3 共通的工種	31		現場塗装工	塗 膜 厚	a. ロットの塗膜厚平均値は、目標塗膜厚合計値の90%以上。 b. 測定値の最小値は、目標塗膜厚合計値の70%以上。 c. 測定値の分布の標準偏差は、目標塗膜厚合計値の20%を超えない。 ただし、測定値の平均値が目標塗膜厚合計値より大きい場合はこの限りではない。	塗装終了時に測定。 1ロットの大きさは500㎡とする。 1ロット当たりの測定数は25点とし、各点の測定は5回行い、その平均値をその点の測定値とする。		

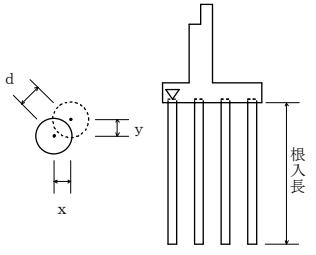
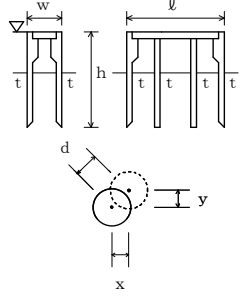
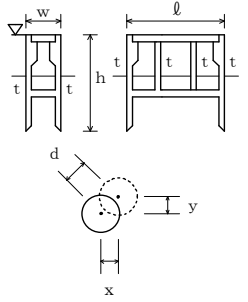


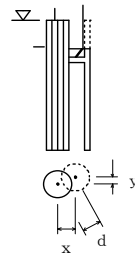
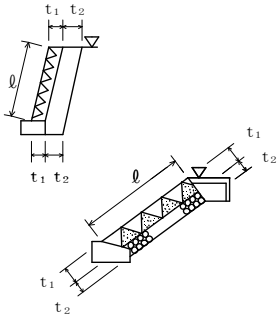
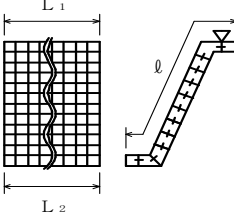
単位：mm

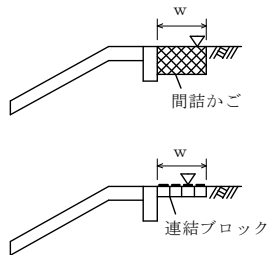
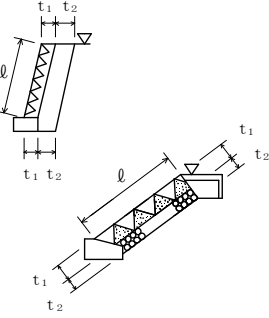
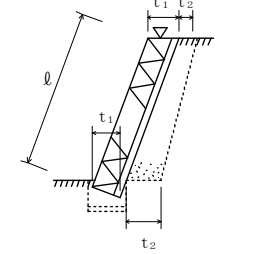
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	4 基 礎 工	1		一般事項  (切込砂利) (碎石基礎工) (割ぐり石基礎工) (均しコンクリート)	幅 w	設計値以上	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚さ t <sub>1</sub> , t <sub>2</sub>	-30			
						延 長 L	各構造物の規格値による			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	4 基 礎 工	3	1	基礎工（護岸）  (現場打)	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w	-30			
						高 さ h	-30			
						延 長 L	-200			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	3	2	基礎工（護岸） （プレキャスト）	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L	-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	4	1	既製杭工 （既製コンクリート杭） （鋼管杭） （H鋼杭）	基 準 高 ▽	±50	全数について杭中心で測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						根 入 長	設計値以上			
						偏 心 量 d	D/4 以内かつ100以内			
						傾 斜	1/100以内			
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	4	2	既製杭工 （鋼管ソイルセメント杭）	基 準 高 ▽	±50	全数について杭中心で測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						根 入 長	設計値以上			
						偏 心 量 d	100以内			
						傾 斜	1/100以内			
						杭 径 D	設計値以上			
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	5		場所打杭工	基 準 高 ▽	±50	全数について杭中心で測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						根 入 長	設計値以上			
						偏 心 量 d	100以内			
						傾 斜	1/100以内			
						杭 径 D	{設計径（公称径）-30} 以上			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	6		深礎工	基 準 高 ▽	±50	全数について杭中心で測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						根 入 長	設計値以上			
						偏 心 量 d	150以内			
						傾 斜	1/50以内			
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	7		オープンケーソン基礎工	基 準 高 ▽	±100	壁厚、幅、高さ、長さ、偏心量については各打設ロットごとに測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						ケーソンの長さ ℓ	-50			
						ケーソンの幅 w	-50			
						ケーソンの高さ h	-100			
						ケーソンの壁厚 t	-20			
						偏 心 量 d	300以内			
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	8		ニューマチックケーソン基礎工	基 準 高 ▽	±100	壁厚、幅、高さ、長さ、偏心量については各打設ロットごとに測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						ケーソンの長さ ℓ	-50			
						ケーソンの幅 w	-50			
						ケーソンの高さ h	-100			
						ケーソンの壁厚 t	-20			
						偏 心 量 d	300以内			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	4 基礎工	9		鋼管矢板基礎工	基 準 高 ▽		±100	基準高は、全数を測定。 偏心量は、1基ごとに測定。	$d = \sqrt{x^2 + y^2}$ 	
						根 入 長		設計値以上			
						偏 心 量 d		300以内			
3 土木工事共通編	2 一般施工	5 石・ブロック積（張）工	3	1	コンクリートブロック工  （コンクリートブロック積） （コンクリートブロック張り）	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。厚さは上端部及び下端部の2箇所を測定。		
						法長 ℓ	ℓ < 3 m	-50			
							ℓ ≥ 3 m	-100			
						厚さ（ブロック積張） t <sub>1</sub>		-50			
						厚さ（裏込） t <sub>2</sub>		-50			
						延 長 L		-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	5 石・ブロック積（張）工	3	2	コンクリートブロック工  （連節ブロック張り）	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						法 長 ℓ		-100			
						延長 L <sub>1</sub> , L <sub>2</sub>		-200			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	5 石・ブロック積（張）工	3	3	コンクリートブロック工  （天端保護ブロック）	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w		-100			
						延 長 L		-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	5 石・ブロック積（張）工	4		緑化ブロック工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。厚さは上端部及び下端部の2箇所を測定。		
						法長 ℓ	ℓ < 3 m	-50			
							ℓ ≥ 3 m	-100			
						厚さ（ブロック） t <sub>1</sub>		-50			
						厚さ（裏込） t <sub>2</sub>		-50			
						延 長 L		-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	5 石・ブロック積（張）工	5		石積（張）工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。厚さは上端部及び下端部の2箇所を測定。		
						法長 ℓ	ℓ < 3 m	-50			
							ℓ ≥ 3 m	-100			
						厚さ（石積・張） t <sub>1</sub>		-50			
						厚さ（裏込） t <sub>2</sub>		-50			
						延 長 L		-200			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	7	1	アスファルト舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—	—	基準高は延長40m毎に1箇所の割とし、道路中心線および端部で測定。厚さは各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。幅は、延長80m毎に1箇所の割に測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事とは、管理図等を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> 以上あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が、3,000 t 以上の場合が該当する。 小規模工事とは、中規模以上の工事より規模は小さいものの、管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で2,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層及び表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満 厚さは、個々の測定値が10個に9個以上の割合で規格値を満足しなければならないとともに、10個の測定値の平均値 (X <sub>10</sub> ) について満足しなければならない。ただし、厚さのデータ数が10個未満の場合は測定値の平均値は適用しない。	
						厚 さ	-45	-45	-15	-15			
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	7	2	アスファルト舗装工  (上層路盤工) 粒度調整路盤工	厚 さ	-25	-30	-8	-10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。		
						幅	-50	-50	—	—			

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	7	3	アスファルト舗装工  (上層路盤工) セメント(石灰) 安定処理工	厚 さ	-25	-30	-8	-10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア を採取もしくは掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事とは、管理図等を 描いた上での管理が可能な工事をい い、舗装施工面積が10,000m2以上あ るいは使用する基層および表層用混 合物の総使用量が、3,000 t 以上の場 合が該当する。 小規模工事とは、中規模以上の工 事より規模は小さいものの、管理結 果を施工管理に反映できる規模の工 事をいい、同一工種の施工が数日連 続する場合で、次のいずれかに該当 するものをいう。 ①施工面積で2,000m2以上10,000m2未 満 ②使用する基層及び表層用混合物の 総使用量が500t以上3,000t未満 厚さは、個々の測定値が10個に9個 以上の割合で規格値を満足しなけれ ばならないとともに、10個の測定値 の平均値(X <sub>10</sub> )について満足しなけ ればならない。ただし、厚さのデー タ数が10個未満の場合は測定値の平 均値は適用しない。	
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	7	4	アスファルト舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5	-7	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア を採取して測定。		
						幅	-50	-50	—	—			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	7	5	アスファルト舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3	-4	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1箇の割でコアー を採取して測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事とは、管理図等を 描いた上での管理が可能な工事をいい、 舗装施工面積が10,000㎡以上ある いは使用する基層および表層用混 合物の総使用量が、3,000 t 以上の場 合が該当する。 小規模工事とは、中規模以上の工 事より規模は小さいものの、管理結 果を施工管理に反映できる規模の工 事をいい、同一工種の施工が数日連 続する場合で、次のいずれかに該当 するものをいう。 ①施工面積で2,000㎡以上10,000㎡未 満 ②使用する基層及び表層用混合物の 総使用量が500t以上3,000t未満	
						幅	-25	-25	—	—			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	7	6	アスファルト舗装工  (表層工)	厚 さ	-7	-9	-2	-3	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1箇の割でコアー を採取して測定。	厚さは、個々の測定値が10個に9個 以上の割合で規格値を満足しなければ ならないとともに、10個の測定値 の平均値 (X <sub>10</sub> ) について満足しなけれ ばならない。ただし、厚さのデー タ数が10個未満の場合は測定値の平 均値は適用しない。  コアー採取について 橋面舗装等でコアー採取により床 版等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項 目を省略することが出来る。	
						幅	-25	-25	—	—			
						平 坦 性	—		3m <sup>2</sup> プロファイルメー (σ)2.4mm以下 直読式(足付 き) (σ)1.75mm以 下				



編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木 工事 共通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	1	半たわみ性舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—	—	基準高は延長40m毎に1箇所の割とし、道路中心線及び端部で測定。 厚さは各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。 幅は、延長80m毎に1箇所の割に測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事は、管理図等を描いた上での管理が可能な工事をいい、基層および表層用混合物の総使用量が3,000 t 以上の場合が該当する。  小規模工事とは、中規模以上の工事より規模は小さいものの、管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合が該当する。	
						厚 さ	-45	-45	-15	-15			
						幅	-50	-50	—	—			
3 土木 工事 共通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	2	半たわみ性舗装工  (上層路盤工) 粒度調整路盤工	厚 さ	-25	-30	-8	-10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。		
						幅	-50	-50	—	—			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	3	半たわみ性舗装工 (上層路盤工)  セメント（石灰）安 定処理工	厚 さ	-25	-30	-8	-10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアーを 採取もしくは掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事は、管理図等を描 いた上での管理が可能な工事をいい、 基層および表層用混合物の総使用 量が3,000 t 以上の場合が該当す る。 小規模工事とは、中規模以上の工 事より規模は小さいものの、管理結 果を施工管理に反映できる規模の工 事をいい、同一工種の施工が数日連 続する場合が該当する。	
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	4	半たわみ性舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5	-7	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアーを 採取して測定。	コアー採取について 橋面舗装等でコアー採取により床 版等 に損傷を与える恐れのある場合は、 他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項 目を省略することが出来る。	
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	5	半たわみ性舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3	-4	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアーを 採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	8	6	半たわみ性舗装工  (表層工)	厚 さ	-7	-9	-2	-3	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡毎に1個の割でコアー を採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
						平 坦 性	—		3m <sup>2</sup> プロフィールメーター (σ)2.4mm以下 直読式(足付 き) (σ)1.75mm以 下				

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	1	排水性舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—	—	基準高は延長40m毎に1箇所の割とし、道路中心線及び端部で測定。 厚さは各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。 幅は、延長80m毎に1箇所の割に測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事は、管理図等を描いた上での管理が可能な工事をいい、基層および表層用混合物の総使用量が3,000 t 以上の場合が該当する。  小規模工事とは、中規模以上の工事より規模は小さいものの、管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合は該当する。  コア採取について 橋面舗装等でコア採取により床版等に損傷を与える恐れのある場合は、他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項目を省略することが出来る。	
						厚 さ	-45	-45	-15	-15			
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	2	排水性舗装工  (上層路盤工) 粒度調整路盤工	厚 さ	-25	-30	-8	—10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。		
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	3	排水性舗装工  (上層路盤工) セメント（石灰）安定処理工	厚 さ	-25	-30	-8	-10	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは、1000㎡に1個の割でコアを採取もしくは掘り起こして測定。		
						幅	-50	-50	—	—			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	4	排水性舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5	-7	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアーを 採取して測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事は、管理図等を描 いた上での管理が可能な工事をいい、 基層および表層用混合物の総使用 量が3,000 t 以上の場合が該当す る。 小規模工事とは、中規模以上の工 事より規模は小さいものの、管理結 果を施工管理に反映できる規模の工 事をいい、同一工種の施工が数日連 続する場合が該当する。  コアー採取について 橋面舗装等でコアー採取により床 版等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項 目を省略することが出来る。	
						幅	-50	-50	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	5	排水性舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3	-4	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアーを 採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	9	6	排水性舗装工  (表層工)	厚 さ	-7	-9	-2	-3	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡毎に1個の割でコアー を採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
						平 坦 性	—		3m <sup>2</sup> プロファイル マター (σ)2.4mm以下 直読式(足付 き) (σ)1.75mm以 下				

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	10	1	透水性舗装工  (路盤工)	基準高▽	±50		—		基準高は片側延長40m毎に1箇所 の割で測定。 厚さは、片側延長200m毎に1箇所掘り 起こして測定。 幅は、片側延長80m毎に1箇所測定。  ※歩道舗装に適用する。		
						厚  さ	t < 15cm	-30	-10				
							t ≥ 15cm	-45	-15				
						幅	-100		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	10	2	透水性舗装工  (表層工)	厚さ	-9		-3		幅は、片側延長80m毎に1箇所 の割で測定。 厚さは、片側延長200m毎に1箇所 コアを採取して測定。  ※歩道舗装に適用する。		
						幅	-25		—				

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X10)				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	11	1	グースアスファルト 舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5	-7	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアを 採取して測定。	工事規模の考え方 中規模以上の工事は、管理図等を描 いた上での管理が可能な工事をい い、基層および表層用混合物の総使 用量が3,000 t 以上の場合が該当す る。 小規模工事とは、中規模以上の工 事より規模は小さいものの、管理結 果を施工管理に反映できる規模の工 事をいい、同一工種の施工が数日連 続する場合が該当する。  コア採取について	橋面舗装等でコア採取により床版 等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項目 を省略することが出来る。
						幅	-50	-50	—	—			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	11	2	グースアスファルト 舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3	-4	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡に1個の割でコアを 採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	11	3	グースアスファルト 舗装工  (表層工)	厚 さ	-7	-9	-2	-3	幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1000㎡毎に1個の割でコアを 採取して測定。		
						幅	-25	-25	—	—			
						平 坦 性	—		3m <sup>7</sup> ° プロファイルメーター (σ)2.4mm以下 直読式(足付 き) (σ)1.75mm以 下				

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	1	コンクリート舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—		基準高は延長40m毎に1箇所の割とし、道路中心線および端部で測定。厚さは各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。幅は、延長80m毎に1箇所の割に測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱アスファルト混合物の総使用量が500t未満あるいは施工面積が2,000㎡未満。厚さは、個々の測定値が10個に9個以上の割合で規格値を満足しなければならないとともに、10個の測定値の平均値(X <sub>10</sub> )について満足しなければならない。ただし、厚さのデータ数が10個未満の場合は測定値の平均値は適用しない。  コア採取について 橋面舗装等でコア採取により床版等に損傷を与える恐れのある場合は、他の方法によることが出来る。	
						厚 さ	-45		-15				
						幅	-50		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	2	コンクリート舗装工  (粒度調整路盤工)	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。		
						幅	-50		—				

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	12	3	コンクリート舗装工  (セメント（石灰・ 瀝青）安定処理工）	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア を採取もしくは掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積 が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱ア スファルト混合物の総使用量が500 t 未満あるいは施工面積が2,000 ㎡未 満。 厚さは、個々の測定値が10個に9個 以上の割合で規格値を満足しなけれ ばならないとともに、10個の測定値 の平均値（X <sub>10</sub> ）について満足しなけ ればならない。ただし、厚さのデー タ数が10個未満の場合は測定値の平 均値は適用しない。  コア採取について 橋面舗装等でコア採取により床版 等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。	
						幅	-50		—				
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	12	4	コンクリート舗装工  (アスファルト中間 層)	厚 さ	-9	-12	-3		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア を採取して測定。		
						幅	-25		—				



編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	5	コンクリート舗装工  (コンクリート舗装 版工)	厚 さ	—10		-3.5		厚さは各車線の中心付近で型枠据付後 各車線200m毎に水糸又はレベルによ り1測線当たり横断方向に3箇所以上 測定、幅は、延長80m毎に1箇所の割 で測定。平坦性は各車線毎に版縁から 1mの線上、全延長とする。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積 が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱ア スファルト混合物の総使用量が500 t 未満あるいは施工面積が2,000 ㎡未 満。 厚さは、個々の測定値が10個に9 個以上の割合で規格値を満足しなけ ればならないとともに、10個の測定 値の平均値(X <sub>10</sub> )について満足しな ければならない。ただし、厚さの データ数が10個未満の場合は測定値 の平均値は適用しない。  維持工事においては、平坦性の項 目を省略することが出来る。	
						幅	—25		—				
						平 坦 性	—		コンクリート の硬化後 3mプロフィル メーターによ り機械舗設の 場合 (σ)2.4mm以下 人力舗設の場 合(σ)3mm以下				
						目地段差	± 2						
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	6	コンクリート舗装工  (転圧コンクリート 版工) 下層路盤工	基準高▽	±40	±50	—		基準高は、延長40m毎に1箇所の割と し、道路中心線及び端部で測定。厚さ は、各車線200m毎に1箇所を掘り起 こして測定。幅は、延長80m毎に1箇 所の割に測定。		
						厚 さ	—45		—15				
						幅	—50		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	7	コンクリート舗装工  (転圧コンクリート 版工) 粒度調整路盤工	厚 さ	—25	—30	— 8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘 り起こして測定。		
						幅	—50		—				

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	8	コンクリート舗装工  (転圧コンクリート 版工) セメント（石灰・瀝 青）安定処理工	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア ーを採取もしくは、掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積 が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱ア スファルト混合物の総使用量が500 t 未満あるいは施工面積が2,000㎡未 満。 厚さは、個々の測定値が10個に9 個以上の割合で規格値を満足しな ければならないとともに、10個の測定 値の平均値（X <sub>10</sub> ）について満足しな ければならない。ただし、厚さの データ数が10個未満の場合は測定値 の平均値は適用しない。	
						幅	-50		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	9	コンクリート舗装工  (転圧コンクリート 版工) アスファルト中間層	厚 さ	-9	-12	-3		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコア ーを採取して測定。	コアー採取について 橋面舗装等でコアー採取により床 版等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。  維持工事においては、平坦性の項 目を省略することが出来る。	
						幅	-25		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	12	10	コンクリート舗装工  (転圧コンクリート 版工)	厚 さ	-15		-4.5		厚さは、各車線の中心付近で型枠据付 後各車線200m毎に水系又はレベルに より1測線当たり横断方向に3箇所以 上測定、幅は、延長80m毎に1箇所の 割で測定、平坦性は各車線毎に版縁か ら1mの線上、全延長とする。		
						幅	-35		—				
						平 坦 性	—		転圧コンク リートの硬化 後、3mプロ フィルメー ターにより (σ)2.4mm以 下。				
						目地段差	± 2						

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	13	1	薄層カラー舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—		基準高は、延長40m毎に1箇所の割とし、道路中心線及び端部で測定。厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。幅は、延長80m毎に1箇所の割に測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱アスファルト混合物の総使用量が500 t未満あるいは施工面積が2,000 ㎡未満。 厚さは、個々の測定値が10個に9個以上の割合で規格値を満足しなければならないとともに、10個の測定値の平均値（X <sub>10</sub> ）について満足しなければならない。ただし、厚さのデータ数が10個未満の場合は測定値の平均値は適用しない。	
						厚 さ	-45		-15				
						幅	-50		—				
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	6 一 般 舗 装 工	13	2	薄層カラー舗装工  (上層路盤工) 粒度調整路盤工	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、厚さは、各車線200m毎に1箇所を掘り起こして測定。		
						幅	-50		—				

単位：mm

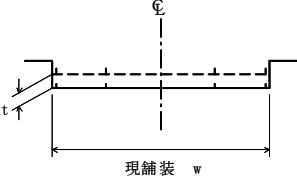
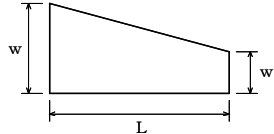
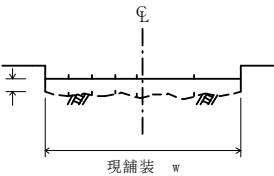
編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	13	3	薄層カラー舗装工  (上層路盤工) セメント（石灰）安定処理工	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコアー を採取もしくは掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積 が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱ア スファルト混合物の総使用量が500 t 未満あるいは施工面積が2,000 ㎡未 満。 厚さは、個々の測定値が10個に9個 以上の割合で規格値を満足しなければ ならないとともに、10個の測定値 の平均値（X <sub>10</sub> ）について満足しな ければならない。ただし、厚さの データ数が10個未満の場合は測定値 の平均値は適用しない。  コアー採取について 橋面舗装等でコアー採取により床版 等に損傷を与える恐れのある場合 は、他の方法によることが出来る。	
						幅	-50		—				
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	13	4	薄層カラー舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコアー を採取して測定。		
						幅	-50		—				
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	13	5	薄層カラー舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3		幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、 厚さは、1,000㎡に1個の割でコアー を採取して測定。		
						幅	-25		—				

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均 (X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装 工	14	1	ブロック舗装工  (下層路盤工)	基準高▽	±40	±50	—		基準高は、延長40m毎に1箇所 の割とし、道路中心線及び端部 で測定。 厚さは、各車線200m毎に1箇 所を掘り起こして測定。 幅は、延長80m毎に1箇所の割 に測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工 面積が2,000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加 熱アスファルト混合物の総使用 量が500 t未満あるいは施工面 積が2,000 ㎡未満。 厚さは、個々の測定値が10個 に9個以上の割合で規格値を満 足しなければならないとともに 、10個の測定値の平均値 (X <sub>10</sub> ) について満足しなければならない 。ただし、厚さのデータ数が10 個未満の場合は測定値の平均値 は適用しない。	
						厚さ	-45		-15				
						幅	-50		—				
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装 工	14	2	ブロック舗装工  (上層路盤工) 粒度調整路盤工	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所の割 とし、 厚さは、各車線200m毎に1箇 所を掘り起こして測定。		
						幅	-50		—				

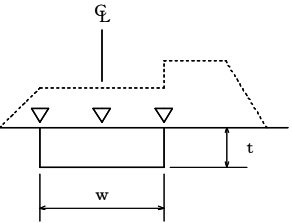
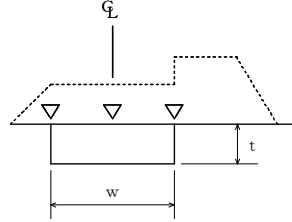
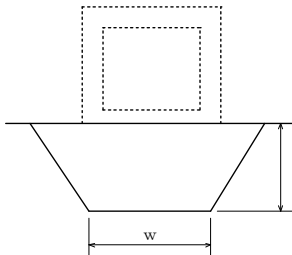
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値				測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
							中規模 以上	小規模 以下	中規模 以上	小規模 以下			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	14	3	ブロック舗装工  (上層路盤工) セメント(石灰) 安定処理工	厚 さ	-25	-30	-8		幅は、延長80m毎に1箇所 の割とし、厚さは、1,000㎡ に1個の割でコアを採取 もしくは掘り起こして測定。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの 施工面積が2,000㎡以上と する。 小規模とは、表層及び基層 の加熱アスファルト混合物 の総使用量が500t未満ある いは施工面積が2,000㎡未 満。 厚さは、個々の測定値が10 個に9個以上の割合で規格値 を満足しなければならないと ともに、10個の測定値の平 均値(X <sub>10</sub> )について満足しな ければならない。ただし、厚 さのデータ数が10個未満の 場合は測定値の平均値は適 用しない。  コア採取について 橋面舗装等でコア採取によ り床版等に損傷を与える恐 れのある場合は、他の方法 によることが出来る。	
						幅	-50		—				
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	14	4	ブロック舗装工  (加熱アスファルト 安定処理工)	厚 さ	-15	-20	-5		幅は、延長80m毎に1箇所 の割とし、厚さは、1,000㎡ に1個の割でコアを採取 して測定。		
						幅	-50		—				
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	6 一般 舗装工	14	5	ブロック舗装工  (基層工)	厚 さ	-9	-12	-3		幅は、延長80m毎に1箇所 の割とし、厚さは、1,000㎡ に1個の割でコアを採取 して測定。		
						幅	-25		—				

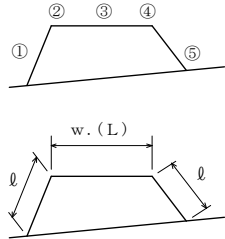
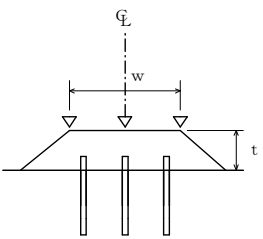
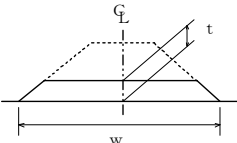
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値		測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)	平均の測定値 (X <sub>10</sub> )			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	15		路面切削工	厚 さ t	-7	-2	厚さは40m毎に現舗装高切削後の基準高の差で算出する。 測定点は車道中心線、車道端及びその中心とする。 延長40m未満の場合は、2箇所／施工箇所とする。 断面状況で、間隔、測点数を変えることが出来る。 測定方法は自動横断測定法によることが出来る。		
						幅 w	-25	—			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	16		舗装打換え工	路盤工	幅 w	-50	各層毎1箇所／1施工箇所		
							延長 L	-100			
							厚さ t	該当工種			
						舗設工	幅 w	-25			
							延長 L	-100			
							厚さ t	該当工種			
3 土木工事共通編	2 一般施工	6 一般舗装工	17		オーバーレイ工	厚 さ t	-9		厚さは40m毎に現舗装高とオーバーレイ後の基準高の差で算出する。 測定点は車道中心線、車道端及びその中心とする。 幅は、延長80m毎に1箇所の割とし、延長80m未満の場合は、2箇所／施工箇所とする。 断面状況で、間隔、測点数を変えることが出来る。		
						幅 w	-25				
						延 長 L	-100				
						平 坦 性	—	3m <sup>7</sup> プロファイルメーター (σ) 2.4mm以下 直読式(足付き) (σ) 1.75mm以下			

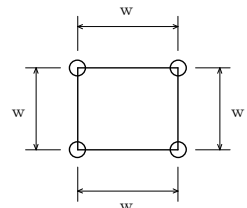
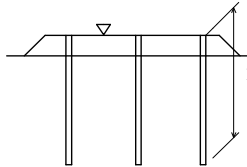
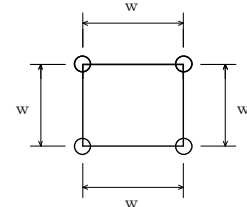
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	7 地盤改良工	2		路床安定処理工	基 準 高 ▽	±50	延長40m毎に1箇所割で測定。 基準高は、道路中心線及び端部で測定。 厚さは中心線及び端部で測定。		
						施工厚さ t	-50			
						幅 w	-100			
						延 長 L	-200			
3 土木工事共通編	2 一般施工	7 地盤改良工	3		置換工	基 準 高 ▽	±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。 厚さは中心線及び端部で測定。	 	
						置換厚さ t	-50			
						幅 w	-100			
						延 長 L	-200			

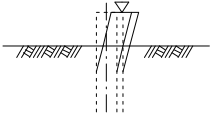
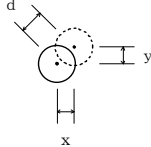
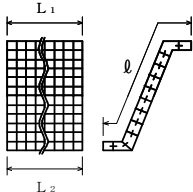
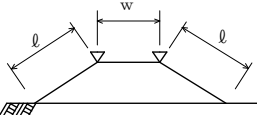


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木 工事 共通 編	2 一 般 施 工	7 地 盤 改 良 工	4		表層安定処理工 (サンドマット海上)	基 準 高 $\nabla$	特記仕様書に明示	施工延長10mにつき、1測点当たり5点以上測定。  w. (L) は施工延長40mにつき1箇所、80m以下のものは1施工箇所につき3箇所。 (L) はセンターライン及び表裏法肩で行う。		
						法 長 $l$	-500			
						天 端 幅 $w$	-300			
						天端延長 $L$	-500			
3 土木 工事 共通 編	2 一 般 施 工	7 地 盤 改 良 工	5		パイルネット工	基 準 高 $\nabla$	±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。 厚さは中心線及び両端で掘り起こして測定。 杭については、当該杭の項目に準ずる。		
						厚 さ $t$	-50			
						幅 $w$	-100			
						延 長 $L$	-200			
3 土木 工事 共通 編	2 一 般 施 工	7 地 盤 改 良 工	6		サンドマット工	施工厚さ $t$	-50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。 厚さは中心線及び両端で掘り起こして測定。		
						幅 $w$	-100			
						延 長 $L$	-200			

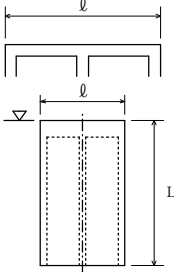
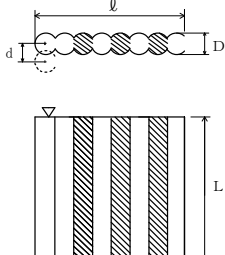
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	7 地盤改良工	7		パーチカルドレーン工  (サンドドレーン工) (ペーパードレーン工) (袋詰式サンドドレーン工)  締固め改良工 (サンドコンパクションパイル工)	位置・間隔w	±100	100本に1箇所。 100本以下は2箇所測定。1箇所に4本測定。 ただし、ペーパードレーンの杭径は対象外とする。	  	
						杭 径 D	設計値以上			
						打 込 長 さ h	設計値以上	全本数		
						サンドドレーン、袋詰式サンドドレーン、サンドコンパクションパイルの砂投入量	—	全本数 計器管理にかえることができる。		
3 土木工事共通編	2 一般施工	7 地盤改良工	9		固結工  (粉体噴射攪拌工) (高圧噴射攪拌工) (スラリー攪拌工) (生石灰パイル工)	基 準 高 ▽	-50	100本に1箇所。 100本以下は2箇所測定。 1箇所に4本測定。		
						位置・間隔w	D/4 以内			
						杭 径 D	設計値以上	全本数		
						深 度 ℓ	設計値以上			

※余長は、適用除外

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	10 仮設工	5	1	土留・仮締切工 (H鋼杭) (鋼矢板)	基 準 高 $\nabla$	±100	基準高は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。延長40m（又は50m）以下のものは、1施工箇所につき2箇所。 (任意仮設は除く)		
						根 入 長	設計値以上			
3 土木工事共通編	2 一般施工	10 仮設工	5	2	土留・仮締切工 (アンカー工)	削 孔 深 さ $\ell$	設計深さ以上	全数 (任意仮設は除く)	 $d = \sqrt{x^2 + y^2}$	
						配 置 誤 差 d	100			
3 土木工事共通編	2 一般施工	10 仮設工	5	3	土留・仮締切工 (連節ブロック張り工)	法 長 $\ell$	-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延長 $L_1$ $L_2$	-200	1施工箇所毎		
3 土木工事共通編	2 一般施工	10 仮設工	5	4	土留・仮締切工 (締切盛土)	基 準 高 $\nabla$	-50	施工延長50mにつき1箇所。 延長50m以下のものは1施工箇所につき2箇所。 (任意仮設は除く)		
						天 端 幅 w	-100			
						法 長 $\ell$	-100			

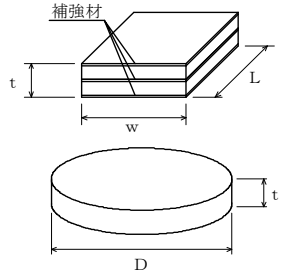
単位：mm

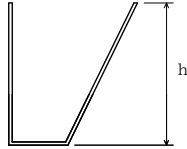
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	10 仮 設 工	5	5	土留・仮締切工 (中詰盛土)	基 準 高 ▽	-50	施工延長50mにつき1箇所。 延長50m以下のものは、1施工箇所につき2箇所。 (任意仮設は除く)		
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	10 仮 設 工	9		地中連続壁工（壁式）	基 準 高 ▽	±50	基準高は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。延長40m（又は50m）以下のものについては1施工箇所につき2箇所。 変位は施工延長20m（測点間隔25mの場合は25m）につき1箇所。延長20m（又は25m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						連壁の長さ ℓ	-50			
						変 位	300			
						壁 体 長 L	-200			
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	10 仮 設 工	10		地中連続壁工（柱列式）	基 準 高 ▽	±50	基準高は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。延長40m（又は50m）以下のものについては1施工箇所につき2箇所。 変位は施工延長20m（測点間隔25mの場合は25m）につき1箇所。延長20m（又は25m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		D：杭径
						連壁の長さ ℓ	-50			
						変 位 d	D/4以内			
						壁 体 長 L	-200			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	12 工 場 製 作 工 共 通	1	1	鑄造費（金属支承工）	上 下 部 鋼 構 造 物 と の 接 合 用 ボ ル ト 孔	孔の直径差		+2 -0	製品全数を測定。			
							中 心 距 離	センターボスを基準 にした孔位置のずれ					
								≦1000mm	1 以下				
								センターボスを基準 にした孔位置のずれ					
								>1000mm	1. 5以下				
						ア ン カ ー ボ ル ト 用 孔 （ 鑄 放 し ）	孔 の 直 径	≦100mm	+3 -1				
								>100mm	+4 -2				
							孔の中心距離		JIS B 0403-95 CT13				
						セ ン タ ー ボ ス	ボ ス の 直 径		+0 -1				
							ボ ス の 高 さ		+1 -0				

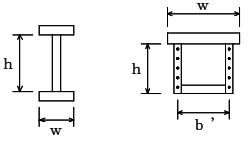
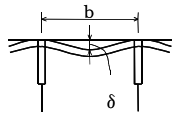
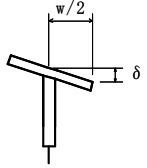
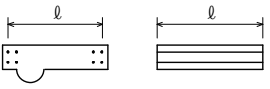
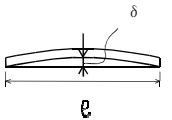
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	1	1	鑄造費（金属支承工）	上巻の橋軸及び直角方向の長さ寸法	JIS B 0403-95 CT13	製品全数を測定。 ※1) 片面削り加工も含む。  ※2) ただし、ソールプレート接触面の橋軸及び橋軸直角方向の長さ寸法に対してはCT13を適用する。		
						全移動量 $\ell$	$\ell \leq 300\text{mm}$	$\pm 2$		
							$\ell > 300\text{mm}$	$\pm \ell / 100$		
						組立高さH  コンクリート構造用	上, 下面加工仕上げ	$\pm 3$		
							H $\leq 300\text{mm}$	$\pm 3$		
							H $> 300\text{mm}$	(H/200+3) 小数点以下切り捨て		
						普通寸法	鑄放し長さ寸法 ※1)、※2)	JIS B 0403-95 CT14		
							鑄放し肉厚寸法 ※1)	JIS B 0403-95 CT15		
							削り加工寸法	JIS B 0405-91 粗級		
							ガス切断寸法	JIS B 0417-79 B級		
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	1	2	鑄造費（大型ゴム支承工）	幅w 長さL 直径D	w, L, D $\leq 500$	0 ～ + 5	製品全数を測定。 平面度：1個のゴム支承の厚さ（t）の最大相対誤差	
							500 < w, L, D $\leq 1500\text{mm}$	0 ～ + 1 %		
							1500 < w, L, D	0 ～ + 15		
						厚さt	t $\leq 20\text{mm}$	$\pm 0.5$		
							20 < t $\leq 160$	$\pm 2.5\%$		
							160 < t	$\pm 4$		
						平 面 度		1		

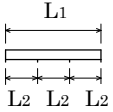
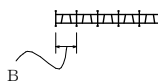

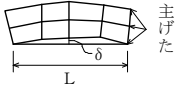
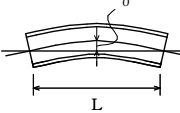
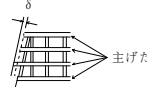
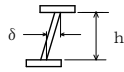
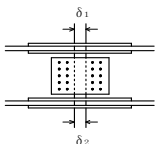


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	1	3	仮設材製作工	部 材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$	図面の寸法表示箇所にて測定。		
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	1	4	刃口金物製作工	刃 口 高 さ $h$ (m)		$\pm 2 \cdots h \leq 0.5$ $\pm 3 \cdots 0.5 < h \leq 1.0$ $\pm 4 \cdots 1.0 < h \leq 2.0$	図面の寸法表示箇所にて測定。		
						外周長 $L$ (m)		$\pm (10+L/10)$			

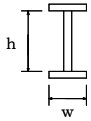
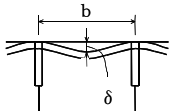
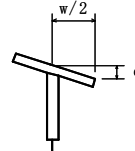
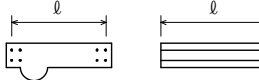
単位：mm

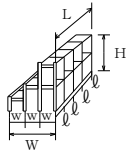
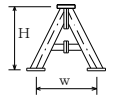
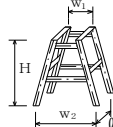
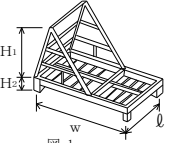
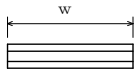
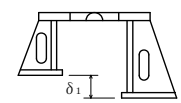

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準		測 定 箇 所	摘 要							
									鋼げた等	トラス・アーチ等									
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	3	1	桁製作工 (仮組立による検査を実施する場合)  (シミュレーション仮組立検査を行う場合)	部 材 精 度			フランジ幅 w (m)  腹板高 h (m) 腹板間隔 b' (m)	$\pm 2 \cdots \cdots w \leq 0.5$ $\pm 3 \cdots \cdots 0.5 < w \leq 1.0$ $\pm 4 \cdots \cdots 1.0 < w \leq 2.0$ $\pm (3+w/2) \cdots \cdots 2.0 < w$	主げた・主構 各支点及び各支間中央付近を測定。 床組など 構造別に、5部材につき1個抜き 取った部材の中央付近を測定。 なお、JISマーク表示品を使用する場 合は、製造工場の発行するJISに基づ く試験成績表に替えることができる。	 I型鋼げた      トラス弦材							
							板 の 平 面 度 δ (mm)	鋼げた及び トラス等の 部材の腹板	$h/250$	主げた 各支点及び各支間中央付近を測定。  h：腹板高 (mm) b：腹板又はリブの間隔 (mm) w：フランジ幅 (mm)									
								箱げた及び トラス等の フランジ鋼 床版のデッ キプレート	$b/150$										
								フランジの直角度 δ (mm)	$w/200$										
							部 材 長 ℓ (m)	鋼げた	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$	原則として仮組立をしない状態の部材 について、主要部材全数を測定。									
								トラス、 アーチなど	$\pm 2 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 3 \cdots \ell > 10$										
							圧縮材の曲がり δ (mm)		$\ell/1000$	—	主要部材全数を測 定。  ℓ：部材長 (mm)								
							※規格値のw, に代入する数値はm単位の数値である。 ただし、「板の平面度δ, フランジの直角度δ, 圧縮材の曲りδ」の規格値のh, b, w, に代入する数値はmm単位の数値とする。												



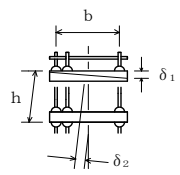
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準		測 定 箇 所	摘 要	
								鋼げた等	トラス・アーチ等			
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工  共通	3	1	桁製作工 (仮組立による検査を実施する場合)  (シミュレーション仮組立検査を行う場合)	仮組立精度	全長 L <sub>1</sub> (m) 支間長 L <sub>2</sub> (m)	± (10+L <sub>1</sub> /10) ± (10+L <sub>2</sub> /10)	主げた、主構全数を測定。			
							主げた、主構の中心間距離 B (m)	± 4…… B ≤ 2 ± (3+B/2) …… B > 2	各支点及び各支間中央付近を測定。			
							主構の組立高さ h (m)	± 5…… h ≤ 5 ± (2.5+h/2) …… h > 5	—	両端部及び中心部を測定。		
							主げた、主構の通り δ (mm)	5+L/5…… L ≤ 100 25…… L > 100	最も外側の主げた又は主構について支点及び支間中央の1点を測定。 L：測線上 (m)			
							主げた、主構のそり δ (mm)	-5～+5…… L ≤ 20 -5～+10…… 20 < L ≤ 40 -5～+15…… 40 < L ≤ 80 -5～+25…… 80 < L ≤ 200	各主げたについて10～12m間隔を測定。 L：主げたの支間長 (m)	各主構の各格点を測定。 L：主構の支間長 (m)		
							主げた、主構の橋端における出入差 δ (mm)	設計値 ± 10	どちらか一方の主げた（主構）端を測定。			
							主げた、主構の鉛直度 δ (mm)	3+h/1,000	各主桁の両端部を測定。 h：主げたの高さ (mm)	支点及び支間中央付近を測定。 h：主構の高さ (mm)		
							現場継手部のすき間 δ 1, δ 2 (mm)	設計値 ± 5	主げた、主構の全継手数の1／2を測定。 δ 1、δ 2のうち大きいもの 設計値が5mm以下の場合は、マイナス側については設計値以上とする。			
							※規格値のL, B, h に代入する数値はm単位の数値である。 ただし、「主げた、主構の鉛直度 δ」の規格値のhに代入する数値はmm単位の数値とする。					

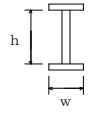
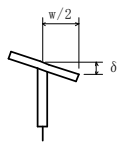

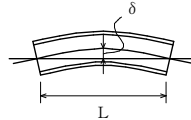
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要		
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	3	2	桁製作工 (仮組立検査を実施しない場合)	部 材 精 度	フランジ幅 w (m)  腹板高 h (m)		$\pm 2 \cdots \cdots$ $w \leq 0.5$ $\pm 3 \cdots \cdots$ $5 < w \leq 1.0$ $\pm 4 \cdots \cdots$ $1.0 < w \leq 2.0$ $\pm (3 + w/2) \cdots \cdots$ $2.0 < w$	主げた、主構 各支点及び各支間中央付近を測定。 床組など 構造別に、5部材につき1個抜き取った部材の中央付近を測定。	 I型鋼げた		
							板 の 平 面 度 $\delta$ (mm)	鋼げた等の 部材の腹板	$h / 250$	主げた 各支点及び各支間中央付近を測定。  h：腹板高 (mm) b：腹板又はリブの間隔 (mm) w：フランジ幅 (mm)			
								箱げた等の フランジ鋼 床版のデッキプレート	$b / 150$				
							フランジの直角度 $\delta$ (mm)		$w / 200$	主要部材全数を測定。			
							部 材 長 $\ell$ (m)	鋼げた	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$				
※規格値のw, に代入する数値はm単位の数値である。 ただし、「板の平面度 $\delta$ ，フランジの直角度 $\delta$ 」の規格値のh, b, wに代入する数値はmm単位の数値とする。													

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	3	3	桁製作工  (鋼製えん堤製作工 (仮組立時))	部 材 の 水 平 度		10	全数を測定。	 図 a 格子形 鋼製砂防ダム  図 b 鋼製スリット ダム A 型  図 c 鋼製スリット ダム B 型  図 d 鋼製 L 型 スリットダム	
						堤 長 L		±30			
						堤 長 ℓ		±10			
						堤 幅 W		±30			
						堤 幅 w		±10			
						高 さ H		±10			
						ベースプレートの高さ		±10			
						本 体 の 傾 き		±H/500			
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	4		検査路製作工	部材	部材長 ℓ (m)	±3…ℓ≤10 ±4…ℓ>10	図面の寸法表示箇所で測定。		
3 土木工事共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	5		鋼製伸縮継手製作工	部材	部材長 w (m)	0～+30	製品全数を測定。		
						仮組立時	組合せる伸縮装置との高さの差 δ <sub>1</sub> (mm)	設 計 値 ±4	両端及び中央部付近を測定。	  (実測値) δ <sub>2</sub> 	
							フィンガーの食い違い δ <sub>2</sub> (mm)	±2			

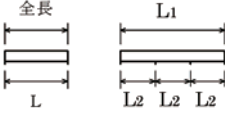
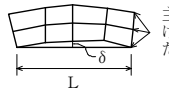
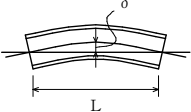
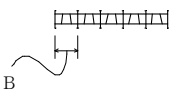
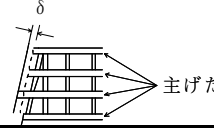
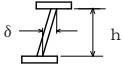
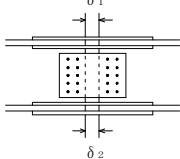
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	6		落橋防止装置製作工	部材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$	図面の寸法表示箇所で測定。		
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	7		橋梁用防護柵製作工	部材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$	図面の寸法表示箇所で測定。		
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	8		アンカーフレーム製作工	仮組立時	上 面 水 平 度 $\delta 1$ (mm)	$b/500$	軸心上全数測定。		
							鉛 直 度 $\delta 2$ (mm)	$h/500$			
							高さ $h$ (mm)	$\pm 5$			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	9		プレビーム用桁製作工			各支点及び各支間中央付近を測定。		
						フ ラ ン ジ 幅 w (m) 腹板高 h (m)	$\pm 2 \dots \dots$ $w \leq 0.5$ $\pm 3 \dots \dots$ $0.5 < w \leq 1.0$ $\pm 4 \dots \dots$ $1.0 < w \leq 2.0$ $\pm (3 + w/2) \dots$ $2.0 < w$			
						部材 フランジの直角度 $\delta$ (mm)	$w / 200$	各支点及び各支間中央付近を測定。		
						部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \dots \ell \leq 10$ $\pm 4 \dots \ell > 10$	原則として仮組立をしない部材について主要部材全数で測定。		
						仮組立時 主げたのそり $\delta$	$-5 \sim +5$ $\dots L \leq 20$ $-5 \sim +10$ $\dots 20 < L \leq 40$	各主げたについて10～12m間隔を測定。		
3 土木工事 共通編	2 一般施工	12 工場製作工 共通	10		鋼製排水管製作工	部材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \dots \ell \leq 10$ $\pm 4 \dots \ell > 10$	図面の寸法表示箇所で測定。	

単位：mm

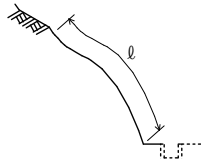
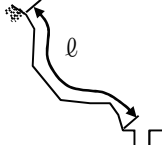
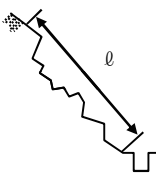
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	12 工場 製作工 共通	11		工場塗装工	塗 膜 厚	a. ロット塗膜厚の平均値は、目標塗膜厚合計値の90%以上。 b. 測定値の最小値は、目標塗膜厚合計値の70%以上。 c. 測定値の分布の標準偏差は、目標塗膜厚合計値の20%を超えない。 ただし、測定値の平均値が目標塗膜厚合計値より大きい場合はこの限りではない。	外面塗装では、無機ジンクリッチペイントの塗付後と上塗り終了時に測定し、内面塗装では内面塗装終了時に測定。 1 ロットの大きさは、500㎡とする。 1 ロット当たり測定数は25点とし、各点の測定は5回行い、その平均値をその点の測定値とする。		

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	13 橋梁架設工			架設工（鋼橋） （クレーン架設） （ケーブルクレーン架設） （ケーブルエレクション架設） （架設桁架設） （送出し架設） （トラベラークレーン架設）	全 長 $L_1$ (m) 支間長 $L_2$ (m)	$\pm (20+L_1/5)$ $\pm (20+L_2/5)$	各けた毎に全数測定。 $L$ ：主げた・主構の支間長 (m)		
						通 り $\delta$ (mm)	$\pm (10+2L/5)$	$L$ ：主げた・主構の支間長 (m)		
						そ り $\delta$ (mm)	$\pm (25+L/2)$	主げた、主構を全数測定。 $L$ ：主げた・主構の支間長 (m)		
						※主げた、主構の中心 間距離B (m)	$\pm 4 \dots B \leq 2$ $\pm (3+B/2) \dots B > 2$	各支点及び各支間中央付近を測定。		
						※主げたの橋端におけ る出入差 $\delta$ (mm)	設計値 $\pm 10$	どちらか一方の主げた（主構）端を測定。		
						※主げた、主構の鉛直 度 $\delta$ (mm)	$3+h/1,000$	各主げたの両端部を測定。h：主げた・主構の高さ (mm)		
						※現場継手部のすき間 $\delta_1, \delta_2$ (mm)	設計値 $\pm 5$	主げた、主構の全継手数の1/2を測定。 $\delta_1, \delta_2$ のうち大きいもの設計値が5mm以下の場合は、マイナス側については設計値以上とする。		
								※は仮組立検査を実施しない工事に適用。		
						※規格値のL, Bに代入する数値はm単位の数値である。 ただし、「主げた、主構の鉛直度 $\delta$ 」の規格値のhに代入する数値はmm単位の数値とする。				

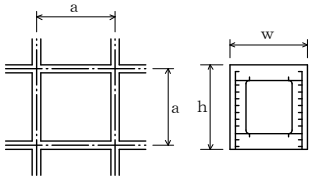
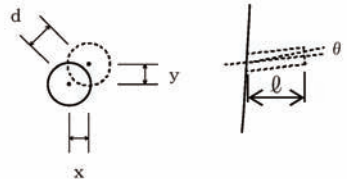
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	13 橋梁 架設工			架設工（コンクリート橋）  （クレーン架設） （架設桁架設）  架設工支保工 （固定） （移動）  架設桁架設 （片持架設） （押し架設）	全 長・支 間		—	各桁毎に全数測定。		
						桁の中心間距離		—	一連毎の両端及び支間中央について各上下間を測定。		
						そ り		—	主桁を全数測定。		
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	14 法面工 共通	2	1	植生工  （種子散布工） （張芝工） （筋芝工） （市松芝工） （植生シート工） （植生マット工） （植生筋工） （人工張芝工） （植生穴工）	切土法長 ℓ	ℓ < 5 m	-200	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
							ℓ ≥ 5 m	法長の－4％			
						盛土法長 ℓ	ℓ < 5 m	-100			
							ℓ ≥ 5 m	法長の－2％			
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		
3 土木工事 共通編	2 一般 施工	14 法面工 共通	2	2	植生工  （植生基材吹付工） （客土吹付工）	法長 ℓ	ℓ < 5 m	-200	施工延長40mにつき1箇所、40m以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
							ℓ ≥ 5 m	法長の－4％			
						厚さ t	t < 5 cm	-10	施工面積200㎡につき1箇所、面積200㎡以下のものは、1施工箇所につき2箇所。 検査孔により測定。		
							t ≥ 5 cm	-20			
							但し、吹付面に凹凸がある場合の最小吹付厚は、設計厚の50％以上とし、平均厚は設計厚以上。				
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		

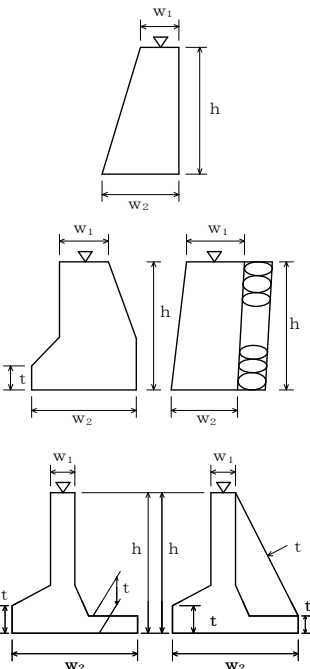
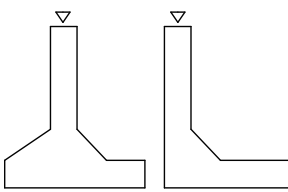


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	14 法 面 工 共 通	3		吹付工（仮設を含む）  （コンクリート） （モルタル）	法 長 ℓ	ℓ < 3 m	-50	施工延長40mにつき1箇所、40m以下のものは1施工箇所につき2箇所。 測定断面に凹凸があり、曲線法長の測定が困難な場合は直線法長とする。	    	
							ℓ ≥ 3 m	-100			
						厚 さ t	t < 5 cm	-10	200㎡につき1箇所以上、200㎡以下は2箇所をせん孔により測定。		
							t ≥ 5 cm	-20			
							但し、吹付面に凹凸がある場合の最小吹付厚は、設計厚の50％以上とし、平均厚は設計厚以上				
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		

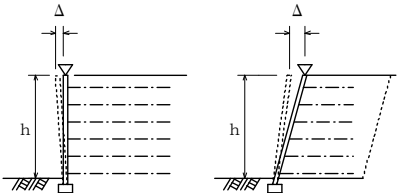
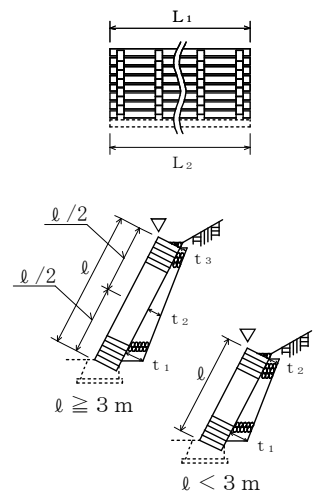
単位：mm

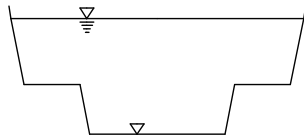
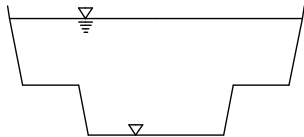
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	14 法 面 工 共 通	4	1	法 枠 工  (現場打法枠工) (現場吹付法枠工)	法 長 ℓ	ℓ < 10m	-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		曲線部は設計図書による
							ℓ ≥ 10m	-200			
						幅 w		-30	枠延長100mにつき1箇所、枠延長100m以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						高 さ h		-30			
						枠中心間隔 a		±100			
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	14 法 面 工 共 通	4	2	法 枠 工  (プレキャスト法枠工)	法 長 ℓ	ℓ < 10m	-100	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
							ℓ ≥ 10m	-200			
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	14 法 面 工 共 通	6		アンカー工	削孔深さ ℓ		設計値以上	全数（任意仮設は除く）	  $d = \sqrt{x^2 + y^2}$	
						配置誤差 d		100			
						せん孔方向 θ		±2.5度			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	15 擁 壁 工 共 通	1		(一般事項) 場所打擁壁工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚 さ t		-20			
						裏 込 厚 さ		-50			
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>		-30			
						高 さ h	h < 3 m	-50	1 施工箇所毎		
							h ≥ 3 m	-100			
						延 長 L		-200			
3 土 木 工 事 共 通 編	2 一 般 施 工	15 擁 壁 工 共 通	2		プレキャスト擁壁工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		

単位：mm

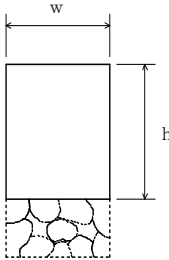
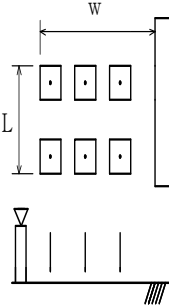
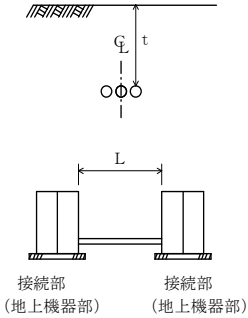
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事 共通編	2 共通的 工種	15 擁壁工 共通	3		補強土壁工  (補強土（テールアル メ）壁工法） (多数アンカー式補強 土工法） (ジオテキスタイルを 用いた補強土工法）	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は 50m）につき1箇所、延長40m（又は 50m）以下のものは1施工箇所につき 2箇所。		
						高さ h	h < 3 m	-50			
							h ≥ 3 m	-100			
						鉛 直 度 △		±0.03h かつ ±300以内			
						控 え 長 さ		設計値以上			
						延 長 L		-200	1 施工箇所毎		
3 土木工事 共通編	2 一般施 工	15 擁壁工 共通	4		井桁ブロック工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は 50m）につき1箇所、延長40m（又は 50m）以下のものは1施工箇所につき 2箇所。		
						法長 ℓ	ℓ < 3 m	-50			
							ℓ ≥ 3 m	-100			
						厚さ t <sub>1</sub> , t <sub>2</sub> , t <sub>3</sub>		-50	1 施工箇所毎		
						延 長 L <sub>1</sub> , L <sub>2</sub>		-200			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目			規 格 値		測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
3 土木工事共通編	2 一般施工	16 浚渫工 共通	3	1	浚渫船運転工  (ポンプ浚渫船)				上限	下限	延長方向は、設計図書により指定された測点毎。 横断方向は、5 m毎。 また、斜面は法尻、法肩とし必要に応じ中間点も加える。ただし、各測定値の平均値の設計基準高以下であること。			
						基準高▽	電気船	200ps	+200	-800				
								500ps	+200	-1000				
								1000ps	+200	-1200				
							ディーゼル船	250ps	+200	-800				
								420ps 600ps	+200	-1000				
								1350ps	+200	-1200				
						幅			-200					
						延 長			-200					
3 土木工事共通編	2 一般施工	16 浚渫工 共通	3	2	浚渫船運転工  (グラブ浚渫船)	基 準 高 ▽			上限 +200		延長方向は、設計図書により指定された測点毎。 横断方向は、5 m毎。 また、斜面は法尻、法肩とし必要に応じ中間点も加える。ただし、各測定値の平均値の設計基準高以下であること。			
						幅			-200					
						延 長			-200					

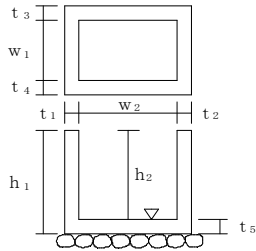
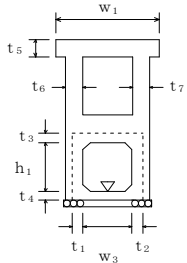
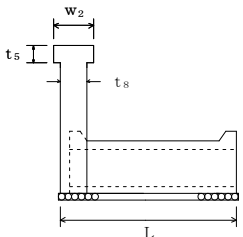
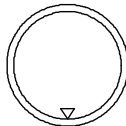
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
3 土木工事共通編	2 一般施工	18 床版工	2		床版工	基 準 高 ▽	±20	基準高は、1 径間当たり 2 箇所（支点付近）で、1 箇所当たり両端と中央部の 3 点、幅は 1 径間当たり 3 箇所、厚さは型枠設置時におおむね10㎢に 1 箇所測定。 （床版の厚さは、型枠検査をもって代える。）		注）新設のコンクリート構造物（橋梁上・下部工および重要構造物である内空断面積25㎢以上のボックスカルバート（工場製作のプレキャスト製品は全ての工種において対象外））の鉄筋の配筋状況及びかぶりについては、「非破壊試験によるコンクリート構造物中の配筋状態及びかぶり測定要領（案）」も併せて適用する
						幅 w	0～+30			
						厚 さ t	－10～+20			
						鉄筋のかぶり	設計値以上	1 径間当たり 3 断面（両端及び中央）測定。1 断面の測定箇所は断面変化毎 1 箇所とする。		
						鉄筋の有効高さ	±10			
						鉄 筋 間 隔	±20	1 径間当たり 3 箇所（両端及び中央）測定。 1 箇所の測定は、橋軸方向の鉄筋は全数、橋軸直角方向の鉄筋は加工形状毎に 2 m の範囲を測定。		
							上記、鉄筋の有効高さがマイナスの場合			

単位：mm

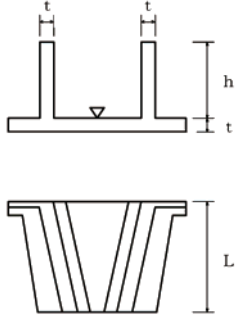
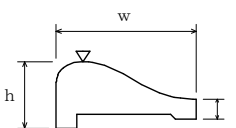
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	1 築堤護岸工	7 法覆護岸工	4		護岸付属物工	幅 w	-30			
						高 さ h	-30			
6 河川編	1 築堤・護岸	10 水制工	8		杭出し水制工	基 準 高 ▽	±50	1組毎		
						幅 w	±300			
						方 向	±7°			
						延 長 L	-200			
6 河川編	1 築堤・護岸	13 光ケーブル配管工	3		配管工	埋 設 深 t	0～+50	接続部（地上機器部）間毎に1箇所。		
						延 長 L	-200	接続部（地上機器部）間毎で全数。 【管路センターで測定】		

単位：mm

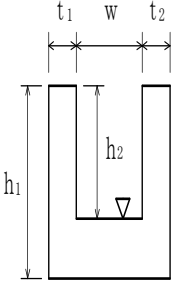
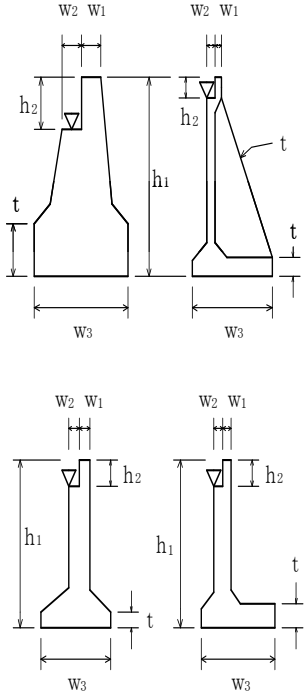
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	1 築堤・護岸	13 光ケ ーブル 配管工	4		ハンドホール工	基 準 高 ▽	±30	1 箇所毎 ※は現場打部分のある場合		
						※厚さ t <sub>1</sub> ～t <sub>5</sub>	-20			
						※幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30			
						※高さ h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub>	-30			
6 河川編	3 樋門・樋管	5 樋門・樋管 本体工	6	1	函渠工 (本体工)	基 準 高 ▽	±30	柔構造樋門の場合は埋戻前（載荷前）に測定する。	 	
						厚さ t <sub>1</sub> ～t <sub>8</sub>	-20	函渠寸法は、両端、施工継手箇所及び図面の寸法表示箇所 で測定。 門柱、操作台等は、図面の寸法表示箇所 で測定。 プレキャスト製品使用の場合は、製品寸法を規格証明書で確認するもの とし、『基準高』と『延長』を測定。		
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30			
						内空幅 w <sub>3</sub>	-30			
						内空高 h <sub>1</sub>	±30			
						延 長 L	-200			
6 河川編	3 樋門・樋管	5 樋門・樋管 本体工	6	2	函渠工 (ヒューム管) (PC管) (コルゲートパイプ) (ダクタイル鋳鉄管)	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L	-200	1 施工箇所毎		

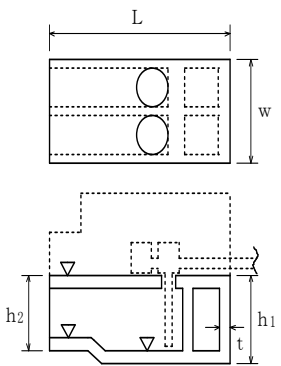
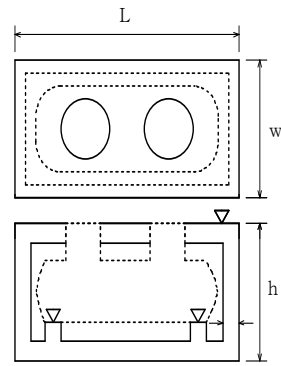
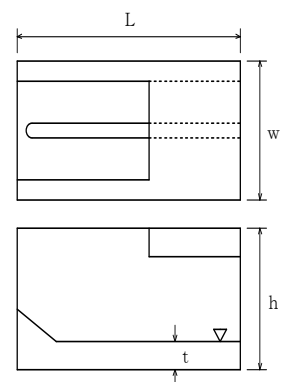
出来形管理基準及び規格値



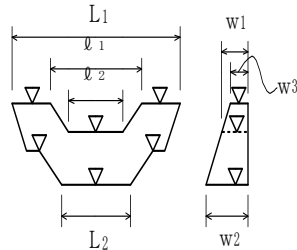
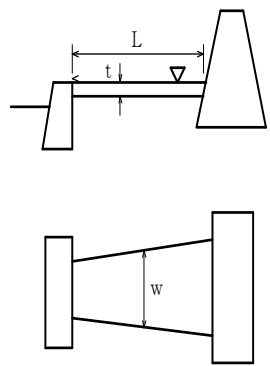
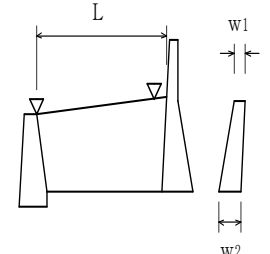
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	3 樋門・樋管	5 樋門・樋管 本体工	7 8		翼壁工 水叩工	基 準 高 ▽	±30	図面の寸法表示箇所にて測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						延 長 L	-50			
6 河川編	4 水門	6 水門 本体工	7 8 9 10 11		床版工 堰柱工 門柱工 ゲート操作台工 胸壁工	基 準 高 ▽	±30	図面の寸法表示箇所にて測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						延 長 L	-50			
6 河川編	5 堰	6 可動堰 本体工	13 14		閘門工 土砂吐工	基 準 高 ▽	±30	図面の寸法表示箇所にて測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						延 長 L	-50			
6 河川編	5 堰	7 固定堰 本体工	8 9 10		堰本体工 水叩工 土砂吐工	基 準 高 ▽	±30	基準高、幅、高さ、厚さは両端、施工継手箇所及び構造図の寸法表示箇所にて測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						堰長 L	L < 20m	-50		
							L ≥ 20m	-100		

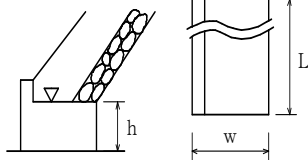
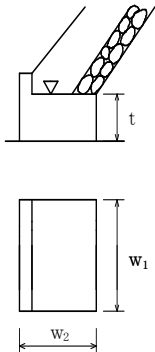
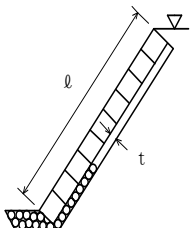
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	5 堰	8 魚道工	3		魚道本体工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚 さ $t_1, t_2$	-20			
						幅 $w$	-30			
						高 さ $h_1, h_2$	-30			
						延 長 $L$	-200			
6 河川編	5 堰	9 管理橋下部工	2		管理橋橋台工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は図面の寸法表示箇所で測定。		
						厚 さ $t$	-20			
						天 端 幅 $w_1$ (橋軸方向)	-10			
						天 端 幅 $w_2$ (橋軸方向)	-10			
						敷 幅 $w_3$ (橋軸方向)	-50			
						高 さ $h_1$	-50			
						胸壁の高さ $h_2$	-30			
						天 端 長 $\ell_1$	-50			
						敷 長 $\ell_2$	-50			
						胸壁間距離 $\ell$	$\pm 30$			
						支 点 長 及 び 中心線の変 化	$\pm 50$			

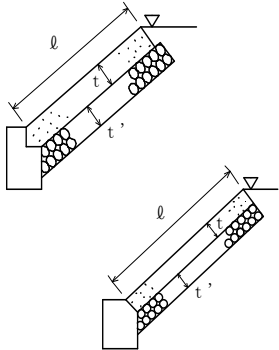
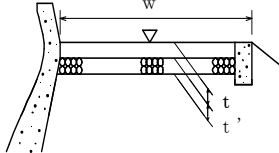
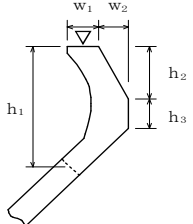
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	6 排水機場	4 機場本体工	6		本体工	基 準 高 ▽	±30	図面の表示箇所で測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高さ h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub>	±30			
						延 長 L	-50			
6 河川編	6 排水機場	4 機場本体工	7		燃料貯油槽工	基 準 高 ▽	±30	図面の表示箇所で測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						延 長 L	-50			
6 河川編	6 排水機場	5 沈砂池工	7		コンクリート床版工	基 準 高 ▽	±30	図面の表示箇所で測定。		
						厚 さ t	-20			
						幅 w	-30			
						高 さ h	±30			
						延 長 L	-50			

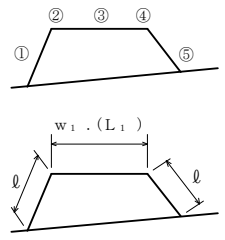
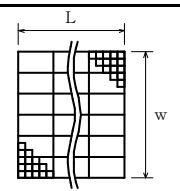
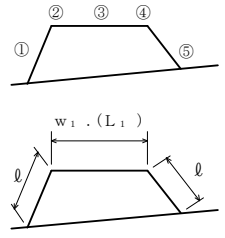
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
6 河川編	7 床止め・床固め	4 床止め工	6		本体工 (床固め本体工)	基 準 高 $\nabla$	±30	図面に表示してある箇所にて測定。		
						天 端 幅 $w_1, w_3$	-30			
						堤 幅 $w_2$	-30			
						堤 長 $L_1, L_2$	-100			
						水通し幅 $l_1, l_2$	±50			
6 河川編	7 床止め・床固め	4 床止め工	8		水叩工	基 準 高 $\nabla$	±30	基準高、幅、延長は図面に表示してある箇所にて測定。 厚さは目地及びその中間点で測定。		
						厚 さ $t$	-30			
						幅 $w$	-100			
						延 長 $L$	-100			
6 河川編	7 床止め・床固め	5 床固め工	6		側壁工	基 準 高 $\nabla$	±30	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所の標準は、天端幅・天端高で各測点及びジョイント毎に測定。 3. 長さは、天端中心線の水平延長、又は、測点に直角な水平延長を測定。		
						天 端 幅 $w_1$	-30			
						堤 幅 $w_2$	-30			
						長 さ $L$	-100			

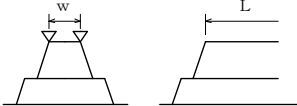
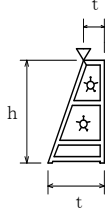
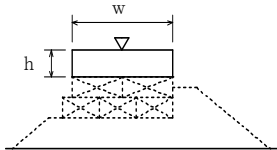
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	5 護岸基礎工	5		場所打コンクリート工	基 準 高 ▽		±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w		-30			
						高 さ h		-30			
						延 長 L		-200			
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	5 護岸基礎工	6		海岸コンクリートブロック工	基 準 高 ▽		±50	ブロック個数40個につき1箇所の割で測定。基準高、延長は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						ブロック厚 t		-20			
						ブロック縦幅 w <sub>1</sub>		-20			
						ブロック横幅 w <sub>2</sub>		-20			
						延 長 L		-200			
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	6 護岸工	4		海岸コンクリートブロック工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						法長 ℓ	ℓ < 5 m	-100			
							ℓ ≥ 5 m	ℓ × (－2%)			
						厚 さ t		-50			
						延 長 L		-200			

単位：mm

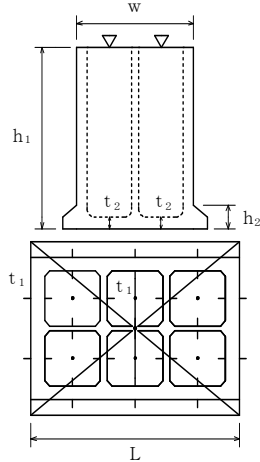
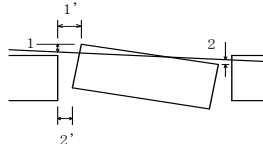
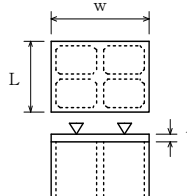
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	6 護岸工	5		コンクリート被覆工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 50$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						法長 $\ell$	$\ell < 3 \text{ m}$			
							$\ell \geq 3 \text{ m}$			
						厚さ t	t < 100			
							t $\geq$ 100			
						裏 込 材 厚 t'	-50			
						延 長 L	-200			
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	8 天端被覆工	2		コンクリート被覆工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 50$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w	-50			
						厚 さ t	-10			
						基 礎 厚 t'	-45			
						延 長 L	-200			
7 河川 海岸 編	1 堤防・護岸	9 波返工	3		波返工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 50$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30			
						高さ h < 3 m h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub> , h <sub>3</sub>	-50			
						高さ h $\geq$ 3 m h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub> , h <sub>3</sub>	-100			
						延 長 L	-200			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	4 突堤基礎工	4		捨石工	基準 高 ▽	本 均 し		±50	施工延長10mにつき、1 測点当たり 5 点以上測定。		
							表 面 均 し		±100			
							荒均し	異形ブロック据付面（乱積）の高さ	±500			
								異形ブロック据付面（乱積）以外の高さ	±300			
							被覆均し	異形ブロック据付面（乱積）の高さ	±500			
								異形ブロック据付面（乱積）以外の高さ	±300			
						法 長 ℓ		-100	幅は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所、延長はセンターライン及び表裏法肩。			
						天 端 幅 w <sub>1</sub>		-100				
						天 端 延 長 L <sub>1</sub>		-200				
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	4 突堤基礎工	5		吸出し防止工	幅 w		-300	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所。			
						延 長 L		-500				
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	5 突堤本体工	2		捨石工	基準 高 ▽	異形ブロック据付面（乱積）の高さ		±500	施工延長10mにつき、1 測点当たり 5 点以上測定。		
							異形ブロック据付面（乱積）以外の高さ		±300			
						法 長 ℓ		-100	幅は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき 1 箇所、延長40m（又は50m）以下のものは 1 施工箇所につき 2 箇所、延長はセンターライン及び表裏法肩。			
						天 端 幅 w <sub>1</sub>		-100				
						天 端 延 長 L <sub>1</sub>		-200				

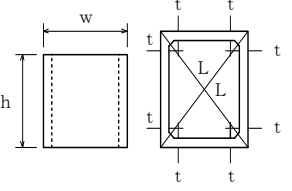
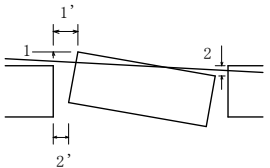
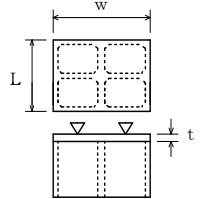
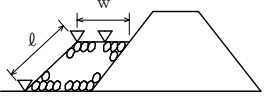
単位：mm

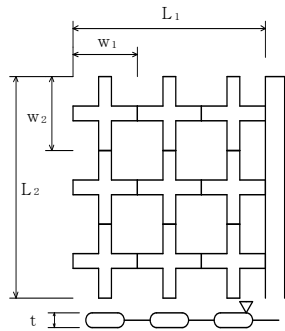
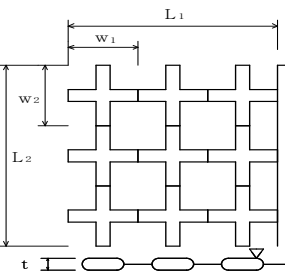
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本体工	5		海岸コンクリートブロック工	基準高▽	(層積)ブロック規格26 t 未満	±300	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。延長は、センターラインで行う。		
							(層積)ブロック規格26 t 以上	±500			
							(乱 積)	±ブロックの高さの1／2			
						天 端 幅 w		ーブロックの高さの1／2			
						天 端 延 長 L		ーブロックの高さの1／2			
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本体工	9		石砕工	基 準 高 ▽		±50	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						厚 さ t		－50			
						高さ h	h < 3 m	－50			
							h ≧ 3 m	－100			
						延 長 L		－200	1 施工箇所毎		
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本体工	10		場所打コンクリート工	基 準 高 ▽		±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						幅 w		－30			
						高 さ h		－30			
						延 長 L		－200			



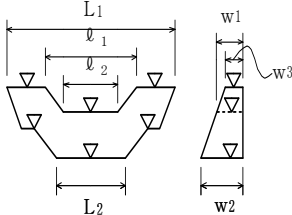
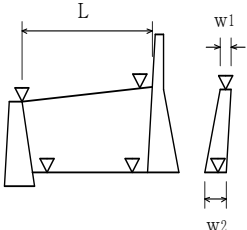
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本 体工	11	1	ケーソン工  (ケーソン工製作)	バ ラ ス ト の 基 準 高▽	砕 石 、 砂	±100	各室中央部 1 箇所		
							コンクリート	±50			
						壁 厚 t <sub>1</sub>		±10	底版完成時、各壁 1 箇所		
						幅 w		+30, -10	各層完成時に中央部及び底版と天端は 両端		
						高 さ h <sub>1</sub>		+30, -10	完成時、四隅		
						長 さ L		+30, -10	各層完成時に中央部及び底版と天端は 両端		
						底版厚さ t <sub>2</sub>		+30, -10	底版完成時、各室中央部 1 箇所		
						フーチング高さ h <sub>2</sub>		+30, -10	底版完成時、四隅		
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本 体工	11	2	ケーソン工  (ケーソン工据付)	法線に対する出入 1、2		ケーソン重量2000 t 未満 ±100	据付完了後、両端 2 箇所		
								ケーソン重量2000 t 以上 ±150			
						据付目地間隔 1'、2'		ケーソン重量2000 t 未満 100以下	据付完了後、天端 2 箇所		
								ケーソン重量2000 t 以上 200以下			
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工岬	5 突堤本 体工	11	3	ケーソン工  (突堤上部工) 場所打コンクリート 海岸コンクリートブ ロック	基 準 高▽	陸 上	±30	1 室につき 1 箇所 (中心)		
							水 中	±50			
						厚 さ t		±30			
						幅 w		±30			
						長 さ L		±30			

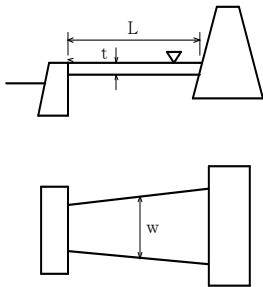
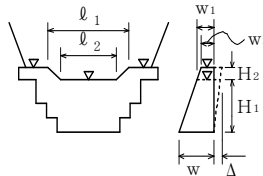
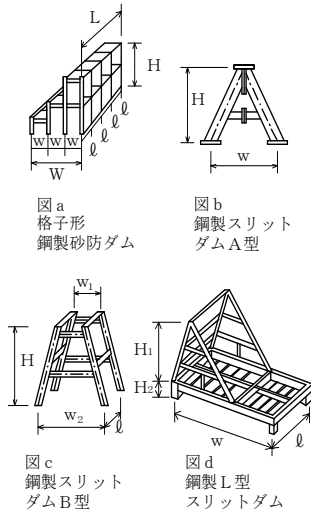
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	5 突堤本 体工	12	1	セルラー工 (セルラー工製作)	壁 厚 t		±10	型枠取外し後全数		
						幅 w		+20, -10			
						高 さ h		+20, -10			
						長 さ L		+20, -10			
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	5 突堤本 体工	12	2	セルラー工 (セルラー工据付)	法線に対する 出入 1、2		±50	据付後ブロック1個に2箇所（各段毎）		
						隣接ブロックと の間隔 1'、2'		50以下			
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	5 突堤本 体工	12	3	セルラー工 (突堤上部工) 場所打コンクリート 海岸コンクリートブ ロック	基準 高▽	陸 上	±30	1室につき1箇所（中心）		
							水 中	±50			
						厚 さ t		±30			
						幅 w		±30			
						長 さ L		±30			
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	6 根固め工	2		捨石工	基準 高▽	異形ブロック据付面 (乱積)の高さ	±500	施工延長10mにつき、1測点当たり5点以上測定。		
							異形ブロック据付面 (乱積)以外の高 さ	±300			
						法 長 l		-100			
						天 端 幅 w		-100			
						天 端 延 長 L		-200			

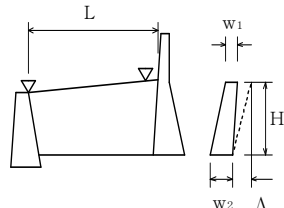
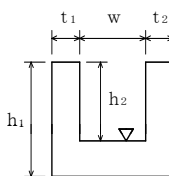
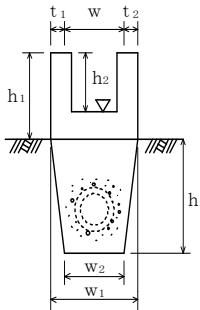
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	6 根固め工	3		根固めブロック工	基準 高▽	層 積	±300	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。			
							乱 積	± t / 2				
						厚 さ t		-20	幅、厚さは40個につき1箇所測定。			
						幅 w1 w2	層 積	-20				
							乱 積	- t / 2				
						延長 L1 L2	層 積	-200	1 施工箇所毎			
							乱 積	- t / 2				
7 河川 海岸 編	2 突堤・人工 岬	7 消波工	3		消波ブロック工	基準 高▽	層 積	±300	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所。延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。			
							乱 積	± t / 2				
						厚 さ t		-20	幅、厚さは40個につき1箇所測定。			
						幅 w1, w2		-20				
						延長 L1, L2		-200				
						7 河川 海岸 編	3 海域堤防（人工 リーフ、離岸堤、 潜堤）	3 海域堤基礎工	3			
荒均し	異形ブロック付面(乱積)の高さ	±500										
	異形ブロック付面(乱積)以外の高さ	±300										
被覆均し	異形ブロック付面(乱積)の高さ	±500										
	異形ブロック付面(乱積)以外の高さ	±300										
法 長 ℓ		-100	幅は施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所、延長はセンターライン及び表裏法肩。									
天 端 幅 w1		-100										
天 端 延 長 L1		-200										

単位：mm

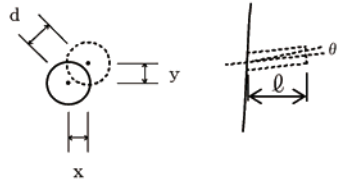
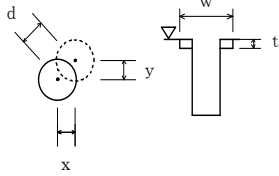
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
8 砂防編	1 砂防えん堤	3 工場製作工	4		鋼製えん堤仮設材製作工	部材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \cdots \ell \leq 10$ $\pm 4 \cdots \ell > 10$	図面の寸法表示箇所にて測定。		
8 砂防編	1 砂防えん堤	8 コンクリートえん堤工	4		コンクリートえん堤本体工	基 準 高 $\nabla$		$\pm 30$	図面の表示箇所にて測定。		
						天端部 堤 幅 $w_1, w_3$ $w_2$		-30			
						水通しの幅 $\ell_1, \ell_2$		$\pm 50$			
						堤 長 $L_1, L_2$		-100			
8 砂防編	1 砂防えん堤	8 コンクリートえん堤工	6		コンクリート側壁工	基 準 高 $\nabla$		$\pm 30$	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所の標準は、天端幅・天端高で各測点及びジョイント毎に測定。 3. 長さは、天端中心線の水平延長、又は、測点に直角な水平延長を測定。		
						幅 $w_1, w_2$		-30			
						長 さ $L$		-100			

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
8 砂防編	1 砂防えん堤	8 コンクリートえん堤工	8		水叩工	基 準 高 ▽		±30	基準高、幅、延長は図面に表示してある箇所で測定。 厚さは目地及びその中間点で測定。			
						幅 w		-100				
						厚 さ t		-30				
						延 長 L		-100				
8 砂防編	1 砂防えん堤	9 鋼製えん堤工	5	1	鋼製えん堤本体工 (不透過型)	水通し部	堤 高 ▽	±50	1. 図面の表示箇所で測定する。 2. ダブルウォール構造の場合は、堤高、幅、袖高は+の規格値は適用しない。			
							長 さ ℓ1, ℓ2					±100
							幅 w1, w3					±50
							下流側倒れ △					±0.02H1
						袖部	袖 高 ▽	±50				
							幅 w2	±50				
							下流側倒れ △	±0.02H2				
8 砂防編	1 砂防えん堤	9 鋼製えん堤工	5	2	鋼製えん堤本体工 (透過型)	堤長 L 格		±50	(備考) 格：格子型鋼製砂防ダム A：鋼製スリットダム A型 B：鋼製スリットダム B型 L：鋼製スリットダム L型			
						堤長 ℓ 格・B・L		±10				
						堤幅 W 格		±30				
						堤幅 w 格・B・L		±10				
						堤幅 w A		±5				
						高さ H 格・B・L		±10				
						高さ H A		±5				

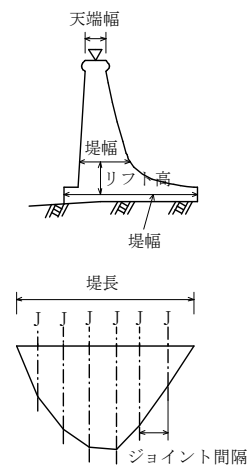
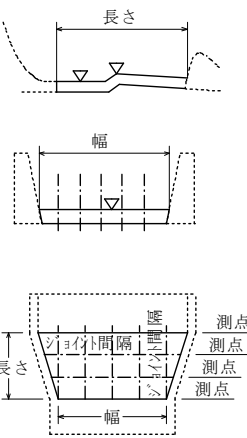
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
8 砂防編	1 砂防えん堤	9 鉄製えん堤工	6		鋼製側壁工	堤 高 ▽	±50	1. 図面に表示してある箇所にて測定。 2. ダブルウォール構造の場合は、堤高、幅、袖高は+の規格値は適用しない。			
						長 さ L	±100				
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	±50				
						下流側倒れ △	±0.02H				
						高さ h	h < 3 m				-50
							h ≥ 3 m				-100
8 砂防編	2 流路	5 床固め工	8		魚道工	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。			
						幅 w	-30				
						高 さ h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub>	-30				
						厚 さ t <sub>1</sub> , t <sub>2</sub>	-20				
						延 長 L	-200				
8 砂防編	3 斜面対策	6 山腹水路工	4		山腹明暗渠工	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。			
						厚さ t <sub>1</sub> , t <sub>2</sub>	-20				
						幅 w	-30				
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-50				
						高さ h <sub>1</sub> , h <sub>2</sub>	-30				
						深 さ h <sub>3</sub>	-30				
						延 長 L	-200				

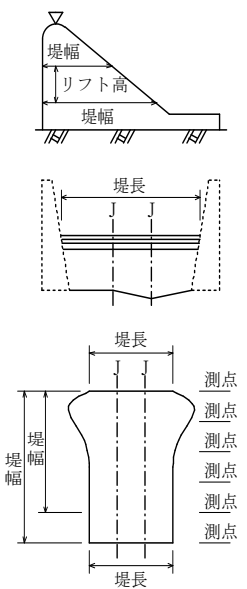
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
8 砂 防 編	3 斜 面 対 策	7 地 下 水 排 除 工	4		集排水ボーリング工	削孔深さ $\varnothing$	設計値以上	全数	 $d = \sqrt{x^2 + y^2}$	
						配 置 誤 差 d	100			
						せん孔方向 $\theta$	±2.5度			
8 砂 防 編	3 斜 面 対 策	7 地 下 水 排 除 工	5		集水井工	基 準 高 $\nabla$	±50	全数測定。 偏心量は、杭頭と底面の差を測定。	 $d = \sqrt{x^2 + y^2}$	
						偏 心 量 d	150			
						長 さ L	-100			
						巻 立 て 幅 w	-50			
						巻立て厚さ t	-30			
8 砂 防 編	3 斜 面 対 策	9 抑 止 杭 工	6		合成杭工	基 準 高 $\nabla$	±50	全数測定。		
						偏 心 量 d	D/4以内かつ 100以内			

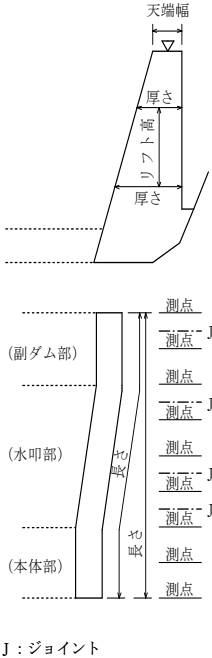
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
9 ダム 編	1 コン クリ ート ダム	4 ダム コン クリ ート 工			コンクリートダム工 (本体)	天 端 高 ▽	±20	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所は、下記を標準とする。 ①天端高（越流部堤頂高を含む）は、各ジョイントについて測定。 ②堤幅、リフト高は、各ジョイントについて5リフトごとに測定。 （注）堤幅、リフト高の測定は、上下流面型枠と水平打継目の接触部とする。（堤幅は、中心線又は、基準線との関係づけも含む） ③ジョイント間隔（横継目）は、5リフトごと上流端、下流端を対象に測定。 ④堤長は、天端中心線延長を測定。 3. ①越流堤頂部、天端仕上げなどの平坦性の測定方法は、監督職員の指示による。 ②監査廊の敷高、幅、高さ、平坦性などの測定方法は監督職員の指示による。	 <p>J：ジョイント</p>	
						天 端 幅	±20			
						ジョイント間隔	±30			
						リ フ ト 高	±50			
						堤 幅	-30, +50			
						堤 長	-100			
9 ダム 編	1 コン クリ ート ダム	4 ダム コン クリ ート 工			コンクリートダム工 (水叩)	天 端 高 ▽	±20	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所は、下記を標準とする。 ①天端高（敷高）、ジョイント間は各ジョイント、各測点の交点部を測定。 ②長さは、各ジョイントごとに測定。 ③幅は、各測点ごとに測定。 3. 水叩の平坦性の測定は監督職員の指示による。		
						ジョイント間隔	±30			
						幅	±40			
						長 さ	-100, +60			

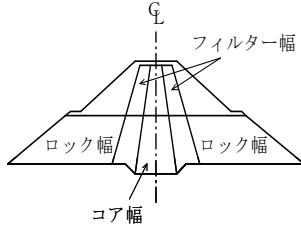


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
9 ダム 編	1 コン クリ ート ダム	4 ダム コン クリ ート 工			コンクリートダム工 (副ダム)	天 端 高 ▽	±20	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所は、下記を標準とする。 ①天端高は、各ジョイントごとに測定。 ②堤幅、リフト高は、各ジョイントについて3リフトごとに測定。 (注) 堤幅、リフト高の測定は、上下流面型枠と水平打継目の接触部とする。(堤幅は、中心線又は、基準線との関係づけも含む) ③ジョイント間隔は、3リフトごと上流端、下流端を対象に測定。 ④堤長は、各測点ごとに測定。	 <p>J : ジョイント</p>	
						ジョイント間隔	±30			
						リ フ ト 高	±50			
						堤 幅	-30, +50			
						堤 長	±40			

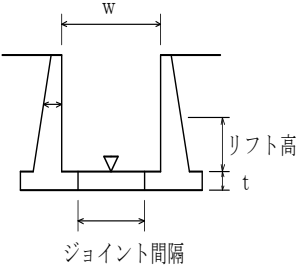

単位：mm

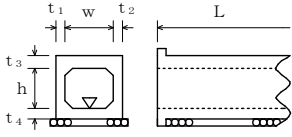
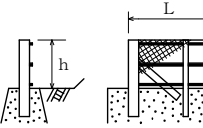
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
9 ダム 編	1 コン クリ ート ダム	4 ダム コン クリ ート 工			コンクリートダム工 (導流壁)	天 端 高 ▽	±30	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 上記以外の測定箇所は、下記を標準とする。 ①天端高、天端幅は、各測点、又はジョイントごとに測定。 ②リフト高、厚さは、各測点、又はジョイントについて3リフトごとに測定。 (注) リフト高、厚さの測定は、前面、背面型枠設置後からとする。 なお、リフト高、厚さの測定箇所は、前面背面型枠と水平打継目の接触部とする。 ③長さは、天端中心線の水平延長又は、測点に直角な水平延長を測定。		
						ジョイント間隔	±20			
						リ フ ト 高	±50			
						長 さ	±100			
						厚 さ	±20			

単位：mm

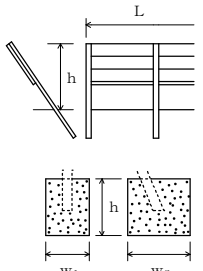
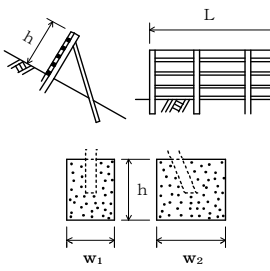
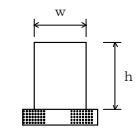
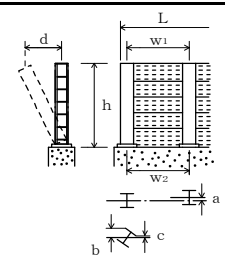
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
9 ダム 編	2 フィル ダム	3 盛立 工	5		コアの盛立	基 準 高 ▽	設計値以上	各測点について5層毎に測定。 ※外側境界線は標準機種（タンピングローラ）の場合		
						外 側 境 界 線	－ 0， +500			
9 ダム 編	2 フィル ダム	3 盛立 工	6		フィルターの盛立	基 準 高 ▽	－ 0	各測点について5層毎に測定。		
						外 側 境 界 線	－ 0， +1000			
						盛 立 幅	－ 0， +1000			
9 ダム 編	2 フィル ダム	3 盛立 工	7		ロックの盛立	基 準 高 ▽	－100	各測点について盛立 5 m毎に測定。		
						外 側 境 界 線	－ 0， +2000			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
9 ダム 編	2 フィル ダム				フィルダム (洪水吐)	基 準 高 ▽	±20	1. 図面の寸法表示箇所にて測定。 2. 1回／1施工箇所		
						ジョイント間隔	±30			
						厚 さ t	±20			
						幅 w	±40			
						リ フ ト 高 さ	±20			
						長 さ L	±100			
9 ダム 編	3 基礎 グラウ チング	3 ボー リング 工			ボーリング工	深 度 L	設計値以上	ボーリング工毎 ※配置位置の規定はコンクリート面で行うカーデングラウトに適用する。		
						配 置 誤 差	100			

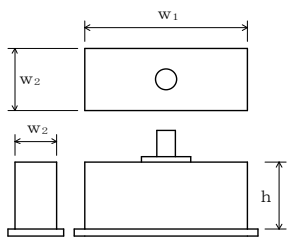
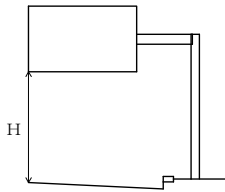
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	1 道路改良	3 工場製作工	2		遮音壁支柱製作工	部材	部材長 $\ell$ (m)	$\pm 3 \cdots \leq 10$ $\pm 4 \cdots > 10$	図面の寸法表示箇所にて測定。		
10 道路編	1 道路改良	9 カルバート工	6		場所打函渠工	基 準 高 $\nabla$		$\pm 30$	両端、施工継手及び図面の寸法表示箇所にて測定。		
						厚 さ $t_1 \sim t_4$		-20			
						幅 (内法) $w$		-30			
						高 さ $h$		$\pm 30$			
						延長 $L$	$L < 20\text{m}$	-50			
							$L \geq 20\text{m}$	-100			
10 道路編	1 道路改良	11 落石雪害防止工	4		落石防止網工	幅 $w$		-200	1 施工箇所毎		
						延 長 $L$		-200			
10 道路編	1 道路改良	11 落石雪害防止工	5		落石防護柵工	高 さ $h$		$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 $L$		-200	1 施工箇所毎		

単位：mm

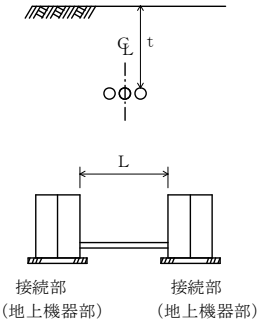
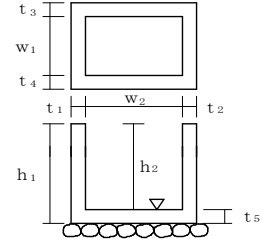
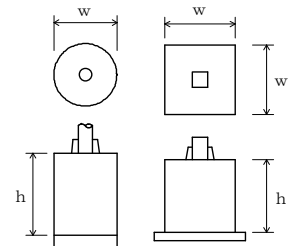
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	1 道路改良	11 落石 雪害 防止工	6		防雪柵工	高 さ h	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		
						基礎	幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30		
							高 さ h	-30		
10 道路編	1 道路改良	11 落石 雪害 防止工	7		雪崩予防柵工	高 さ h	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所		
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		
						基礎	幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30		
							高 さ h	-30		
						アンカー 長 ℓ	打 込 み ℓ	-10%		
							埋 込 み ℓ	-5%		
10 道路編	1 道路改良	12 遮音壁工	4		遮音壁基礎工	幅 w	-30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、施工延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						高 さ h	-30			
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		
10 道路編	1 道路改良	12 遮音壁工	5		遮音壁本体工	支柱	間隔 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	±15		
							ず れ a	10		
							ねじれ b-c	5		
							倒 れ d	h×0.5%		
						高 さ h	+30, -20			
						延 長 L	-200	1施工箇所毎		

編	章	節	条	枝番	工 種	規 格 値			測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
						個々の測定値 (X)		10個の測定値 の平均(X <sub>10</sub> )				
						中規模 以上	小規模 以下	中規模以上				
10 道 路 編	2 舗 装	4 舗 装 工			歩道路盤工 取合舗装路盤工 路肩舗装路盤工	基準高▽		±50	—	基準高は片側延長40m毎に1箇所割で測定。 厚さは、片側延長200m毎に1箇所掘り起こして測定。 幅は、片側延長80m毎に1箇所測定。 ※両端部2点で測定する。	工事規模の考え方 中規模とは、1層あたりの施工面積が2000㎡以上とする。 小規模とは、表層及び基層の加熱アスファルト混合物の総使用量が500 t未満あるいは施工面積が2000㎡未満。 厚さは、個々の測定値が10個に9個以上の割合で規格値を満足しなければならないとともに、10個の測定値の平均値（X10）について満足しなければならない。ただし、厚さのデータ数が10個未満の場合は測定値の平均値は適用しない。 コア採取について 橋面舗装等でコア採取により床版等に損傷を与える恐れのある場合は、他の方法によることが出来る。	
						厚さ	t < 15cm	-30	-10			
							t ≥ 15cm	-45	-15			
						幅		-100	—			
10 道 路 編	2 舗 装	4 舗 装 工			歩道舗装工 取合舗装工 路肩舗装工 表層工	厚 さ		-9	-3	幅は、片側延長80m毎に1箇所割で測定。厚さは、片側延長200m毎に1箇所コアを採取して測定。		
						幅		-25	—			

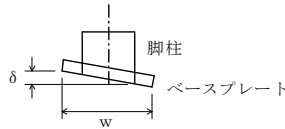
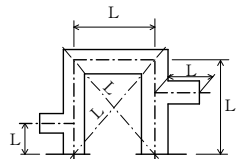
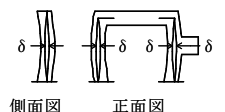
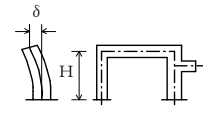
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	2 舗 装	5 排 水 構 造 物 工	9		排水性舗装用路肩排水工	基 準 高 $\nabla$	$\pm 30$	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。		
						延 長 L	-200	1箇所／1施工箇所		
10 道 路 編	2 舗 装	7 踏 掛 版 工	4		踏掛版工 (コンクリート工)	基 準 高	$\pm 20$	1箇所／1踏掛版		
						各 部 の 厚 さ	$\pm 20$	1箇所／1踏掛版		
						各 部 の 長 さ	$\pm 30$	1箇所／1踏掛版		
					(ラバーシュー)	各 部 の 長 さ	$\pm 20$	全数		
						厚 さ	—			
					(アンカーボルト)	中 心 の ず れ	$\pm 20$	全数		
						ア ン カ ー 長	$\pm 20$	全数		
10 道 路 編	2 舗 装	9 標 識 工	4	1	大型標識工 (標識基礎工)	幅 $w_1, w_2$	-30	基礎一基毎		
						高 さ h	-30			
10 道 路 編	2 舗 装	9 標 識 工	4	2	大型標識工 (標識柱工)	設置高さ H	設計値以上	1箇所／1基		

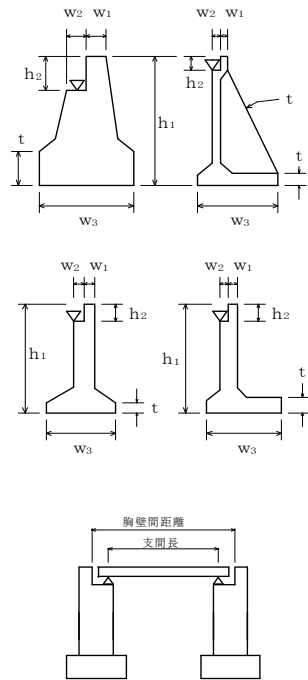


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	2 舗 装	12 道 路 付 属 施 設 工	5	1	ケーブル配管工	埋 設 深 $t$	0～+50	接続部間毎に1箇所		
						延 長 $L$	-200	接続部間毎で全数		
10 道 路 編	2 舗 装	12 道 路 付 属 施 設 工	5	2	ケーブル配管工 (ハンドホール)	基 準 高 $\nabla$	±30	1箇所毎 ※印は、現場打ちのある場合		
						※厚さ $t_1 \sim t_5$	-20			
						※幅 $w_1, w_2$	-30			
						※高さ $h_1, h_2$	-30			
10 道 路 編	2 舗 装	12 道 路 付 属 施 設 工	6		照明工 (照明柱基礎工)	幅 $w$	-30	1箇所／1施工箇所		
						高 さ $h$	-30			

単位：mm

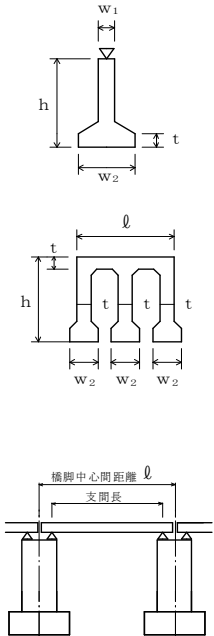
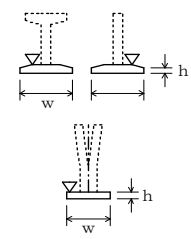
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	3 橋 梁 下 部	3 工 場 製 作 工	3		鋼製橋脚製作工	部 材	脚柱とベースプレート の鉛直度 $\delta$ (mm)	$w/500$	各脚柱、ベースプレートを測定。		
							ベース プレート	孔の位置	$\pm 2$	全数を測定。	
								孔の径 d	0 ~ 5	全数を測定。	
						仮 組 立 時	柱の中心間隔、 対角長 L (m)	$\pm 5 \cdots L \leq 10\text{m}$ $\pm 10 \cdots 10 < L \leq 20\text{m}$ $\pm (10 + (L - 20)/10) \cdots 20\text{m} < L$	両端部及び片持ばり部を測定。		
							はりのキャンバー 及び柱の曲がり $\delta$ (mm)	$L/1,000$	各主構の各格点を測定。	 側面図 正面図	
							柱 の 鉛 直 度 $\delta$ (mm)	$10 \cdots H \leq 10$ $H \cdots H > 10$	各柱及び片持ばり部を測定。 H : 高さ (m)	 側面図 正面図	

単位：mm

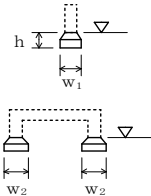
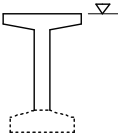
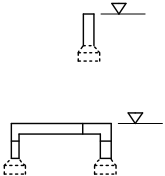
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
10 道 路 編	3 橋 梁 下 部	6 橋 台 工	8		橋台躯体工	基 準 高 ▽	±20	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。 箱抜き形状の詳細については「道路橋 支承便覧」による。			
						厚 さ t	-20				
						天 端 幅 w <sub>1</sub> (橋軸方向)	-10				
						天 端 幅 w <sub>2</sub> (橋軸方向)	-10				
						敷 幅 w <sub>3</sub> (橋軸方向)	-50				
						高 さ h <sub>1</sub>	-50				
						胸壁の高さ h <sub>2</sub>	-30				
						天 端 長 ℓ <sub>1</sub>	-50				
						敷 長 ℓ <sub>2</sub>	-50				
						胸壁間距離 ℓ	±30				
						支 間 長 及 び 中心線の変位	±50				
						支 承 部 アン カー ボルトの 箱抜き 規格値	計画高				+10～-20
							平面位置				±20
							アンカーボルト孔の 鉛直度				1/50以下

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	3 橋梁下部	7 RC橋脚工	9	1	橋脚躯体工 (張出式)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。 箱抜き形状の詳細については「道路橋 支承便覧」による。		
						厚 さ t	-20			
						天 端 幅 $w_1$ (橋軸方向)	-20			
						敷 幅 $w_2$ (橋軸方向)	-50			
						高 さ h	-50			
						天 端 長 $l_1$	-50			
						敷 長 $l_2$	-50			
						橋脚中心間距離 $l$	$\pm 30$			
						支 間 長 及 び 中心線の変位	$\pm 50$			
						支 承 部 ア ン カ ー ボ ル ト の 箱 抜 き 規 格 値	計画高	$+10 \sim -20$		
							平面位置	$\pm 20$		
							アンカーボルト孔の 鉛直度	1 / 50以下		

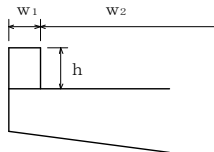
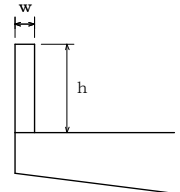
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	3 橋 梁 下 部	7 R C 橋 脚 工	9	2	橋脚躯体工 (ラーメン式)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。 箱抜き形状の詳細については「道路橋支保便覧」による。		
						厚 さ t	-20			
						天 端 幅 $w_1$	-20			
						敷 幅 $w_2$	-20			
						高 さ h	-50			
						長 さ $\ell$	-20			
						橋脚中心間距離 $\ell$	$\pm 30$			
						支 間 長 及 び 中心線の変位	$\pm 50$			
						支 承 部 アンカー ボルトの 箱抜き規格値	計画高	$+10 \sim -20$		
							平面位置	$\pm 20$		
							アンカーボルト孔の 鉛直度	1/50以下		
10 道 路 編	3 橋 梁 下 部	8 鋼 製 橋 脚 工	9	1	橋脚フーチング工 (I型・T型)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。		
						幅 (橋軸方向) w	-50			
						高 さ h	-50			
						長 さ $\ell$	-50			

単位：mm

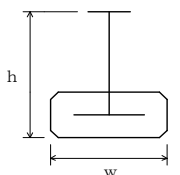
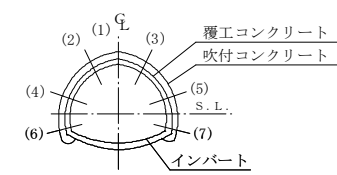
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	3 橋梁下部	8 鋼製橋脚工	9	2	橋脚フーチング工 (門型)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。		
						幅 $w_1, w_2$	-50			
						高 さ $h$	-50			
10 道路編	3 橋梁下部	8 鋼製橋脚工	10	1	橋脚架設工 (I型・T型)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。		
						橋脚中心間距離 $\ell$	$\pm 30$			
						支 間 長 及 び 中心線の変位	$\pm 50$			
10 道路編	3 橋梁下部	8 鋼製橋脚工	10	2	橋脚架設工 (門型)	基 準 高 $\nabla$	$\pm 20$	橋軸方向の断面寸法は中央及び両端部、その他は寸法表示箇所。		
						橋脚中心間距離 $\ell$	$\pm 30$			
						支 間 長 及 び 中心線の変位	$\pm 50$			
10 道路編	3 橋梁下部	8 鋼製橋脚工	11		現場継手工	現場継手部のすき間 $\delta 1, \delta 2$ (mm)	5 ※ $\pm 5$	主桁、主構の全継手数の1/2を測定。 ※は耐候性鋼材（裸使用）の場合		

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目		規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要	
10 道路 編	4 鋼 橋 上 部	3 工 場 製 作 工	9		橋梁用高欄製作工	部材	部材長 ℓ (m)	± 3 …… ℓ ≤ 10 ± 4 …… ℓ > 10	図面の寸法表示箇所にて測定。			
10 道 路 編	4 鋼 橋 上 部	5 鋼 橋 架 設 工	10	1	支承工  (鋼製支承)	据付け高さ 注1)		±5	支承全数を測定。 B：支承中心間隔 (m)  支承の平面寸法が300mm以下の場合は、水平面の高低差を1mm以下とする。なお、支承を勾配なりに据付ける場合を除く。 注1) 先固定の場合は、支承上面で測定する。 注2) 可動支承の遊間 (La, Lb) を計測し、支承据付時のオフセット量 δ を考慮して、移動可能性が道路橋支承便覧の規格値を満たすことを確認する。 注3) 可動支承の移動量検査は、架設完了後に実施する。 詳細は、道路橋支承便覧参照。			
						可動支承の移動 可能量 注2)		設計移動量 +10以上				
						支承中心間隔 (橋軸直角方向)		±5				4+0.5 × (B-2)
						水 下 平 沓 度 の	橋軸方向	1 / 100				
							橋軸直角方向					
						可動支承の橋軸 方向のずれ 同一支承線上の 相対誤差		5				
						可動支承の 移動量 注3)		温度変化に伴う移 動量計算値の1/2 以上				
10 道 路 編	4 鋼 橋 上 部	5 鋼 橋 架 設 工	10	2	支承工  (ゴム支承)	据付け高さ 注1)		±5	支承全数を測定。 上部構造部材下面とゴム支承面との接触面及びゴム支承と台座モルタルとの接触面に肌すきが無いことを確認。 支承の平面寸法が300mm以下の場合は、水平面の高低差を1mm以下とする。なお、支承を勾配なりに据付ける場合を除く。 注1) 先固定の場合は、支承上面で測定する。 注2) 可動支承の遊間 (La, Lb) を計測し、支承据付時のオフセット量 δ を考慮して、移動可能性が道路橋支承便覧の規格値を満たすことを確認する。 注3) 可動支承の移動量検査は、架設完了後に実施する。 詳細は、道路橋支承便覧参照。			
						可動支承の移動 可能量 注2)		設計移動量 +10以上				
						支承中心間隔 (橋軸直角方向)		±5				4+0.5 × (B-2)
						支 平 承 度 の 水	橋軸方向	1 / 300				
							橋軸直角方向					
						可動支承の橋軸 方向のずれ 同一支承線上の 相対誤差		5				
						可動支承の 移動量 注3)		温度変化に伴う移 動量計算値の1/2 以上				

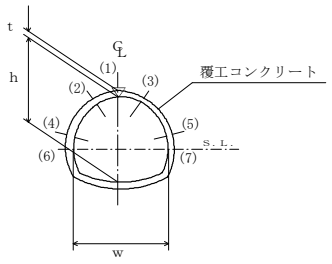
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	4 鋼橋上部	8 橋梁付属物工	3		落橋防止装置工	アンカーボルト孔の削孔長	設計値以上	全数測定		
						アンカーボルト定着長	−20以内 かつ −1D以内	全数測定 D：アンカーボルト径（mm）		
10 道路編	4 鋼橋上部	8 橋梁付属物工	5		地覆工	地覆の幅 $w_1$	−10～+20	1 径間当たり両端と中央部の3箇所測定。		
						地覆の高さ $h$	−10～+20			
						有効幅員 $w_2$	0～+30			
10 道路編	4 鋼橋上部	8 橋梁付属物工	6 7		橋梁用防護柵工 橋梁用高欄工	幅 $w$	−5～+10	1 径間当たり両端と中央部の3箇所測定。		
						高さ $h$	−20～+30			
10 道路編	4 鋼橋上部	8 橋梁付属物工	8		検査路工	幅	±3	1 ブロックを抽出して測定。		
						高さ	±4			

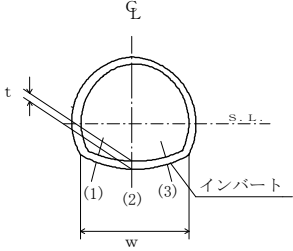
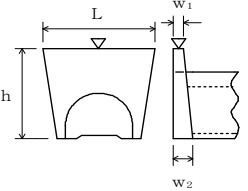


編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	5 コ ン ク リ ー ト 橋 上 部	6 プ レ ビ ー ム 桁 橋 工	2		プレビーム桁製作工 (現場)	幅 w	± 5	桁全数について測定。 横方向タワミの測定は、プレストレス シング後に測定。 桁断面寸法測定箇所は、両端部、中央 部の3箇所とする。 $\ell$ ：スパン長		
						高 さ h	10 -5			
						桁 長 $\ell$ スパン長	$\ell < 15 \cdots \pm 10$ $\ell \geq 15 \cdots$ $\pm (\ell - 5)$ かつ -30mm以内			
						横方向最大タワミ	0.8 $\ell$			
10 道 路 編	6 ト ン ネ ル (N A T M)	4 支 保 工	3		吹付工	吹 付 け 厚 さ	設計吹付け厚以 上。ただし、良好 な岩盤で施工端 部、突出部等の特 殊な箇所は設計吹 付け厚の1/3以 上を確保するもの とする。	施工延長40m毎に図に示す。 (1)～(7)及び断面変化点の検測孔を測 定。 注) 良好な岩盤とは、道路トンネル技 術基準（構造編）にいう地盤等級A又 はBに該当する地盤とする。		
10 道 路 編	6 ト ン ネ ル (N A T M)	4 支 保 工	4		ロックボルト工	位 置 間 隔	—	施工延長40m毎に断面全本数検測。		
						角 度	—			
						削 孔 深 さ	—			
						孔 径	—			
						突 出 量	プレート下面 から10cm以内			

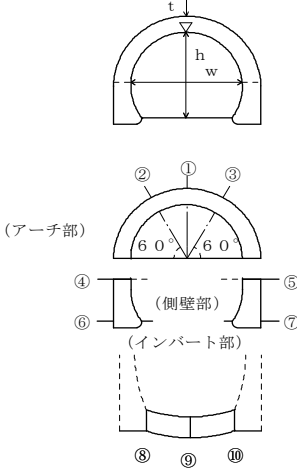
単位：mm

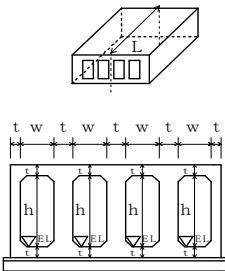
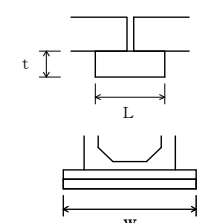
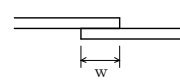
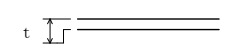
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	6 トンネル (N A T M)	5 覆工	3		覆工コンクリート工	基準高▽ (拱頂)	±50	<p>(1) 基準高、幅、高さは、施工40mにつき1箇所。            (2) 厚さ            (イ) コンクリート打設前の巻立空間を1打設長の終点を図に示す各点で測定。中間部はコンクリート打設口で測定。            (ロ) コンクリート打設後、覆工コンクリートについて1打設長の端面（施工継手の位置）において、図に示す各点の巻厚測定を行う。            (ハ) 検測孔による巻厚の測定は図の(1)は40mに1箇所、(2)～(3)は100mに1箇所の割合で行う。            なお、トンネル延長が100m以下のものについては、1トンネル当たり2箇所以上の検測孔による測定を行う。            ただし、以下の場合には、左記の規格値は適用除外とする。            ・良好な地山における岩又は吹付コンクリートの部分的な突出で、設計覆工厚の3分の1以下のもの。            なお、変形が収束しているものに限る。            ・異常土圧による覆工厚不足で、型枠の据付け時には安定が確認されかつ別途構造的に覆工の安全が確認されている場合。            ・鋼アーチ支保工、ロックボルトの突出。</p>		
						幅 w (全幅)	-50			
						高さ h (内法)	-50			
						厚 さ t	設計値以上			
						延 長 L	—			
10 道路編	6 トンネル (N A T M)	5 覆工	5		床版コンクリート工	幅 w	-50	<p>施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。</p>		
						厚 さ t	-30			

単位：mm

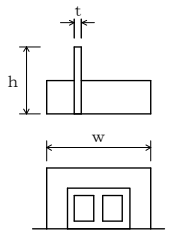
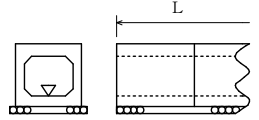
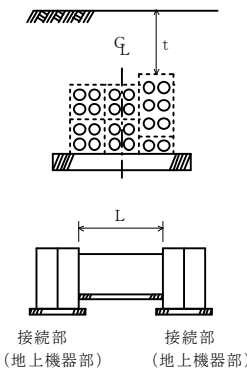
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	6 トンネル (N A T M)	6 イン バート工	4		インバート本体工	幅 w (全幅)	-50	(1) 幅は、施工40mにつき1箇所。 (2) 厚さ (イ) コンクリート打設前の巻立空間を1打設長の中間と終点を図に示す各点で測定。 (ロ) コンクリート打設後、インバートコンクリートについて1打設長の端面(施工継手の位置)において、図に示す各点の巻厚測定を行う。		
						厚 さ t	設計値以上			
						延 長 L	—			
10 道路編	6 トンネル (N A T M)	8 坑門工	4		坑門本体工	基 準 高 ▽	±50	図面の主要寸法表示箇所にて測定。		
						幅 w <sub>1</sub> , w <sub>2</sub>	-30			
						高さ h	h < 3 m			
							h ≥ 3 m			
						延 長 L	-200			

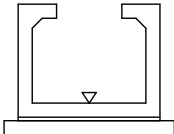
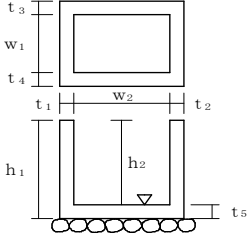
単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	6 トンネル (N A T M)	8 坑門工	5		明り巻工	基準高▽ (拱頂)	±50	基準高、幅、高さ、厚さは、施工延長40mにつき1箇所を測定。 なお、厚さについては図に示す各点①～⑩において、厚さの測定を行う。		
						幅 w (全幅)	-50			
						高さ h (内法)	-50			
						厚 さ t	-20			
						延 長 L	—			

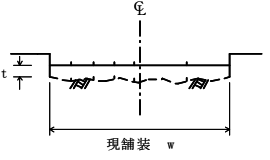
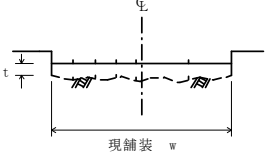
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	11 共 同 溝	6 現 場 打 構 築 工	2		現場打躯体工	基 準 高 ▽	±30	両端・施工継手箇所及び図面の寸法表示箇所で測定。		
						厚 さ t	-20			
						内 空 幅 w	-30			
						内 空 高 h	±30			
						ブロック長 L	-50			
10 道 路 編	11 共 同 溝	6 現 場 打 構 築 工	4		カラー継手工	厚 さ t	-20	図面の寸法表示箇所で測定。		
						幅 w	-20			
						長 さ L	-20			
10 道 路 編	11 共 同 溝	6 現 場 打 構 築 工	5	1	防水工 (防水)	幅 w	設計値以上	両端・施工継手箇所の底版・側壁・頂版で測定。		
10 道 路 編	11 共 同 溝	6 現 場 打 構 築 工	5	2	防水工 (防水保護工)	厚 さ t	設計値以上	両端・施工継手箇所の「四隅」で測定。		

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道路編	11 共同溝	6 現場打構築工	5	3	防水工 (防水壁)	高 さ h	-20	図面の寸法表示箇所にて測定。		
						幅 w	±50			
						厚 さ t	-20			
10 道路編	11 共同溝	7 プレキャスト構築工	2		プレキャスト躯体工	基 準 高 ▽	±30	施工延長40m（測点間隔25mの場合は50m）につき1箇所、延長40m（又は50m）以下のものは1施工箇所につき2箇所。ただし、基準高の適用は据付後の段階検査時のみ適用する。		
						延 長 L	-200	延長：1施工箇所毎		
10 道路編	12 電線共同溝	5 電線共同溝工	2		管路工（管路部）	埋 設 深 t	0～+50	接続部（地上機器部）間毎に1箇所。		
						延 長 L	-200	接続部（地上機器部）間毎で全数。 【管路センターで測定】		

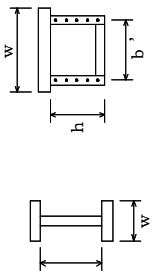
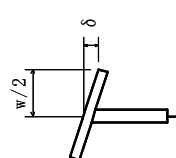
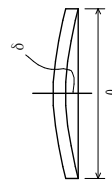
編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
10 道 路 編	12 電 線 共 同 溝	5 電 線 共 同 溝 工	3		プレキャストボックス工（特殊部）	基 準 高 ▽	±30	接続部（地上機器部）間毎に1箇所。		
10 道 路 編	12 電 線 共 同 溝	6 付 帯 設 備 工	2		ハンドホール工	基 準 高 ▽	±30	1箇所毎 ※は現場打部分のある場合		
						※厚 さ $t_1 \sim t_5$	-20			
						※幅 $w_1, w_2$	-30			
						※高 さ $h_1, h_2$	-30			

単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測定項目	規 格 値		測 定 基 準	測 定 箇 所	摘 要
							個々の測定値 (X)	平均の測定値 (X <sub>10</sub> )			
10 道路編	14 道路維持	4 舗装工	5		切削オーバーレイ工	厚さ t	-9		厚さは40m毎に現舗装高とオーバーレイ後の基準高の差で算出する。 測定点は車道中心線、車道端及びその中心とする。 幅は、延長80m毎に1箇所/施工箇所とする。 断面状況で、間隔、測点数を変えることが出来る。		維持工事においては、平坦性の項目を省略することが出来る。
						幅 w	-25				
						延長 L	-100				
						平 坦 性	—	3 m <sup>2</sup> プロファイルメーター (σ) 2.4mm以下 直読式(足付き) (σ) 1.75mm以下			
10 道路編	14 道路維持	4 舗装工	7		路上再生工	路盤工	厚さ t	-30	幅は延長80m毎に1箇所/割で測定。 厚さは、各車線200m毎に左右両端及び中央の3点を掘り起こして測定。		
							幅 w	-50			
							延長 L	-100			



単位：mm

編	章	節	条	枝番	工 種	測 定 項 目	規 格 値	測 定 基 準		測 定 箇 所	摘 要
								鋼げた等	トラス・アーチ等		
10	16	3	4		桁補強材製作工	フランジ幅 w (mm) 腹板高 h (mm) 腹板間隔 b' (mm)	±2... w ≤ 0.5 ±3... ±4... ± (3 + w/2) ... 2.0 < w	鋼げた・主構	トラス・アーチ等 各支点及び各支間 中央付近を測定。	 I 型鋼げた トラス弦材	
						フランジの直角度 δ (mm)	w / 200	主げた	各支点及び各支間 中央付近を測定。		
						圧縮材の曲がり δ (mm)	ℓ / 1000	—	主要部材全数を測定。 ℓ：部材長 (mm)		

## 品質管理基準及び規格値(案)

# 品質管理

## 1 目的

土木工事の施工に当たっては、設計図書や特記仕様書並びに土木工事共通仕様書、また各種指針・要綱に明示されている材料の形状寸法、品質、規格等を十分満足し、かつ経済的に作り出す為の管理を行う必要がある。本基準は、それらの目的に合致した品質管理の為の基本事項を示したものである。

## 2 品質管理基準及び規格値

### 目次

1 セメント・コンクリート (転圧コンクリート・コンクリートダム・覆工コンクリート・吹きつけコンクリートを除く)	P	1
2 ガス圧接	P	4
3 既製杭工	P	4
4 下層路盤	P	5
5 上層路盤	P	7
6 アスファルト安定処理路盤	P	10
7 セメント安定処理路盤	P	10
8 アスファルト舗装	P	11
9 転圧コンクリート	P	14
10 グースアスファルト舗装	P	16
11 路床安定処理工	P	19
12 表層安定処理工(表層混合処理)	P	20
13 固結工	P	20
14 アンカー工	P	20
15 補強土壁工	P	21
16 吹付工	P	21
17 現場吹付法砕工	P	23
18 河川・海岸土木	P	24
19 砂防土工	P	25
20 道路土工	P	25
21 捨石工	P	26
22 コンクリートダム	P	27
23 覆工コンクリート(NATM)	P	29
24 吹付けコンクリート(NATM)	P	31
25 ロックボルト(NATM)	P	33
26 路上再生路盤工	P	34
27 路上表層再生工	P	34
28 排水性舗装工・透水性舗装工	P	35
29 プラント再生舗装工	P	38
30 工場製作工(鋼橋用鋼材)	P	38
31 ガス切断工	P	38
32 溶接工	P	39

注) なお、各表の右欄の「試験成績表等による確認」に「○」がついているものは、試験成績書やミルシート等によって品質を確保できる項目であるが、必要に応じて現場検収を実施する。  
空欄の項目については、必ず現場検収を実施する。

# 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
1 セメント・コンクリート（転圧コンクリート・コンクリートダム・覆工コンクリート・吹付けコンクリートを除く）	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）」	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○
		その他	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	設計図書による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
		(JISマーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合は除く)	骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	絶対密度：2.5以上 細骨材の吸水率：3.5%以下 粗骨材の吸水率：3.0%以下 (砕砂・碎石、高炉スラグ骨材、フェロニッケルスラグ細骨材、銅スラグ細骨材の規格値については摘要を参照)	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。	JIS A 5005（コンクリート用碎石及び砕砂） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第1部：高炉スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第2部：フェロニッケルスラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第3部：銅スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第4部：電気炉酸化スラグ骨材） JIS A 5021（コンクリート用再生骨材B）	○
			粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121 JIS A 5005	40%以下、舗装コンクリートは35%以下 但し、積雪寒冷地の舗装コンクリートの場合は25%以下	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。		○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103 JIS A 5005	粗骨材：1.0%以下 細骨材：コンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合3.0%以下、その他の場合5.0%以下（砕砂およびスラグ細骨材を用いた場合はコンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合5.0%以下その他の場合7.0%以下）	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。 (山砂の場合は、工事中1回/週以上)		○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試験となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下	工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合	寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）			○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308付属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308付属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		その原水は、上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
	土木	その他（プラン	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 (高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内) 混和剤：±3%以内	設計図書による。	レディミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
1 セメント・コンクリート（転圧コンクリート・コンクリートダム・覆工コンクリート・吹付けコンクリートを除く）	製造（プラント）	その他	ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランプ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	○
				連続ミキサの場合： 土木学会標準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランプ差：3cm以下			○
			細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディーミストコンクリート以外の場合に適用する。	○
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		○
	施工	必須	塩化物総量規制	「コンクリートの耐久性向上」	原則0.3kg/m3以下	コンクリートの打設が午前と午後にあたがる場合は、午前に1回コンクリート打設前にい、その試験結果が塩化物総量の規制値の1/2以下の場合には、午後の試験を省略することができる。（1試験の測定回数は3回とする）試験の判定は3回の測定値の平均値。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。 ・骨材に海砂を使用する場合は、「海砂の塩化物イオン含有率試験方法」（JSCE-C502, 503）または設計図書の規定により行う。 ・用心鉄筋等を有さない無筋構造物の場合は省略できる。	
			単位水量測定	「レディミストコンクリートの品質確保について」	1) 測定した単位水量が、配合設計±15kg/m3の範囲にある場合はそのまま施工してよい。 2) 測定した単位水量が、配合設計±15kg/m3を超え±20kg/m3の範囲にある場合は、水量変動の原因を調査し、生コン製造者に改善を指示し、その運搬車の生コンは打設する。その後、配合設計±15kg/m3以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 3) 配合設計±20kg/m3の指示値を越える場合は、生コンを打込まずに、持ち帰らせ、水量変動の原因を調査し、生コン製造業者に改善を指示しなければならない。その後の全運搬車の測定を行い、配合設計±20kg/m3以内になることを確認する。更に、配合設計±15kg/m3以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 なお、管理値または指示値を超える場合は1回に限り試験を実施することができる。再試験を実施したい場合は2回の測定結果のうち、配合設計との差の絶対値の小さい方で評価してよい。	100m3/日以上の場合： 2回/日（午前1回、午後1回）、または重要構造物では重要度に応じて100～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められたときと測定回数は多い方を採用する。	示方配合の単位水量の上限値は、粗骨材の最大寸法が20mm～25mmの場合は175kg/m3、40mmの場合は165kg/m3を基本とする。	
			スランプ試験	JIS A 1101	スランプ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランプ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm （コンクリート舗装の場合） スランプ2.5cm：許容値±1.0cm （道路橋床版の場合） スランプ8cmを標準とする。	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20m3～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。ただし、道路橋鉄筋コンクリート床版にレディーミストコンクリートを用いる場合は原則として全車測定を行う。 ・道路橋床版の場合、全車試験を行うが、スランプ試験の結果が安定し良好な場合はその後スランプ試験の頻度について監督職員と協議し低減することができる。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
1 セメント・コンクリート（転圧コンクリート・コンクリート・コンクリートダム・覆工コンクリート・吹付けコンクリートを除く）	施工	必須	コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1108	1回の試験結果は指定した呼び強度の85%以上であること。 3回の試験結果の平均値は、指定した呼び強度以上であること。 (1回の試験結果は、3個の供試体の試験値の平均値)	・ 荷卸し時 1回／日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20から150m3ごとに1回 なお、テストピースは打設場所で採取し、1回につき6本（ $\sigma$ 7・・・3本、 $\sigma$ 28・・・3本）とする。 ・ 早強セメントを使用する場合には、必要に応じて1回につき3本（ $\sigma$ 3）を採取する。	・ 小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5%（許容差）	・ 荷卸し時 1回／日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20m3～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。		
		その他	コンクリートの曲げ強度試験	JIS A 1106	1回の試験結果は指定した呼び強度の85%以上であること。 3回の試験結果の平均値は、指定した呼び強度以上であること。	コンクリート舗装の場合に適用し、打設日1日につき2回（午前・午後）の割りで行う。なおテストピースは打設場所から採取し、1回につき原則として3個とする。	・ 小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。 コンクリート舗装の場合には、曲げ強度試験を適用する。	
			コアによる強度試験	JIS A 1107	設計図書による。	品質に異常が認められた場合に行う。		
			コンクリートの洗い分析試験	JIS A 1112				
		施工後試験	ひび割れ調査	スケールによる測定	0.2mm	本数 総延長 最大ひび割れ幅等	高さが、5m以上の鉄筋コンクリート擁壁、内空断面積が25m2以上の鉄筋コンクリートカルバート類、橋梁上・下部工及び高さが3m以上の堰・水門・樋門を対象（ただしいづれの工種についてもプレキャスト製品およびプレストレストコンクリートは対象としない）とし構造物躯体の地盤や他の構造物との接触面を除く全表面とする。 フーチング・底板等で竣工時に地中、水中にある部位については竣工前に調査する。	
			テストハンマーによる強度推定調査	JSCE-G 504	設計基準強度	鉄筋コンクリート擁壁及びカルバート類で行う。その他の構造物については強度が同じブロックを1構造物の単位とし、各単位につき3カ所の調査を実施。また、調査の結果、平均値が設計基準強度を下回った場合と、1回の試験結果が設計基準強度の85%以下となった場合は、その箇所の周辺において、再調査を5ヶ所実施。 材齢28日～91日の間に試験を行う。	高さが、5m以上の鉄筋コンクリート擁壁、内空断面積が25m2以上の鉄筋コンクリートカルバート類、橋梁上・下部工及び高さが3m以上の堰・水門・樋門を対象。（ただしいづれの工種についてもプレキャスト製品およびプレストレストコンクリートは対象としない。）また、再調査の平均強度が、所定の強度が得られない場合、もしくは1カ所の強度が設計強度の85%を下回った場合は、コアによる強度試験を行う。 工期等により、基準期間内に調査を行えない場合は監督職員と協議するものとする。	
			コアによる強度試験	JIS A 1107	設計基準強度	所定の強度を得られない箇所付近において、原位置のコアを採取。	コア採取位置、供試体の抜き取り寸法等の決定に際しては、設置された鉄筋を損傷させないよう十分な検討を行う。 圧縮強度試験の平均強度が所定の強度が得られない場合、もしくは1カ所の強度が設計強度の85%を下回った場合は、監督職員と協議するものとする。	
			配筋状態及びかぶり	「非破壊試験によるコンクリート構造物中の配筋状態及びかぶり測定要領（案）」による	同左	同左	同左	○
			強度測定					○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験 区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
2 ガス圧接	施工前試験	必須	外観検査	・目視 圧接面の研磨状況 たれ下がり 焼き割れ 折れ曲がり等 ・ノギス等による計測 (詳細外観検査) 軸心の偏心 ふくらみ ふくらみの長さ 圧接部のずれ等	熱間押抜法以外の場合 ①軸心の偏心が鉄筋径（径の異なる場合は細いほうの鉄筋）の1/5以下。 ②ふくらみは鉄筋径（径の異なる場合は細いほうの鉄筋）の1.4倍以上。ただし、SD490の場合は1.5倍以上。 ③ふくらみの長さが1.1D以上。ただし、SD490の場合は1.2倍以上。 ④ふくらみの頂点と圧接部のずれがD/4以下 ⑤著しいたれ下がり、折れ曲がりがない	鉄筋メーカー、圧接作業班、鉄筋径毎に自動ガス圧接の場合は各2本、手動ガス圧接の場合は各5本のモデル供試体を作成し実施する。	・モデル供試体の作成は、実際の作業と同一条件・同一材料で行う。 (1) SD490以外の鉄筋を圧接する場合 ・手動ガス圧接及び熱間押抜ガス圧接を行う場合、材料、施工条件などを特に確認する必要がある場合には、施工前試験を行う。 ・特に確認する必要がある場合とは、施工実績の少ない材料を使用する場合、過酷な気象条件・高所などの作業環境下での施工条件、圧接技量資格者の熟練度などの確認が必要な場合などである。 ・自動ガス圧接を行う場合には、装置が正常で、かつ装置の設定条件に誤りのないことを確認するため、施工前試験を行わなければならない。 (2) SD490の鉄筋を圧接する場合 SD490を圧接する場合、手動ガス圧接、自動ガス圧接、熱間押抜法のいずれにおいても、施工前試験を行わなければならない。	
				熱間押抜法の場合 ①ふくらみを押抜いた後の圧接面に対応する位置の割れ、へこみがない ②ふくらみの長さが1.1D以上。ただし、SD490の場合は1.2D以上 ③鉄筋表面にオーバーヒートによる表面不整があってはならない。 ④その他有害と認められる欠陥があってはならない。				
	施工後試験	必須	外観検査	・目視 圧接面の研磨状況 たれ下がり 焼き割れ 折れ曲がり等 ・ノギス等による計測 (詳細外観検査) 軸心の偏心 ふくらみ ふくらみの長さ 圧接部のずれ等	熱間押抜法以外の場合 ①軸心の偏心が鉄筋径（径の異なる場合は細いほうの鉄筋）の1/5以下。 ②ふくらみは鉄筋径（径の異なる場合は細いほうの鉄筋）の1.4倍以上。ただし、SD490の場合は1.5倍以上。 ③ふくらみの長さが1.1D以上。ただし、SD490の場合は1.2倍以上。 ④ふくらみの頂点と圧接部のずれがD/4以下 ⑤著しいたれ下がり、折れ曲がりがない	・目視は全数実施する。 ・特に必要と認められたものに対してのみ詳細外観検査を行う。	熱間押抜法以外の場合 ・規格値を外れた場合は下記による。いずれの場合も監督職員の承諾を得る。 ・①は、圧接部を切り取って再圧接し、外観検査および超音波探傷検査を行う。 ・②③は、再加熱し、圧力を加えて所定のふくらみに修正し、外観検査を行う。 ・④は、圧接部を切り取って再圧接修正し、外観検査および超音波探傷検査を行う。 ・⑤は、著しい折れ曲がりが生じた場合は、再加熱して修正し、外観検査を行う。又、著しい焼き割れおよび垂れ下がりなどが生じた場合は、圧接部を切り取って再圧接し、外観検査および超音波探傷検査を行う。	
				熱間押抜法の場合 ①ふくらみを押抜いた後の圧接面に対応する位置の割れ、へこみがない ②ふくらみの長さが1.1D以上。ただし、SD490の場合は1.2D以上 ③鉄筋表面にオーバーヒートによる表面不整があってはならない。 ④その他有害と認められる欠陥があってはならない。			熱間押抜法の場合 ・規格値を外れた場合は下記による。いずれの場合も監督職員の承諾を得る。 ・①②③は、再加熱、再加圧、押抜きを行って修正し、修正後外観検査を行う。 ・④は、再加熱して修正し、修正後外観検査を行う。 ただし、現場条件により溶接機械の設置が出来ない場合には、添筋で補強する（コンクリートの充填性が低下しない場合に限り）。	
			超音波探傷検査	JIS Z 3062	・各検査ロットごとに30箇所のランダムサンプリングを行い、超音波探傷検査を行った結果、不合格箇所数が1箇所以下の時はロットを合格とし、2箇所以上のときはロットを不合格とする。 ただし、合否判定レベルは基準レベルより-24db感度を高めたレベルとする。	超音波探傷検査は採取検査を原則とする。 採取検査の場合は、各ロットの30箇所とし、1ロットの大きさは200箇所程度を標準とする。ただし、1作業班が1日に施工した箇所を1ロットとし、自動と手動は別ロットとする。	規格値を外れた場合は、下記による。 ・不合格ロットの全数について超音波探傷検査を実施し、その結果不合格となった箇所は、監督職員の承認を得て、補強筋（ラップ長の2倍以上）を添えるか、圧接部を切り取って再圧接する。 ・圧接部を切り取って再圧接によって修正する場合には、修正後外観検査および超音波探傷検査を行う。	
3 既製杭工	材料	必須	外観検査（鋼管杭・コンクリート杭・H鋼杭）	目視	目視により使用上有害な欠陥（鋼管杭は変形など、コンクリート杭はひび割れや損傷など）がないこと。	設計図書による。		○
	施工	必須	外観検査（鋼管杭）	JIS A 5525	【円周溶接部の目違い】 外径700mm未満：許容値2mm以下 外径700mm以上1,016mm以下：許容値3mm以下 外径1,016mmを超え2,000mm以下：許容値4mm以下		・外径700mm未満：上ぐいと下ぐいの外周長の差で表し、その差を $2\text{mm} \times \pi$ 以下とする。 ・外径700mm以上1,016mm以下：上ぐいと下ぐいの外周長の差で表し、その差を $3\text{mm} \times \pi$ 以下とする。 ・外径1,016mmを超え2,000mm以下：上ぐいと下ぐいの外周長の差で表し、その差を $4\text{mm} \times \pi$ 以下とする。	
			鋼管杭・コンクリート杭・H鋼杭の現場溶接 浸透探傷試験（溶剤除去性染色浸透探傷試験）	JIS Z 2343-1, 2, 3, 4	われ及び有害な欠陥がないこと。	原則として全溶接箇所で行う。 但し、施工方法や施工順序等から全数量の実施が困難な場合は監督員との協議により、現場状況に応じた数量とすることができる。なお、全溶接箇所の10%以上は、JIS Z 2343-1, 2, 3, 4により定められた認定技術者が行うものとする。 試験箇所は杭の全周とする。		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
3 既製杭工	施工	必須	鋼管杭・H鋼杭の現場溶接放射線透過試験	JIS Z 3104	JIS Z 3104の3類以上	原則として溶接20箇所毎に1箇所とするが、施工方法や施工順序等から実施が困難な場合は現場状況に応じた数量とする。なお、対象箇所では鋼管杭を4方向から透過し、その撮影長は30cm/1方向とする。 (20箇所毎に1箇所とは、溶接を20箇所施工した毎にその20箇所から任意の1箇所を試験することである。)		
			鋼管杭の現場溶接超音波探傷試験	JIS Z 3060	JIS Z 3060の3類以上	原則として溶接20箇所毎に1箇所とするが、施工方法や施工順序等から実施が困難な場合は現場状況に応じた数量とする。なお、対象箇所では鋼管杭を4方向から深傷し、その深傷長は30cm/1方向とする。 (20箇所毎に1箇所とは、溶接を20箇所施工した毎にその20箇所から任意の1箇所を試験することである。)	中掘工法等で、放射線透過試験が不可能な場合は、放射線透過試験に替えて超音波深傷試験とすることができる。	
			鋼管杭・コンクリート杭（根固め）水セメント比試験	比重の測定	設計図書による。 又、設計図書に記載されていない場合は60%～70%とする。	試料の採取回数は一般に単杭では30本に1回、継杭では20本に1回とし、採取本数は1回につき3本とする。		
			鋼管杭・コンクリート杭（根固め）セメントミルクの圧縮強度試験	セメントミルク工法に用いる根固め液及びびくい周固定液の圧縮強度試験 JIS A 1108	設計図書による。	供試体の採取回数は一般に単杭では30本に1回、継杭では20本に1回とし、採取本数は1回につき3本とすることが多い。尚、供試体はセメントミルクの供試体の作成方法に従って作成したφ5×10cmの円柱供試体によって求めるものとする。	参考値：19.6Mpa	
4 下層路盤	材料	必須	修正CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-5	粒状路盤：修正CBR20%以上（クラッシュラン鉄鋼スラグは修正CBR30%以上） アスファルトコンクリート再生骨材を含む再生クラッシュランを用いる場合で、上層路盤、基層、表層の合計厚が次に示す数値より小さい場合は30%以上とする。 北海道地方・・・・・・20cm 東北地方・・・・・・30cm その他の地方・・・・・・40cm	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1)アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	JIS A 5001 表2参照			○
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205	塑性指数PI：6以下		・鉄鋼スラグには適用しない。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1)アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○



## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験 区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
4 下層路盤	材料	必須	鉄鋼スラグの水浸膨張性試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-16	1.5%以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・CS：クラッシャラン鉄鋼スラグに適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m3以上1,000m3未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			道路用スラグの呈色判定試験	JIS A 5015	呈色なし		・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m3以上1,000m3未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			その他	粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	再生クラッシャランに用いるセメントコンクリート再生骨材は、すり減り量が50%以下とする。	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・再生クラッシャランに適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m3以上1,000m3未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの
	施工	必須	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [4]-191	最大乾燥密度の93%以上 X10 95%以上 X6 96%以上 X3 97%以上 歩道箇所：設計図書による	・締固め度は、10個の測定値の平均値X10が規格値を満足しなければならない。また、10個の測定値が得がたい場合は3個の測定値の平均値X3が規格値を満足していなければならないが、X3が規格値をはずれた場合は、さらに3個のデータを加えた平均値X6が規格値を満足していればよい。 ・1,000m2につき1個 ・1,000m2未満の工事（ただし維持工事は除く）は、1工事につき任意の3個		
			ブルーフローリング	舗装調査・試験法便覧 [4]-210		・全幅、全区間で実施する。	・荷重車については、施工時に用いた転圧機械と同等以上の締固効果を持つローラやトラック等を用いるものとする。	

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
4 下層路盤	施工	その他	平板載荷試験	JIS A 1215		1,000m <sup>2</sup> につき2回の割で行う。	・セメントコンクリートの路盤に適用する。	
			骨材のふるい分け試験	JIS A 1102		・中規模以上の工事：異常が認められたとき。	中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。	
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205	塑性指数PI：6以下			
			含水比試験	JIS A 1203	設計図書による		・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。	
5 上層路盤	材料	必須	修正CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-5	修正CBR 80%以上 アスファルトコンクリート再生骨材含む場合90%以上 40℃で行った場合80%以上	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			鉄鋼スラグの修正CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-5	修正CBR 80%以上		・MS：粒度調整鉄鋼スラグ及びHMS：水硬性粒度調整鉄鋼スラグに適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	JIS A 5001 表2参照		・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
5 上層路盤	材料	必須	土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205	塑性指数PI：4以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・但し、鉄鋼スラグには適用しない。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			鉄鋼スラグの呈色判定試験	JIS A 5015 舗装調査・試験法便覧 [4]-10	呈色なし		・MS：粒度調整鉄鋼スラグ及びHMS：水硬性粒度調整鉄鋼スラグに適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			鉄鋼スラグの水浸膨張性試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-16	1.5%以下			○
			鉄鋼スラグの一軸圧縮試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-12	1.2Mpa以上(14日)		・HMS：水硬性粒度調整鉄鋼スラグに適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満） ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
5 上層路盤	材料	必須	鉄鋼スラグの単位容積質量試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-106	1.50kg/L以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：施工前、材料変更時</li> <li>・小規模以下の工事：施工前</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・MS：粒度調整鉄鋼スラグ及びHMS：水硬性粒度調整鉄鋼スラグに適用する。</li> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満）</li> </ul> </li> </ul> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	○
		その他	粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	50%以下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：施工前、材料変更時</li> <li>・小規模以下の工事：施工前</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・粒度調整及びセメントコンクリート再生骨材を使用した再生粒度調整に適用する。</li> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満）</li> </ul> </li> </ul> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122	20%以下		<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満）</li> </ul> </li> </ul> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	○
	施工	必須	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [4]-191	最大乾燥密度の93%以上 X10 95%以上 X6 95.5%以上 X3 96.5%以上	<ul style="list-style-type: none"> <li>・締固め度及び粒度は、10個の測定値の平均値X10が規格値を満足しなければならない。</li> <li>また、10個の測定値が得がたい場合は3個の測定値の平均値X3が規格値を満足していなければならないが、X3が規格値をはずれた場合は、さらに3個のデータを加えた平均値X6が規格値を満足していればよい。</li> <li>・1,000m<sup>2</sup>につき 1 個</li> <li>・1,000m<sup>2</sup>未満の工事（ただし維持工事は除く）は、1 工事につき任意の 3 個</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。               <ul style="list-style-type: none"> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満）</li> </ul> </li> </ul> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p>	

品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
5 上層路盤	施工	必須	粒度 (2.36mmフルイ)	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±15%以内	・中規模以上の工事：定期的又は随時 (1回～2回/日)	<p>とする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p> <p>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</p>	
			粒度 (75μmフルイ)	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	75μmふるい：±6%以内			
		その他	平板載荷試験	JIS A 1215		1,000m <sup>2</sup> につき2回の割で行う。	セメントコンクリートの路盤に適用する。	
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205	塑性指数PI：4以下	観察により異常が認められたとき。		
			含水比試験	JIS A 1203	設計図書による。			
6 アスファルト安定処理路盤			アスファルト舗装に準じる					
7 セメント安定処理路盤	材料	必須	一軸圧縮試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-38	下層路盤：一軸圧縮強さ [7日間] 0.98Mpa 上層路盤：一軸圧縮強さ [7日間] 2.9Mpa (アスファルト舗装)、 2.0Mpa (セメントコンクリート舗装)。	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	<p>・安定処理材に適用する。</p> <p>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</p> <p>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。</p> <p>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</p> <p>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満 (コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満)。</p> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	○
			骨材の修正CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-5	下層路盤：10%以上 上層路盤：20%以上		<p>・アスファルト舗装に適用する。</p> <p>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</p> <p>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。</p> <p>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</p> <p>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満 (コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満)。</p> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
7 セメント安定処理路盤	材料	必須	土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205 舗装調査・試験法便覧 [4]-103	下層路盤 塑性指数PI：9以下 上層路盤 塑性指数PI：9以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	
			粒度（2.36mmフルイ）	JIS A 1102	2.36mmふるい：±15%以内	・中規模以上の工事：定期的又は随時（1回～2回/日）	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。	
			粒度（75μmフルイ）	JIS A 1102	75μmふるい：±6%以内	・中規模以上の工事：異常が認められたとき。		
	施工	必須	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [4]-191	最大乾燥密度の93%以上。 X10 95%以上 X6 95.5%以上 X3 96.5%以上 歩道箇所：設計図書による	・締固め度は、10個の測定値の平均値X10が規格値を満足しなければならない。また、10個の測定値が得がたい場合は3個の測定値の平均値X3が規格値を満足していなければならないが、X3が規格値をはずれた場合は、さらに3個のデータを加えた平均値X6が規格値を満足していればよい。 ・1,000m <sup>2</sup> につき1個 ・1,000m <sup>2</sup> 未満の工事（ただし維持工事は除く）は、1工事につき任意の3個		
			含水比試験	JIS A 1203	設計図書による。	観察により異常が認められたとき。		
			セメント量試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-213, [4]-218	±1.2%以内	・中規模以上の工事：異常が認められたとき（1～2回/日）	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。	
8 アスファルト舗装	材料	必須	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	JIS A 5001 表2参照	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110	表層・基層 表乾密度：2.45g/cm <sup>3</sup> 以上 吸水率：3.0%以下			○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	粘土、粘土塊量：0.25%以下			○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
8 アスファルト舗装	材料	必須	粗骨材の形状試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-45	細長、あるいは扁平な石片：10%以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	同上	○
			フィラーの粒度試験	JIS A 5008	便覧 表3.3.17による。			○
			フィラーの水分試験	JIS A 5008	1%以下			○
	その他		フィラーの塑性指数試験	JIS A 1205	4以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・火成岩類を粉砕した石粉を用いる場合に適用する。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			フィラーのフロー試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-65	50%以下			○
			フィラーの水浸膨張試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-59	4%以下			○
			フィラーの剥離抵抗性試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-61	1/4以下			○
			製鋼スラグの水浸膨張性試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-77	水浸膨張比：2.0%以下			○
			製鋼スラグの密度及び吸水率試験	JIS A 1110	SS 表乾密度：2.45g/cm <sup>3</sup> 以上 吸水率：3.0%以下			○
			粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	すり減り量 碎石：30%以下 CSS：50%以下 SS：30%以下			○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
8 アスファルト舗装	材料	その他	硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122	損失量：12%以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m3以上1,000m3未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1)アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			粗骨材中の軟石量試験	JIS A 1126	軟石量：5%以下			○
			針入度試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			軟化点試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3			○
			伸度試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3			○
			トルエン可溶分試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			引火点試験	JIS K 2265-1 JIS K 2265-2 JIS K 2265-3 JIS K 2265-4	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			薄膜加熱試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			蒸発後の針入度比試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1			○
			密度試験	JIS K 2207	舗装施工便覧参照 ・舗装用石油アスファルト：表 3.3.1 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			高温動粘度試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-180	舗装施工便覧参照 ・セミブローンアスファルト：表 3.3.4			○
			60℃粘度試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-192				○
			タフネス・テナシティ試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-244	舗装施工便覧参照 ・ポリマー改質アスファルト：表 3.3.3			○



## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
8 アスファルト舗装	プラント	必須	粒度 (2.36mmフルイ)	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±12%以内基準粒度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：定期的又は随時。</li> <li>・小規模以下の工事：異常が認められたとき。</li> </ul> 印字記録の場合：全数又は抽出・ふるい分け試験 1～2回/日	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			粒度 (75μmフルイ)	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	75μmふるい：±5%以内基準粒度			○
			アスファルト量抽出粒度分析試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	アスファルト量：±0.9%以内			○
			温度測定 (アスファルト・骨材・混合物)	温度計による。	配合設計で決定した混合温度。	随時		○
	舗設現場	必須	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [3]-91	基準密度の94%以上。 X10 96%以上 X6 96%以上 X3 96.5%以上 歩道箇所：設計図書による	<ul style="list-style-type: none"> <li>・締固め度は、10個の測定値の平均値X10が規格値を満足しなければならない。また、10個の測定値が得がたい場合は3個の測定値の平均値X3が規格値を満足していなければならないが、X3が規格値をはずれた場合は、さらに3個のデータを加えた平均値X6が規格値を満足していればよい。</li> <li>・1,000m<sup>2</sup>につき1個</li> <li>・1,000m<sup>2</sup>未満の工事（ただし維持工事は除く）</li> <li>・1工事につき任意の3個</li> </ul>	・橋面舗装はコア採取しないでAs合材量（プラント出荷数量）と舗設面積及び厚さでの密度管理、または転圧回数による管理を行う。	
			温度測定（初期締固め前）	温度計による。	110℃以上	随時	測定値の記録は、1日4回（午前・午後各2回）。	
			外観検査（混合物）	目視				
		その他	すべり抵抗試験	舗装調査・試験法便覧 [1]-84	設計図書による	舗設車線毎200m毎に1回		
9 転圧コンクリート	材料	必須	コンシステンシーVC試験		舗装施工便覧8-3-3による。 目標値 修正VC値：50秒	当初		
			マーシャル突き固め試験	転圧コンクリート舗装技術指針（案） ※いずれか1方法	舗装施工便覧8-3-3による。 目標値 締固め率：96%			
			ランマー突き固め試験		舗装施工便覧8-3-3による。 目標値 締固め率：97%			
			含水比試験	JIS A 1203	設計図書による。		含水比は、品質管理試験としてコンシステンシー試験がやむえずおこなえない場合に適用する。なお測定方法は試験の迅速性から直火法によるのが臨ましい。	
			コンクリートの曲げ強度試験	JIS A 1106	設計図書による。	2回/日（午前・午後）で、3本1組/回。		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
9 転圧コンクリート	トを使用する場合を除く	その他	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	舗装施工便覧 細骨材表-3.3.20 粗骨材表-3.3.20	細骨材300m3、粗骨材500m3ごとに1回、あるいは1回/日。		○
			骨材の単位容積質量試験	JIS A 1104	設計図書による。			○
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110	設計図書による。	工事開始前、材料の変更時		○
			粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	35%以下 積雪寒冷地25%以下		ホワイトベースに使用する場合：40%以下	○
			粗骨材中の軟石量試験	JIS A 1126	軟石量：5%以下		観察で問題なければ省略できる。	○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 5308の附属書3	圧縮強度の90%以上			○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	工事開始前、材料の変更時	観察で問題なければ省略できる。	○
			骨材中の比重1.95の液体に浮く粒子の試験	JIS A 5308の附属書2	0.5%以下			○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%未満 粗骨材：12%以下		寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）			○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308附属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308附属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		・その原水は上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
	製造（プラント）	その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 （高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内） 混和剤：±3%以内	設計図書による。	・レディーミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○

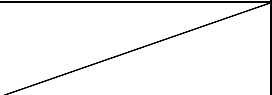
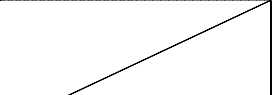
## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
9 転圧コンクリート	（JISマーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合を除く）	その他	ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランブ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上。またレディミクストコンクリート工場（JISマーク表示認証工場）の品質証明書等のみとすることができる。	○
				連続ミキサの場合： 土木学会規準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランブ差：3cm以下			○
			細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディミクスコンクリート以外の場合に適用する。	○
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		○
施工	必須		コンシステンシーVC試験		修正VC値の±10秒	1日2回（午前・午後）以上、その他コンシステンシーの変動が認められる場合などに随時実施する。ただし運搬車ごとに目視観察を行う。		
			マーシャル突き固め試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-290 ※いずれか1方法	目標値の±1.5%			
			ランマー突き固め試験					
			コンクリートの曲げ強度試験	JIS A 1106	・試験回数が7回以上（1回は3個以上の供試体の平均値）の場合は、全部の試験値の平均値が所定の合格判断強度を上まわらなければならない。 ・試験回数が7回未満となる場合は、 ①1回の試験結果は配合基準強度の85%以上 ②3回の試験結果の平均値は配合基準強度以上	2回/日（午前・午後）で、3本1組/回（材令28日）。		
			温度測定（コンクリート）	温度計による。		2回/日（午前・午後）以上		
			現場密度の測定	RI水分密度計	基準密度の95.5%以上。	40mに1回（横断方向に3箇所）		
			コアによる密度測定	舗装調査・試験法便覧 [3]-300		1,000m2に1個の割合でコアを採取して測定		
10 グラスアスファルト舗装	材料	必須	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	JIS A 5001 表2参照	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m3以上1,000m3未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
10 グース アスファルト舗装	材料	必須	骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110	表層・基層 表乾密度：2.45g/cm <sup>3</sup> 以上 吸水率：3.0%以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	同上	○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	粘土、粘土塊量：0.25%以下			○
			粗骨材の形状試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-45	細長、あるいは扁平な石片：10%以下			○
			フィラーの粒度試験	JIS A 5008	便覧3-3-17による。			○
			フィラーの水分試験	JIS A 5008	1%以下			○
	その他		粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	30%以下	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122	損失量：12%以下			○
			粗骨材中の軟石量試験	JIS A 1126	軟石量：5%以下			○
			針入度試験	JIS K 2207	15～30(1/10mm)		・規格値は、石油アスファルト（針入度20～40）にトリニダットレイクアスファルトを混合したものの性状値である。 ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
10 グース アスファルト舗装	材料	その他	軟化点試験	JIS K 2207	58～68℃	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：施工前、材料変更時</li> <li>・小規模以下の工事：施工前</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・規格値は、石油アスファルト（針入度20～40）にトリニダットレイクアスファルトを混合したものの性状値である。</li> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。</li> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上3,000t未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上1,000m<sup>3</sup>未満）。</li> <li>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</li> <li>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</li> </ul>	○
			伸度試験	JIS K 2207	10cm以上（25℃）			○
			トルエン可溶分試験	JIS K 2207	86～91%			○
			引火点試験	JIS K 2265-1 JIS K 2265-2 JIS K 2265-3 JIS K 2265-4	240℃以上			○
			蒸発質量変化率試験	JIS K 2207	0.5%以下			○
			密度試験	JIS K 2207	1.07～1.13g/cm <sup>3</sup>			○
ブランド	必須		貫入試験40℃	舗装調査・試験法便覧 [3]-315	貫入量（40℃）目標値 表層：1～4mm 基層：1～6mm	配合毎に各1回。ただし、同一配合の合材100t未満の場合も実施する。		○
			リュエル流動性試験240℃	舗装調査・試験法便覧 [3]-320	3～20秒（目標値）			○
			ホイールトラッキング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-39	300以上			○
			曲げ試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-69	破断ひずみ（-10℃、50mm/min） 8.0×10 <sup>-3</sup> 以上			○
			粒度（2.36mmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±12%以内基準粒度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：定期的又は随時。</li> <li>・小規模以下の工事：異常が認められたとき。</li> <li>印字記録の場合：全数又は抽出・ふるい分け試験 1～2回/日</li> </ul>		○

品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
10 グース アスファルト舗装	プラント	必須	粒度（75μmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	75μmふるい：±5%以内基準粒度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：定期的又は随時。</li> <li>・小規模以下の工事：異常が認められたとき。</li> </ul> 印字記録の場合：全数又は抽出・ふるい分け試験 1～2回/日	同上	○
			アスファルト量抽出粒度分析試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	アスファルト量：±0.9%以内			○
			温度測定（アスファルト・骨材・混合物）	温度計による。	アスファルト：220℃以下 石 粉：常温～150℃	随時		○
	舗設現場	必須	温度測定（初期締固め前）	温度計による。		随時	測定値の記録は、1日4回（午前・午後各2回）	
	材料	必須	土の締固め試験	JIS A 1210	設計図書による。	当初及び土質の変化したとき。		
			CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-155, [4]-158	設計図書による。			
		施工	現場密度の測定 ※右記試験方法（3種類）のいずれかを実施する。	最大粒径≤53mm：JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法 最大粒径>53mm：舗装調査・試験法便覧 [4]-185  または、RI計器を用いた盛土の締固め管理要領（案）  「TS・GNSSを用いた盛土の締固め情報化施工管理要領（案）」【TS編・GNSS編】による	最大乾燥密度の90%以上。  1管理単位の現場乾燥密度の平均値が最大乾燥密度の90%以上。又は、設計図書による。  施工範囲を小分割した管理ブロックの全てが規定回数だけ締め固められたことを確認する。ただし、路肩から1m以内と締固め機械が近寄れない構造物周辺は除く。	500m3につき1回の割合で行う。但し、1,500m3未満の工事は1工事当たり3回以上。  1日の1層あたりの施工面積を基準とする。管理単位の面積は1,500m2を標準とし、1日の施工面積が2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。1管理単位あたりの測定点数の目安を下表に示す。	左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員との協議の上で、（再）転圧を行うものとする。  ・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員との協議の上で、（再）転圧を行うものとする。	
11 路床安定処理工	ブルーフローリング		舗装調査・試験法便覧 [4]-210		路床仕上がり後、全幅、全区間で実施する。	1. 盛土を管理する単位（以下「管理単位」）に分割して管理単位毎に管理を行う。 2. 管理単位は築堤、路体路床とも1日の1層当たりの施工面積は1,500m2を標準とす2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。 3. 1日の施工が複数層に及ぶ場合でも1管理単位を複数層にまたがらせることはしないものとする。 4. 土取り場の状況や土質状況が変わる場合には、新規の管理単位として取り扱うものとする。	・荷重車については、施工時に用いた転圧機械と同等以上の締固効果を持つローラやトラック等を用いるものとする。	
			平板載荷試験	JIS A 1215	延長40mにつき1箇所の割で行う。		・セメントコンクリートの路盤に適用する。	
	その他							

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
11 路床安定処理工	施工	その他	現場CBR試験	JIS A 1222	設計図書による。	各車線ごとに延長40mにつき1回の割で行う。		
			含水比試験	JIS A 1203		降雨後または含水比の変化が認められたとき。		
			たわみ量	舗装調査・試験法便覧 [1]-227 (ベンゲルマンビーム)		ブルーフローリングでの不良個所について実施		
12 表層安定処理工 (表層混合処理)	材料	その他	土の一軸圧縮試験	JIS A 1216	設計図書による。	当初及び土質の変化したとき。	配合を定めるための試験である。	
			現場密度の測定 ※右記試験方法(3種類)のいずれかを実施する。	JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法	最大乾燥密度の90%以上。	500m3につき1回の割合で行う。但し、1,500m3未満の工事は1工事当たり3回以上。	左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員との協議の上で、(再)転圧を行うものとする。	
			または、RI計器を用いた盛土の締め固め管理要領(案)		1管理単位の現場乾燥密度の平均値が最大乾燥密度の90%以上。又は、設計図書による。	1日の1層あたりの施工面積を基準とする。管理単位の面積は1,500m2を標準とし、1日の施工面積が2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。1管理単位あたりの測定点数の目安を下表に示す。	・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員との協議の上で、(再)転圧を行うものとする。	
			「TS・GNS Sを用いた盛土の締め固め情報化施工管理要領(案)」 【TS編・GNS S編】による		施工範囲を小分割した管理ブロックの全てが規定回数だけ締め固められたことを確認する。ただし、路肩から1m以内と締め固め機械が近寄れない構造物周辺は除く。	1. 盛土を管理する単位(以下「管理単位」)に分割して管理単位毎に管理を行う。 2. 管理単位は築堤、路体路床とも1日の1層当たりの施工面積は1,500m2を標準とする。また、1日の施工面積が2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。 3. 1日の施工が複数層に及ぶ場合でも1管理単位を複数層にまたがらせることはしないものとする。 4. 土取り場の状況や土質状況が変わる場合には、新規の管理単位として取り扱うものとする。		
			ブルーフローリング	舗装調査・試験法便覧 [4]-210		路床仕上げ後、全幅、全区間で実施する。	・荷重車については、施工時に用いた転圧機械と同等以上の締め固め効果を持つローラやトラック等を用いるものとする。	
			平板載荷試験	JIS A 1215		各車線ごとに延長40mにつき1回の割で行う。		
			現場CBR試験	JIS A 1222	設計図書による。			
			含水比試験	JIS A 1203		降雨後または含水比の変化が認められたとき。		
			たわみ量	舗装調査・試験法便覧 [1]-227 (ベンゲルマンビーム)		ブルーフローリングでの不良個所について実施。		
13 固結工	施工	必須	土の一軸圧縮試験	JIS A 1216	①各供試体の試験結果は改良地盤設計強度の85%以上。 ②1回の試験結果は改良地盤設計強度以上。 なお、1回の試験とは3個の供試体の試験値の平均値で表したものを	改良体500本未満は3本、500本以上は250本増えるごとに1本追加する。試験は1本の改良体について、上、中、下それぞれ1回、計3回とする。ただし、1本の改良体で設計強度を変えている場合は、各設計強度毎に3回とする。 現場の条件、規模等により上記によりがたい場合は監督職員の指示による。		
14 アンカー工	施工	必須	モルタルの圧縮強度試験	JIS A 1108	設計図書による。	2回(午前・午後)/日		
			モルタルのフロー値試験	JIS R 5201		練りませ開始前に試験は2回行い、その平均値をフロー値とする。		
			多サイクル確認試験	グラウンドアンカー設計・施工基準、同解説 (JGS4101-2000)		・施工数量の5%かつ3本以上。 ・初期荷重は計画最大荷重の約0.1倍とし、引き抜き試験に準じた方法で載荷と除荷を繰り返す。	但し、モルタルの必要強度の確認後に実施すること。	
			1サイクル確認試験	グラウンドアンカー設計・施工基準、同解説 (JGS4101-2000)		・多サイクル確認試験に用いたアンカーを除くすべて。 ・初期荷重は計画最大荷重の約0.1倍とし、計画最大荷重まで載荷した後、初期荷重まで除荷する1サイクル方式とする。		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
14 アンカー工	施工	その他	その他の確認試験	グラウンドアンカー設計・施工基準、同解説 (JGS4101-2000)	所定の緊張力が導入されていること。		・定着時緊張力確認試験 ・残存引張力確認試験 ・リフトオンテスト 等があり、多サイクル確認試験、1サイクル確認試験の試験結果をもとに、監督員と協議し行う必要性の有無を判断する。	
15 補強土壁工	材料	必須	土の締固め試験	JIS A 1210	設計図書による。	当初及び土質の変化時。		
			外観検査（ストリップ、鋼製壁面材、コンクリート製壁面材等）	補強土壁工法各設計・施工マニュアルによる。	同左	同左		
			コンクリート製壁面材のコンクリート強度試験	補強土壁工法各設計・施工マニュアルによる。				○
	施工	必須	土の粒度試験	補強土壁工法各設計・施工マニュアルによる。	同左	設計図書による。		
			現場密度の測定※右記試験方法（3種類）のいずれかを実施する。	最大粒径≦53mm：JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法 最大粒径>53mm：舗装調査・試験法便覧 [4] -185	最大乾燥密度の90%以上。または、設計図書による。	500m3につき1回の割合で行う。但し、1,500m3未満の工事は1工事当たり3回以上。	左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。	
			または、「RI計器を用いた盛土の締固め管理要領（案）」		路体・路床とも1管理単位の現場乾燥密度の平均値が最大乾燥密度の90%以上。又は、設計図書による。	路体・路床とも、1日の1層あたりの施工面積を基準とする。管理単位の面積は1,500m2を標準とし、1日の施工面積が2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。1管理単位あたりの測定点数の目安を下表に示す。	・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。	
16 吹付工	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）」	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○
			骨材のふるい分け試験	JIS A 1102 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	設計図書による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	絶乾密度：2.5以上 細骨材の吸水率：3.5%以下 粗骨材の吸水率：3.0%以下 （砕砂・砕石、高炉スラグ骨材、フェロニッケルスラグ細骨材、銅スラグ細骨材の規格値については摘要を参照）	JIS A 5005（コンクリート用砕石及び砕砂） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第1部：高炉スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第2部：フェロニッケルスラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第3部：銅スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第4部：電気炉酸化スラグ骨材） JIS A 5021（コンクリート用再生骨材H）		○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103 JIS A 5005	粗骨材：1.0%以下 細骨材：コンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合3.0%以下、その他の場合5.0%以下（砕砂およびスラグ細骨材を用いた場合はコンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合5.0%以下その他の場合7.0%以下）	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。 （山砂の場合は、工事中1回/週以上）		○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○



## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
16 吹付工	材料	を使用する場合を除く	モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下	工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合	寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）			○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308付属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用してる場合は試験に換え、上水道を使用してることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308付属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		その原水は、上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
	製造  (ブランド)  (「JISマーク」表示されたレディーミクストコンクリートを使用する場合を除く)	必須	細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディーミクストコンクリート以外の場合に適用する。	
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		
		その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 （高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内） 混和剤：±3%以内	設計図書による。	・レディーミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。 ・急結剤は適用外	○
			ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランブ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	○
				連続ミキサの場合： 土木学会標準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランブ差：3cm以下			○
				その他	塩化物総量規制			「コンクリートの耐久性向上」
	スランブ試験（モルタル除く）	JIS A 1101	スランブ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランブ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。			

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
16 吹付工	施工	必須	コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1108 土木学会規準JSCE F561-1999	3本の強度の平均値が材令28日で設計強度以上とする。	吹付1日につき1回行う。 なお、テストピースは現場に配置された型枠に工事で使用するのと同じコンクリート（モルタル）を吹付け、現場で28日養生し、直径50mmのコアを切り取りキャッピングを行う。原則として1回に3本とする。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
		その他	空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5%（許容差）	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			コアによる強度試験	JIS A 1107	設計図書による。	品質に異常が認められた場合に行う。		
17 現場吹付法砕工	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）」	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○
		その他（JISマーク表示されたレディーミクストコンクリートを使用する場合は除く）	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	設計図書による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	絶乾密度：2.5以上 細骨材の吸水率：3.5%以下 粗骨材の吸水率：3.0%以下 （砕砂・碎石、高炉スラグ骨材、フェロニッケルスラグ細骨材、銅スラグ細骨材の規格値については摘要を参照）		JIS A 5005（砕砂及び碎石） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材—第1部：高炉スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材—第2部：フェロニッケルスラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材—第3部：銅スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材—第4部：電気炉酸化スラグ骨材） JIS A 5021（コンクリート用再生骨材B）	○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103 JIS A 5005	粗骨材：1.0%以下 細骨材：コンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合3.0%以下、その他の場合5.0%以下（砕砂およびスラグ細骨材を用いた場合はコンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合5.0%以下その他の場合7.0%以下）	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。 （山砂の場合は、工事中1回/週以上）		○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下	工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。	寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）			○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308付属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308付属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		・その原水は上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
17 現場吹付法砕工	製造 (JISマーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合は除く)	必須	細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディミクストコンクリート以外の場合に適用する。	○
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		○
		その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 (高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内) 混和剤：±3%以内	設計図書による。	・レディミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○
			ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合 コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランブ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合 コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	○
				連続ミキサの場合： 土木学会規準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランブ差：3cm以下			○
18 河川・海岸土工	材料	施工	スランブ試験 (モルタル除く)	JIS A 1101	スランブ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランブ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
		必須	コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1107 JIS A 1108 土木学会規準JSCE F561-2005	設計図書による	1回6本 吹付1日につき1回行う。 なお、テストピースは現場に配置された型枠に工事で使用するのと同じコンクリート(モルタル)を吹付け、現場で7日間および28日間放置後、φ5cmのコアを切り取りキャッピングを行う。1回に6本(σ7…3本、σ28…3本、)とする。	・参考値：18N/mm2以上(材令28日) ・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
		その他	塩化物総量規制	「コンクリートの耐久性向上」	原則0.3kg/m3以下	コンクリートの打設が午前と午後にはまたがる場合は、午前には1回コンクリート打設前に、その試験結果が塩化物総量の規制値の1/2以下の場合には、午後の試験を省略することができる。(1試験の測定回数は3回)試験の判定は3回の測定値の平均値。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。 ・骨材に海砂を使用する場合は、「海砂の塩化物イオン含有率試験方法」(JSCE-C502, 503)または設計図書の規定により行う。	
			空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5% (許容差)	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			ロックボルトの引抜き試験	参考資料「ロックボルトの引抜き試験」による	引抜き耐力の80%程度以上。	設計図書による。		
			コアによる強度試験	JIS A 1107	設計図書による。	品質に異常が認められた場合に行う。		
18 河川・海岸土工	材料	必須	土の締固め試験	JIS A 1210	設計図書による。	当初及び土質の変化した時。		
		その他	土の粒度試験	JIS A 1204	設計図書による。	当初及び土質の変化した時。		
			土粒子の密度試験	JIS A 1202				
			土の含水比試験	JIS A 1203				
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205				
			土の一軸圧縮試験	JIS A 1216				
						必要に応じて。		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
18 河川・海岸土工	材料	その他	土の三軸圧縮試験	土質試験の方法と解説	設計図書による。	必要に応じて。		
			土の圧密試験	JIS A 1217				
			土のせん断試験	土質試験の方法と解説				
			土の透水試験	JIS A 1218				
	施工	必須	現場密度の測定 ※右記試験方法（3種類）のいずれかを実施する。	最大粒径≦53mm：JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法 最大粒径>53mm：舗装調査・試験法便覧 [4]-185	最大乾燥密度の85%以上。又は設計図書に示された値。	築堤は、1,000m <sup>3</sup> に1回の割合、または堤体延長20mに3回の割合の内、測定頻度の高い方で実施する。	・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。	
				または、「RI計器を用いた盛土の締固め管理要領（案）」による。				・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。
				「TS・GNSSを用いた盛土の締固め情報化施工管理要領（案）」【TS編・GNSS編】による	施工範囲を小分割した管理ブロックの全てが規定回数だけ締め固められたことを確認する。	1. 盛土を管理する単位（以下「管理単位」）に分割して管理単位毎に管理を行う。 2. 1日の施工が複数層に及ぶ場合でも1管理単位を複数層にまたがらせることはしないものとする。 3. 土取り場の状況や土質状況が変わる場合には、新規の管理単位として取り扱うものとする。		
		その他	土の含水比試験	JIS A 1203	設計図書による。	含水比の変化が認められたとき。  トラフィカビリティが悪いとき。		
			コーン指数の測定	舗装調査・試験法便覧 [1]-216				
	材料	必須	土の締固め試験	JIS A 1210	設計図書による。	当初及び土質の変化時。		
19 砂防土工	施工	必須	現場密度の測定 ※右記試験方法（3種類）のいずれかを実施する。	最大粒径≦53mm：JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法 最大粒径>53mm：舗装調査・試験法便覧 [4]-185	最大乾燥密度の85%以上。又は設計図書に示された値。	1,000m <sup>3</sup> に1回の割合、または堤体延長20mに3回の割合の内、測定頻度の高い方で実施する。	左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。	
				または、「RI計器を用いた盛土の締固め管理要領（案）」による。				・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、（再）転圧を行うものとする。
				「TS・GNPSを用いた盛土の締固め情報化施工管理要領（案）」【TS編・GNSS編】による	施工範囲を小分割した管理ブロックの全てが規定回数だけ締め固められたことを確認する。	1. 盛土を管理する単位（以下「管理単位」）に分割して管理単位毎に管理を行う。 2. 1日の施工が複数層に及ぶ場合でも1管理単位を複数層にまたがらせることはしないものとする。 3. 土取り場の状況や土質状況が変わる場合には、新規の管理単位として取り扱うものとする。		
	材料	必須	土の締固め試験	JIS A 1210	設計図書による。	当初及び土質の変化した時（材料が岩砕の場合は除く）。 但し、法面、路肩部の土量は除く。		
			CBR試験（路床）	JIS A 1211				
			土の粒度試験	JIS A 1204		当初及び土質の変化した時。（材料が岩砕の場合は除く）		
20 道路土工	材料	必須			設計図書による。	当初及び土質の変化した時。		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
20 道路土工	材料	その他	土粒子の密度試験	JIS A 1202	設計図書による。	当初及び土質の変化した時。		
			土の含水比試験	JIS A 1203		・路体：当初及び土質の変化した時。 ・路床：含水比の変化が認められた時。		
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205		当初及び土質の変化した時。		
			土の一軸圧縮試験	JIS A 1216				
			土の三軸圧縮試験	土質試験の方法と解説				
			土の圧密試験	JIS A 1217				
			土のせん断試験	土質試験の方法と解説				
			土の透水試験	JIS A 1218				
	施工	必須	現場密度の測定 ※右記試験方法(3種類)のいずれかを実施する。	最大粒径≦53mm：JIS A 1214 JIS A 1210 A・B 法 最大粒径>53mm：舗装調査・試験法便覧 [4]-185	・路体：最大乾燥密度の85%以上。 ・路床：最大乾燥密度の90%以上。 その他、設計図書による。	路体の場合、1,000m3につき1回の割合で行う。但し、5,000m3未満の工事は、1工事当たり3回以上。 路床の場合、500m3につき1回の割合で行う。但し、1,500m3未満の工事は1工事当たり3回以上。	左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、(再)転圧を行うものとする。	
				または、「RI計器を用いた盛土の締め固め管理要領(案)」	路体・路床とも1管理単位の現場乾燥密度の平均値が最大乾燥密度の90%以上。又は、設計図書による。	路体・路床とも、1日の1層あたりの施工面積を基準とする。管理単位の面積は1,500m2を標準とし、1日の施工面積が2,000m2以上の場合、その施工面積を2管理単位以上に分割するものとする。1管理単位あたりの測定点数の目安を下表に示す。	・最大粒径<100mmの場合に適用する。 ・左記の規格値を満たしていても、規格値を著しく下回っている点が存在した場合は、監督職員と協議の上で、(再)転圧を行うものとする。	
				「TS・GNS Sを用いた盛土の締め固め情報化施工管理要領(案)」 【TS編・GNS S編】による	施工範囲を小分割した管理ブロックの全てが規定回数だけ締め固められたことを確認する。	1. 盛土を管理する単位(以下「管理単位」)に分割して管理単位毎に管理を行う。 2. 1日の施工が複数層に及ぶ場合でも1管理単位を複数層にまたがらせることはしないものとする。 3. 土取り場の状況や土質状況が変わる場合には、新規の管理単位として取り扱うものとする。		
			ブルーフローリング	舗装調査・試験法便覧 [4]-210		路床仕上げ後全幅、全区間について実施する。但し、現道打換工事、仮設用道路維持工事は除く。	・荷重車については、施工時に用いた転圧機械と同等以上の締め固め効果を持つローラやトラック等を用いるものとする。	
			平板載荷試験	JIS A 1215		各車線ごとに延長40mについて1箇所の割で行う。	・セメントコンクリートの路盤に適用する。	
			現場CBR試験	JIS A 1222	設計図書による。	各車線ごとに延長40mについて1回の割で行う。		
			含水比試験	JIS A 1203		降雨後又は、含水比の変化が認められたとき。		
			コーン指数の測定	舗装調査・試験法便覧 [1]-216		トラフィカビリティが悪いとき。		
			たわみ量	舗装調査・試験法便覧 [1]-227 (ベンゲルマンビーム)		ブルーフローリングでの不良箇所について実施		
21 捨石工	施工	必須	岩石の見掛比重	JIS A 5006	設計図書による。	原則として産地毎に当初及び岩質の変化時。	・500m3以下は監督職員承諾を得て省略できる。 ・参考値： ・硬石 : 約2.7g/cm3～2.5g/cm3 ・準硬石 : 約2.5g/cm3～2g/cm3 ・軟石 : 約2g/cm3未満	○
			岩石の吸水率	JIS A 5006			・500m3以下は監督職員承諾を得て省略できる。 ・参考値： ・硬石 : 5%未満 ・準硬石 : 5%以上15%未満 ・軟石 : 15%以上	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
21 捨石工	施工	必須	岩石の圧縮強さ	JIS A 5006	設計図書による。	原則として産地毎に当初及び岩質の変化時。	・500m3以下は監督職員承諾を得て省略できる。 ・参考値： ・硬石：4903N/cm2以上 ・準硬石：980.66N/cm2以上 4903N/cm2未満 ・軟石：980.66N/cm2未満	○
		その他	岩石の形状	JIS A 5006	うすっぱらなもの、細長いものであつてはならない。	5,000m3につき1回の割で行う。 但し、5,000m3以下のものは1工事2回実施する。	500m3以下は監督職員承諾を得て省略できる。	○
22 コンクリートダム	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）」	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○
		その他	骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	絶乾密度：2.5以上 吸水率：2002年制定コンクリート標準示方書ダムコンクリート編による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。	JIS A 5005（砕砂及び碎石） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第1部：高炉スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第2部：フェロニッケルスラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第3部：銅スラグ骨材） JIS A 5011-1（コンクリート用スラグ骨材－第4部：電気炉酸化スラグ骨材） JIS A 5021（コンクリート用再生骨材H）	○
			骨材のふるい分け試験	JIS A 1102 JIS A 5005 JIS A 5021	設計図書による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ボルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ボルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202				○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103 JIS A 5005	粗骨材：1.0%以下 細骨材：コンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合3.0%以下、その他の細骨材を用いた場合はコンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合5.0%以下その他の場合7.0%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。 (山砂の場合は、工事中1回/週以上)		○
			粗骨材中の軟石量試験	JIS A 1126	軟石量：5%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下			○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下		寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○

品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
22 コンクリートダム	同上	その他	粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	40%以下			○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308附属書 3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308附属書 3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		・その原水は上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
	製造（プラント） <small>（JISマーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合を除く）</small>	その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 （高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内） 混和剤：±3%以内	設計図書による。	レディミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○
			ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合 コンクリート中のモルタル単位 容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランプ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合 コンクリート中のモルタル単位 容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。		○
				連続ミキサの場合： 土木学会規準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランプ差：3cm以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。		○
			細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディミクストコンクリート以外の場合に適用する。	○
施工	必須		粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		○
			塩化物総量規制	「コンクリートの耐久性向上」	原則0.3kg/m3以下	コンクリートの打設が午前と午後にもたがる場合は、午前に1回コンクリート打設前に、その試験結果が塩化物総量の規制値の1/2以下の場合、午後の試験を省略することができる。（1試験の測定回数は3回とする）試験の判定は3回の測定値の平均値。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。 ・骨材に海砂を使用する場合は、「海砂の塩化物イオン含有率試験方法」（JSCE-C502.503）または設計図書の規定により行う。	

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
22 コンクリートダム	施工	必須	単位水量測定	「レディミキストコンクリートの品質確保について」	1) 測定した単位水量が、配合設計±15kg/m <sup>3</sup> の範囲にある場合はそのまま施工してよい。 2) 測定した単位水量が、配合設計±15を超え±20kg/m <sup>3</sup> の範囲にある場合は、水量変動の原因を調査し、生コン製造者に改善を指示し、その運搬車の生コンは打設する。その後、配合設計±15kg/m <sup>3</sup> 以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 3) 配合設計±20kg/m <sup>3</sup> の指示値を超える場合は、生コンを打込まずに、持ち帰らせ、水量変動の原因を調査し、生コン製造業者に改善を指示しなければならない。その後の全運搬車の測定を行い、配合設計±20kg/m <sup>3</sup> 以内になることを確認する。更に、配合設計±15kg/m <sup>3</sup> 以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 なお、管理値または指示値を超える場合は1回に限り試験を実施することができる。再試験を実施したい場合は2回の測定結果のうち、配合設計との差の絶対値の小さい方で評価してよい。	100m <sup>3</sup> /日以上の場合； 2回/日（午前1回、午後1回）、または構造物の重要構造物では重要度に応じて100～150m <sup>3</sup> ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められたときとし測定回数は多い方を採用する。	示方配合の単位水量の上限値は、粗骨材の最大寸法が20mm～25mmの場合は175kg/m <sup>3</sup> 、40mmの場合は165kg/m <sup>3</sup> を基本とする。	
			スランブ試験	JIS A 1101	スランブ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランブ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm	・荷卸し時 ・1回/日または構造物の重要度と工事の規模の応じて20m <sup>3</sup> ～150m <sup>3</sup> ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m <sup>3</sup> 未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミキストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5%（許容差）			
			コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1108	(a) 圧縮強度の試験値が、設計基準強度の80%を1/20以上の確率で下回らない。 (b) 圧縮強度の試験値が、設計基準強度を1/4以上の確率で下回らない。	1回3ヶ 1. 1ブロック1リフトのコンクリート量500m <sup>3</sup> 未満の場合1ブロック1リフト当り1回の割で行う。なお、1ブロック1リフトのコンクリート量が150m <sup>3</sup> 以下の場合及び数種のコンクリート配合から構成される場合は監督職員と協議するものとする。 2. 1ブロック1リフトコンクリート量500m <sup>3</sup> 以上の場合1ブロック1リフト当り2回の割で行う。なお、数種のコンクリート配合から構成される場合は監督職員と協議するものとする。 3. ピア、埋設物周辺及び減勢工などのコンクリートは、打設日1日につき2回の割で行う。 4. 上記に示す基準は、コンクリートの品質が安定した場合の標準を示すものであり、打ち込み初期段階においては、2～3時間に1回の割で行う。		
			温度測定（気温・コンクリート）	温度計による。		1回供試体作成時各ブロック打ち込み開始時終了時。		
			その他 コンクリートの単位容積質量試験	JIS A 1116	設計図書による	1回2ヶ 当初及び品質に異常が認められる場合に行う。	参考値：2.3t/m <sup>3</sup> 以上	
			コンクリートの洗い分析試験	JIS A 1112		1回 当初及び品質に異常が認められる場合に行う。		
23 覆工コンクリート (NATM)	材料	必須	コンクリートのブリージング試験	JIS A 1123		1回1ヶ 当初及び品質に異常が認められる場合に行う。		
			コンクリートの引張強度試験	JIS A 1113		1回3ヶ 当初及び品質に異常が認められる場合に行う。		
			コンクリートの曲げ強度試験	JIS A 1106		1回3ヶ 当初及び品質に異常が認められる場合に行う。		
23 覆工コンクリート (NATM)	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）」	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○
			その他 骨材のふるい分け試験	JIS A 1102 JIS A 5005 JIS A 5011-1～4 JIS A 5021	設計図書による。	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○



## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
23 覆工コンクリート (NATM)	(JIS マーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合は除く)	その他	骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110 JIS A 5005 JIS A 5011-1~4 JIS A 5021	絶乾密度：2.5以上 細骨材の吸水率：3.5%以下 粗骨材の吸水率：3.0%以下 (砕砂・砕石、高炉スラグ骨材、フェロニッケルスラグ細骨材、銅スラグ細骨材の規格値については適用を参照)	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。	JIS A 5005 (砕砂及び砕石) JIS A 5011-1 (コンクリート用スラグ骨材-第1部：高炉スラグ骨材) JIS A 5011-1 (コンクリート用スラグ骨材-第2部：フェロニッケルスラグ骨材) JIS A 5011-1 (コンクリート用スラグ骨材-第3部：銅スラグ骨材) JIS A 5011-1 (コンクリート用スラグ骨材-第4部：電気炉酸化スラグ骨材) JIS A 5021 (コンクリート用再生骨材B)	○
			粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121 JIS A 5005	40%以下、舗装コンクリートは35%以下 但し、積雪寒冷地の舗装コンクリートの場合は25%以下	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。		○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103 JIS A 5005	粗骨材：1.0%以下 細骨材：コンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合3.0%以下、その他の場合5.0%以下 (砕砂およびスラグ細骨材を用いた場合はコンクリートの表面がすりへり作用を受ける場合5.0%以下その他の場合7.0%以下)	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。 (山砂の場合は、工事中1回/週以上)		○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105	標準色より淡いこと。濃い場合でも圧縮強度が90%以上の場合は使用できる。	工事開始前、工事中1回/年以上および産地が変わった場合。	・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	工事開始前、工事中1回/月以上および産地が変わった場合。		○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122 JIS A 5005	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下	工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。	寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210 (ポルトランドセメント) JIS R 5211 (高炉セメント) JIS R 5212 (シリカセメント) JIS R 5213 (フライアッシュセメント) JIS R 5214 (エコセメント)	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202				○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308付属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308付属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		その原水は、上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
製造 (ブランド)	(JIS マーク表示されたレディミクストコンクリート)	その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 (高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内) 混和剤：±3%以内	設計図書による。	レディミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○
			ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランプ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合： コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下	工事開始前及び工事中1回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m <sup>3</sup> 未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
23 覆工コンクリート (NATM)	使用する場合を除く	その他	ミキサの練混ぜ性能試験	連続ミキサの場合： 土木学会規準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランブ差：3cm以下	工事開始前及び工事中 1 回/年以上。	同上	○
			細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディーミクストコンクリート以外の場合に適用する。	○
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上		○
	施工	必須	スランブ試験	JIS A 1101	スランブ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランブ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			単位水量測定	「レディミクストコンクリートの品質確保について」	1) 測定した単位水量が、配合設計±15kg/m3の範囲にある場合はそのまま施工してよい。 2) 測定した単位水量が、配合設計±15kg/m3を超え±20kg/m3の範囲にある場合は、水量変動の原因を調査し、生コン製造者に改善を指示し、その運搬車の生コンは打設する。その後、配合設計±15kg/m3以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 3) 配合設計±20kg/m3の指示値を超える場合は、生コンを打込まずに、持ち帰らせ、水量変動の原因を調査し、生コン製造業者に改善を指示しなければならない。その後の全運搬車の測定を行い、配合設計±20kg/m3以内になることを確認する。更に、配合設計±15kg/m3以内で安定するまで、運搬車の3台毎に1回、単位水量の測定を行う。 なお、管理値または指示値を超える場合は1回に限り試験を実施することができる。再試験を実施したい場合は2回の測定結果のうち、配合設計との差の絶対値の小さい方で評価してよい。	100m3/日以上の場合： 2回/日（午前1回、午後1回）、または重要構造物では重要度に応じて100m3～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められたときとし測定回数は多い方を採用する。	示方配合の単位水量の上限値は、粗骨材の最大寸法が20mm～25mmの場合は175kg/m3、40mmの場合は165kg/m3を基本とする。	
			コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1108	1回の試験結果は指定した呼び強度の85%以上であること。 3回の試験結果の平均値は、指定した呼び強度以上であること。 (1回の試験結果は、3個の供試体の試験値の平均値)	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20m3から150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。なお、テストピースは打設場所で採取し、1回につき6本（σ7・・3本、σ28・・3本）とする。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
			塩化物総量規制	「コンクリートの耐久性向上」	原則0.3kg/m3以下	コンクリートの打設が午前と午後に来る場合は、午前と午後1回コンクリート打設前に、その試験結果が塩化物総量の規制値の1/2以下の場合は、午後の試験を省略することができる。（1試験の測定回数は3回とする）試験の判定は3回の測定値の平均値。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。 ・骨材に海砂を使用する場合は、「海砂の塩化物イオン含有率試験方法」（JSCE-C502,503）または設計図書の規定により行う。	
			空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5%（許容差）	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m3ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m3未満の場合は1工種1回以上の試験、またはレディーミクストコンクリート工場の品質証明書等のみとすることができる。	
		その他	コアによる強度試験	JIS A 1107	設計図書による。	品質に異常が認められた場合に行う。		
			コンクリートの洗い分析試験	JIS A 1112		1回 品質に異常が認められた場合に行う。		
24 吹付けコンクリート (NATM)	材料	必須	アルカリ骨材反応対策	「アルカリ骨材反応抑制対策について」（平成14年7月31日付け国官技第112号、国港環第35号、国空建第78号）	同左	骨材試験を行う場合は、工事開始前、工事中1回/6ヶ月以上および産地が変わった場合。		○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
24 吹付けコンクリート (NATM)	材料	その他（JISマーク表示されたレディミクストコンクリートを使用する場合は除く）	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	設計図書による。	細骨材は採取箇所または、品質の変更があることに1回。ただし、覆工コンクリートと同一材料の場合は省略できる。粗骨材は採取箇所または、品質の変更があることに1回。		
			骨材の単位容積質量試験	JIS A 1104				○
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110				○
			骨材の微粒分量試験	JIS A 1103				○
			砂の有機不純物試験	JIS A 1105			・濃い場合は、JIS A 1142「有機不純物を含む細骨材のモルタル圧縮強度による試験方法」による。	○
			モルタルの圧縮強度による砂の試験	JIS A 1142	圧縮強度の90%以上	試料となる砂の上部における溶液の色が標準色液の色より濃い場合。		○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	細骨材：1.0%以下 粗骨材：0.25%以下	細骨材は採取箇所または、品質の変更があることに1回。ただし、覆工コンクリートと同一材料の場合は省略できる。粗骨材は採取箇所または、品質の変更があることに1回。		○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122	細骨材：10%以下 粗骨材：12%以下		寒冷地で凍結のおそれのある地点に適用する。	○
			粗骨材の粒形判定実績率試験	JIS A 5005	55%以上			○
			セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202				○
			練混ぜ水の水質試験	上水道水及び上水道水以外の水の場合： JIS A 5308付属書3	懸濁物質の量：2g/L以下 溶解性蒸発残留物の量：1g/L以下 塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上	工事開始前及び工事中1回/年以上および水質が変わった場合。	上水道を使用している場合は試験に換え、上水道を使用していることを示す資料による確認を行う。	○
				回収水の場合： JIS A 5308付属書3	塩化物イオン量：200ppm以下 セメントの凝結時間の差：始発は30分以内、終結は60分以内 モルタルの圧縮強度比：材齢7及び28日で90%以上		・その原水は上水道水及び上水道水以外の水の規定に適合しなければならない。	○
	製造（プラント）	その他	計量設備の計量精度		水：±1%以内 セメント：±1%以内 骨材：±3%以内 混和材：±2%以内 （高炉スラグ微粉末の場合は±1%以内） 混和剤：±3%以内	設計図書による。	・レディミクストコンクリートの場合、印字記録により確認を行う。	○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
24 吹付けコンクリート (NATM)	（JIS マーク表示されたレディーミクストコンクリートを使用する場合は除く）	その他	ミキサの練混ぜ性能試験	バッチミキサの場合： JIS A 1119 JIS A 8603-1 JIS A 8603-2	コンクリートの練混ぜ量 公称容量の場合 コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度平均値からの差：7.5%以下 空気量平均値からの差：10%以下 スランブ平均値からの差：15%以下 公称容量の1/2の場合 コンクリート中のモルタル単位容積質量差0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差5%以下	工事開始前及び工事中 1 回/年以上。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m <sup>3</sup> 未満の場合は1工種1回以上。	○
				連続ミキサの場合： 土木学会規準 JSCE-I 502	コンクリート中のモルタル単位容積質量差：0.8%以下 コンクリート中の単位粗骨材量の差：5%以下 圧縮強度差：7.5%以下 空気量差：1%以下 スランブ差：3cm以下			○
			細骨材の表面水率試験	JIS A 1111	設計図書による	2回/日以上	レディーミクストコンクリート以外の場合に適用する。	○
			粗骨材の表面水率試験	JIS A 1125		1回/日以上。		○
施工	必須		塩化物総量規制	「コンクリートの耐久性向上」	原則0.3kg/m <sup>3</sup> 以下	コンクリートの打設が午前と午後にまたがる場合は、午前に1回コンクリート打設前に行い、その試験結果が塩化物総量の規制値の1/2以下の場合は、午後の試験を省略することができる。（1試験の測定回数は3回とする）試験の判定は3回の測定値の平均値。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m <sup>3</sup> 未満の場合は1工種1回以上。 ・骨材に海砂を使用する場合は、「海砂の塩化物イオン含有率試験方法」（JSCE-C502, 503）または設計図書の規定により行う。	
			コンクリートの圧縮強度試験	JIS A 1108 土木学会規準JSCE F561-2005	1回の試験結果は指定した呼び強度の85%以上であること。 5回の試験結果の平均値は、指定した呼び強度以上であること。 （1回の試験結果は、3個の供試体の試験値の平均値）			
		その他	スランブ試験	JIS A 1101	スランブ5cm以上8cm未満：許容差±1.5cm スランブ8cm以上18cm以下：許容差±2.5cm	・荷卸し時 1回/日または構造物の重要度と工事の規模に応じて20～150m <sup>3</sup> ごとに1回、および荷卸し時に品質変化が認められた時。	・小規模工種で1工種当りの総使用量が50m <sup>3</sup> 未満の場合は1工種1回以上。	
			空気量測定	JIS A 1116 JIS A 1118 JIS A 1128	±1.5%（許容差）			
			コアによる強度試験	JIS A 1107	設計図書による。	品質に異常が認められた場合に行う。		
25 ロックボルト (NATM)	材料	その他	外観検査（ロックボルト）	・目視 ・寸法計測	設計図書による。	材質は製造会社の試験による。		○
	施工	必須	モルタルの圧縮強度試験	JIS A 1108	設計図書による。	1) 施工開始前に1回 2) 施工中は、トンネル施工延長50mごとに1回 3) 製造工場または品質の変更があるごとに1回		

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
25 ロックボルト (NATM)	施工	必須	モルタルのフロー値試験	JIS R 5201	設計図書による。	1) 施工開始前に1回 2) 施工中または必要の都度 3) 製造工場または品質の変更があるごとに1回		
			ロックボルトの引抜き試験	参考資料「ロックボルトの引抜き試験」による		掘削の初期段階は20mごとに、その後は50mごとに実施、1断面当たり3本均等に行う（ただし、坑口部では両側壁各1本）。		
26 路上再生路盤工	材料	必須	修正CBR試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-5	修正CBR20%以上	・ 中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・ 小規模以下の工事：施工前	・ 中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・ 小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ① 施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ② 使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上、3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上、1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	
			土の粒度試験	JIS A 1204	舗装再生便覧参照参照資表-4.7 路上再生路盤骨材の望ましい粒度範囲による	当初及び材料の変化時		
			土の含水比試験	JIS A 1203	設計図書による。			
			土の液性限界・塑性限界試験	JIS A 1205	塑性指数PI：9以下			
		その他	セメントの物理試験	JIS R 5201	JIS R 5210（ポルトランドセメント） JIS R 5211（高炉セメント） JIS R 5212（シリカセメント） JIS R 5213（フライアッシュセメント） JIS R 5214（エコセメント）	工事開始前、工事中1回/月以上		○
			ポルトランドセメントの化学分析	JIS R 5202				○
		施工	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [4]-191	基準密度の93%以上。	1,000m <sup>2</sup> に1回		
			土の一軸圧縮試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-68	設計図書による。	当初及び材料の変化時		
			CAEの一軸圧縮試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-69			CAEの一軸圧縮試験とは、路上再生アスファルト乳剤安定処理路盤材料の一軸圧縮試験を指す。	
			含水比試験	JIS A 1203		1～2回/日		
27 路上表層再生工	材料	必須	旧アスファルト針入度	JIS K 2207		当初及び材料の変化時	十分なデータがある場合や事前調査時のデータが利用できる場合にはそれらを用いてもよい。	
			旧アスファルトの軟化点					
			既設表層混合物の密度試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-91				
			既設表層混合物の最大比重試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-229				

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
27 路上表層再生工	材料	必須	既設表層混合物のアスファルト量抽出粒度分析試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-238		当初及び材料の変化時	十分なデータがある場合や事前調査時のデータが利用できる場合にはそれらを用いてもよい。	
			既設表層混合物のふるい分け試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-14				
			新規アスファルト混合物	「アスファルト舗装」に準じる。	同左			○
	施工	必須	現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [3]-91	96%以上	1,000m2につき1個	空隙率による管理でもよい。	
			温度測定	温度計による。	110℃以上	随時	測定値の記録は、1日4回（午前・午後各2回）	
			かきほぐし深さ	「舗装再生便覧」付録-8に準じる。	-0.7cm以内	1,000m2毎		
		その他	粒度（2.36mmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±12%以内	適宜	目標値を設定した場合のみ実施する。	
			粒度（75μmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	75μmふるい：±5%以内			
			アスファルト量抽出粒度分析試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	アスファルト量：±0.9%以内			
	材料	必須	骨材のふるい分け試験	JIS A 1102	「舗装施工便覧」3-3-2(3)による。	・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前  ・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m2あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m2以上10,000m2未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上、3,000t未満（コンクリートでは400m3以上、1,000m3未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1)アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○	
			骨材の密度及び吸水率試験	JIS A 1109 JIS A 1110	碎石・玉砕、製鋼スラグ（SS） 表乾比重：2.45以上 吸水率：3.0%以下			○
			骨材中の粘土塊量の試験	JIS A 1137	粘土、粘土塊量：0.25%以下			○
			粗骨材の形状試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-45	細長、あるいは扁平な石片：10%以下			○
			フィラーの粒度試験	JIS A 5008	「舗装施工便覧」3-3-2(4)による。			○
			フィラーの水分試験	JIS A 5008	1%以下			○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
28 排水性舗装工・透水性舗装工	材料	その他	フィラーの塑性指数試験	JIS A 1205	4以下	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事：施工前、材料変更時</li> <li>・小規模以下の工事：施工前</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m<sup>2</sup>あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。</li> <li>・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。</li> <li>①施工面積で1,000m<sup>2</sup>以上10,000m<sup>2</sup>未満</li> <li>②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上、3,000 t 未満（コンクリートでは400m<sup>3</sup>以上、1,000m<sup>3</sup>未満）。</li> </ul> <p>ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。</p> <p>1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの</p>	○
			フィラーのフロー試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-65	50%以下			○
			製鋼スラグの水浸膨張性試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-77	水浸膨張比：2.0%以下			○
			粗骨材のすりへり試験	JIS A 1121	碎石・玉砕、製鋼スラグ（SS）：30%以下			○
			硫酸ナトリウムによる骨材の安定性試験	JIS A 1122	損失量：12%以下			○
			粗骨材中の軟石量試験	JIS A 1126	軟石量：5%以下			○
			針入度試験	JIS K 2207	40(1/10mm) 以上			○
			軟化点試験	JIS K 2207	80.0℃以上			○
			伸度試験	JIS K 2207	50cm以上 (15℃)			○
			引火点試験	JIS K 2265-1 JIS K 2265-2 JIS K 2265-3 JIS K 2265-4	260℃以上			○
			薄膜加熱質量変化率	JIS K 2207	0.6%以下			○
			薄膜加熱針入度残留率	JIS K 2207	65%以上			○
			タフネス・テナシディ試験	舗装調査・試験法便覧 [2]-244	タフネス：20N・m			○

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
28 排水性舗装工・透水性舗装工	材料	その他	密度試験	JIS K 2207		・中規模以上の工事：施工前、材料変更時 ・小規模以下の工事：施工前	同上	○
			粒度（2.36mmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±12%以内基準粒度	・中規模以上の工事：定期的又は随時。 ・小規模以下の工事：異常が認められたとき。 印字記録の場合：全数又は抽出・ふるい分け試験 1～2回/日	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上、3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上、1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	○
			粒度（75μmフルイ）	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	75μmふるい：±5%以内基準粒度	・中規模以上の工事：定期的又は随時。 ・小規模以下の工事：異常が認められたとき。 印字記録の場合：全数又は抽出・ふるい分け試験 1～2回/日		○
			アスファルト量抽出粒度分析試験	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	アスファルト量：±0.9%以内			○
			温度測定（アスファルト・骨材・混合物）	温度計による。	配合設計で決定した混合温度。	随時		○
	その他	その他	ホイールトラッキング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-39	設計図書による。	設計図書による。	アスファルト混合物の耐流動性の確認	○
			ラベリング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-17				○
			カンタブロ試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-111				○
舗設現場	必須		温度測定（初期締め前）	温度計による。	140～160℃	随時	測定値の記録は、1日4回（午前・午後各2回）	
			現場透水試験	舗装調査・試験法便覧 [1]-122	X <sub>10</sub> 1,000mL/15sec以上 X <sub>10</sub> 300mL/15sec以上（歩道箇所）	1,000m <sup>2</sup> ごと。		
			現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [3]-97	基準密度の94%以上。 X <sub>10</sub> 96%以上 X <sub>6</sub> 96%以上 X <sub>3</sub> 96.5%以上 歩道箇所：設計図書による	・中規模以上の工事：定期的又は随時（1,000m <sup>2</sup> につき1個）。 ・小規模以下の工事：異常が認められたとき。	・中規模以上の工事とは、管理図を描いた上での管理が可能な工事をいい、舗装施工面積が10,000m <sup>2</sup> あるいは使用する基層および表層用混合物の総使用量が3,000t以上の場合が該当する。 ・小規模工事は管理結果を施工管理に反映できる規模の工事をいい、同一工種の施工が数日連続する場合で、次のいずれかに該当するものをいう。 ①施工面積で1,000m <sup>2</sup> 以上10,000m <sup>2</sup> 未満 ②使用する基層および表層用混合物の総使用量が500t以上、3,000 t 未満（コンクリートでは400m <sup>3</sup> 以上、1,000m <sup>3</sup> 未満）。 ただし、以下に該当するものについても小規模工事として取り扱うものとする。 1) アスファルト舗装：同一配合の合材が100t以上のもの	
			外観検査（混合物）	目視		随時		



品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認
29 プラント再生舗装工	材料	必須	再生骨材 アスファルト抽出後の骨材粒度	舗装調査・試験法便覧 [2]-14		再生骨材使用量500 t ごとに1回。		○
			再生骨材 旧アスファルト含有量	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	3.8%以上			○
			再生骨材 旧アスファルト針入度	マーシャル安定度試験による再生骨材の旧アスファルト性状判定方法	20(1/10mm)以上 (25℃)	再生混合物製造日ごとに1回。 1日の再生骨材使用量が500 tを超える場合は2回。 1日の再生骨材使用量が100 t未満の場合は、再生骨材を使用しない日を除いて2日に1回とする。		○
			再生骨材 洗い試験で失われる量	舗装再生便覧	5%以下	再生骨材使用量500 t ごとに1回。	洗い試験で失われる量とは、試料のアスファルトコンクリート再生骨材の水洗前の75 $\mu$ mふるいにとどまるものと、水洗後の75 $\mu$ mふるいにとどまるものを気乾もしくは60℃以下の炉乾燥し、その質量の差からとめる。	○
			再生アスファルト混合物	JIS K 2207	JIS K 2207石油アスファルト規格	2回以上及び材料の変化		○
	プラント	必須	粒度 (2.36mmフルイ)	舗装調査・試験法便覧 [2]-14	2.36mmふるい：±12%以内 再アス処理の場合、2.36mm：±15%以内 印字記録による場合は、舗装再生便覧表-2.8.5による。	抽出ふるい分け試験の場合：1～2回/日 ・中規模以上の工事：定期的又は随時。 ・小規模以下の工事：異常が認められるとき。 印字記録の場合：全数		○
			粒度 (75 $\mu$ mフルイ)		75 $\mu$ mふるい：±5%以内 再アス処理の場合、75 $\mu$ m：±6%以内 印字記録による場合は、舗装再生便覧表-2.8.5による。			○
			再生アスファルト量	舗装調査・試験法便覧 [4]-238	アスファルト量：±0.9%以内 再アス処理の場合、アスファルト量：±1.2%以内 印字記録による場合は舗装再生便覧表-2.8.5による。			○
		その他	水浸ホイールトラッキング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-57	設計図書による。	同左	耐水性の確認	○
			ホイールトラッキング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-39			耐流動性の確認	○
			ラベリング試験	舗装調査・試験法便覧 [3]-17			耐磨耗性の確認	○
	舗設現場	必須	外観検査 (混合物)	目視		随時		
			温度測定 (初期締固め前)	温度計による。			測定値の記録は、1日4回 (午前・午後各2回)	
			現場密度の測定	舗装調査・試験法便覧 [3]-91	基準密度の94%以上。 再アス処理の場合、基準密度の93%以上。	・締固め度は、10個の測定値の平均値X10が規格値を満足しなければならない。また、10個の測定値が得たい場合は3個の測定値の平均値X3が規格値を満足していなければならないが、X3が規格値をはずれた場合は、さらに3個のデータを加えた平均値X6が規格値を満足していればよい。 ・1,000m <sup>2</sup> につき 1 個 ・1,000m <sup>2</sup> 未満の工事 (ただし維持工事は除く) ・1 工事に付き任意の 3 個		
30 工場製作工 (鋼橋用鋼材)	材料	必須	外観・規格 (主部材)	現物照合、帳票確認		現物とミルシートの整合性が確認できること規格、品質がミルシートで確認できること。		○
			機械試験 (JISマーク表示品以外かつミルシート照合不可な主部材)	JISによる	JISによる	JISによる	試験対象とする材料は監督職員と協議のうえ選定する。	
			外観検査 (付属部材)	目視および計測				
31 ガス切断工	施工	必須	表面粗さ	目視	主要部材：50 $\mu$ mRy以下 二次部材：100 $\mu$ mRy以下		表面あらさは、JIS B 0601に規定する表面の粗度をあらわし、50 $\mu$ mRyとは表面あらさ50/1,000mmの凸凹を示す。	
			ノッチ深さ	・目視 ・計測	主要部材：ノッチがあつてはならない 二次部材：1mm以下		ノッチ深さとは、ノッチ上縁から谷までの深さを示す。	

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認				
			スラグ	目視	塊状のスラグが点在し、付着しているが、こん跡を残さず容易にはく離するもの。							
			上縁の溶け						わずかに丸みをおびているが、滑らかな状態のもの。			
		その他	平面度	目視	設計図書による（日本溶接協会規格「ガス切断面の品質基準」に基づく）							
			ベベル精度							計測器による計測		
			真直度									
32 溶接工	施工	必須	引張試験：開先溶接	JIS Z 2241	引張強さが母材の規格値以上。	試験片の形状：JIS Z 3121 1号 試験片の個数：2	・溶接方法は「日本道路協会道路橋示方書・同解説」Ⅱ鋼橋編17.4.4溶接施工法 図-17.4.1開先溶接試験溶接方法による。 ・なお、過去に同等もしくはそれ以上の条件で溶接施工試験を行い、かつ施工経験をもつ工場では、その時の試験報告書によって判断し、溶接施工試験を省略することができる。	○				
型曲げ試験（19mm未満裏曲げ） （19mm以上側曲げ）：開先溶接	JIS Z 3122	亀裂が生じてはならない。ただし、亀裂の発生原因がブローホールあるいはスラグ巻き込みであることが確認され、かつ、亀裂の長さが3mm以下の場合には許容するものとする。	試験片の形状：JIS Z 3122 試験片の個数：2	○								
衝撃試験：開先溶接	JIS Z 2242	溶接金属および溶接熱影響部で母材の規格値以上（それぞれ3個の平均）。	試験片の形状：JIS Z 2242 4号 試験片の採取位置：「日本道路協会道路橋示方書・同解説」Ⅱ鋼橋編17.4.4溶接施工法 図-17.4.2衝撃試験片 試験片の個数：各部位につき3	○								
マクロ試験：開先溶接	JIS G 0553に準じる。	欠陥があつてはならない。	試験片の個数：1	○								
非破壊試験：開先溶接	JIS Z 3104	引張側：2類以上 圧縮側：3類以上	試験片の個数：試験片継手全長	○								
マクロ試験：すみ肉溶接	JIS G 0553に準じる。	欠陥があつてはならない。	試験片の形状：「日本道路協会道路橋示方書・同解説」Ⅱ鋼橋編17.4.4溶接 図-17.4.3すみ肉溶接試験（マクロ試験）溶接方法および試験片の形状 試験片の個数：1	・溶接方法は「日本道路協会道路橋示方書・同解説」Ⅱ鋼橋編17.4.4溶接施工法 図-17.4.3すみ肉溶接試験（マクロ試験）溶接方法及び試験片の形状による。 ・なお、過去に同等もしくはそれ以上の条件で溶接施工試験を行い、かつ施工経験をもつ工場では、その時の試験報告書によって判断し、溶接施工試験を省略することができる。	○							
引張試験：スタッド溶接	JIS Z 2241	道路橋示方書・同解説による	試験片の形状：JIS B 1198 試験片の個数：3	なお、過去に同等もしくはそれ以上の条件で溶接施工試験を行い、かつ施工経験をもつ工場では、その時の試験報告書によって判断し溶接施工試験を省略することができる。	○							
曲げ試験：スタッド溶接	JIS Z 3145	溶接部に亀裂を生じてはならない。	試験片の形状：JIS Z 3145 試験片の個数：3		○							
			突合せ継手の内部欠陥に対する検査	JIS Z 3104	引張側：2類以上 圧縮側：3類以上	RTの場合はJIS Z 3104による。 UTの場合はJIS Z 3060による。		「鋼道路橋の疲労設計指針H14.3」による継手の設計を行っている場合は、疲労強度等級の条件によること。（等級に応じて、内部キズの規格値は3mm以下あるいは、板厚/6mm以下となる）	○			
			外観検査（割れ）	・目視	あつてはならない。	検査体制、検査方法を明確にした上で目視検査する。目視は全延長実施する。ただし、疑わしい場合は、磁粉深傷法又は浸透液深傷法を用いる						

## 品質管理基準及び規格値

工 種	種 別	試験区分	試験項目	試験方法	規格値	試験基準	摘 要	試験成績表等による確認	
			外観形状検査（ビード表面のビット）	・目視及びノギス等による計測	主要部材の突合せ継手及び断面を構成するT継手、かど継手には、ビード表面にビットがあつてはならない。その他のすみ肉溶接及び部分溶込み開先溶接には、1継手につき3個又は継手長さ1mにつき3個までを許容するものとする。ただし、ビットの大きさが1mm以下の場合、3個を1個として計算するものとする。	検査体制、検査方法を明確にした上で、目視確認により疑わしい箇所を測定する。目視は全延長実施する。			
			外観形状検査（ビード表面の凹凸）		ビード表面の凹凸は、ビード長さ25mmの範囲で3mm以下。				
			外観形状検査（アンダーカット）		アンダーカットの深さは、0.5mm以下でなければならない。		「鋼道路橋の疲労設計指針H14.3」による継手の設計を行っている場合は、疲労強度等級の条件によること。（等級に応じて、アンダーカットの規格値は0.3mm以下あるいは、0.0mmとなる）		
			外観検査（オーバーラップ）	・目視	あつてはならない。	検査体制、検査方法を明確にした上で目視検査する。			
			外観形状検査（すみ肉溶接サイズ）		すみ肉溶接のサイズおよびのど厚は、指定すみ肉サイズおよびのど厚を下回つてはならない。ただし、1溶接線の両端各50mmを除く部分では、溶接長さの10%までの範囲で、サイズおよびのど厚ともに-1.0mmの誤差を認めるものとする。		検査体制、検査方法を明確にした上で、目視確認により疑わしい箇所を測定する。目視は全延長実施する。		
			外観形状検査（余盛高さ）		道路橋示方書・同解説による				
			外観形状検査（アークスタッド）		・余盛り形状の不整：余盛りは全周にわたり包囲していなければならない。なお、余盛りは高さ1mm、幅0.5mm以上 ・クラックおよびスラグ巻込み：あつてはならない。 ・アンダーカット：するどい切欠状のアンダーカットがあつてはならない。ただし、グラインダー仕上げ量が0.5mm以内に納まるものは仕上げて合格とする。 ・スタッドジベルの仕上り高さ：（設計値±2mm）をこえてはならない。				
		その他	ハンマー打撃試験	ハンマー打撃	われなどの欠陥を生じないものを合格。	外観検査の結果が不合格となったスタッドジベルについて全数。 外観検査の結果が合格のスタッドジベルの中から1%について抜取り曲げ検査を行なうものとする。	・余盛が包囲していないスタッドジベルは、その方向と反対の15°の角度まで曲げるものとする。 ・15°曲げても欠陥の生じないものは、元に戻すことなく、曲げたままにしておくものとする。		